

金の星

Z32-B88

三月号



第三号

第八卷

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM Kodak

Kodak Gray Scale

C Y M

© Kodak, 2007 TM Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

世界少年少女偉人傳大系(2) 霜田史光先生著・裝幀寺内萬治郎畫伯
挿畫柳田謙吉畫伯

ローマ 英雄シーザー

世界の英雄中で一番の人氣者は、何といつても古代ではジュリアス・シーザー、近代ではナポレオンであります。しかもシーザーは、ローマの古い時代に活躍した大英雄だけにまた特別の面白味があります。ローマをあれ程立派な大國にしたのはシーザーの力でありました。命懸けの戦争は何度やつたか知れませんが、しかも其の當時は、勝てば征服者となり負ければ奴隸にされて了ふやうな恐ろしい時代でしたから、英雄と英雄とは互に火華を散らして戦ひました。

シーザーの一生は、最初から終りまで真に大英雄としての生涯でありました。本國を追はれて流浪の旅に送つた幼年時代から、最後にローマの元老院で敵のために刺し殺されるまでの繪巻物の如き一生は、親友アントニーのシーザーに對する葬ひの大演説と共に、今なほ語り傳へられて世界の歴史を飾つてゐます。

本書は少年少女の爲めに書かれた最もよいシーザー傳であります。

四六判箱入頗美本
内容一九〇頁
挿畫三色版外數頁
定價金九拾錢
送料六錢

東京本郷動坂町
金星社
東京五九五六番

お伽王國

オハナシ

四六倍判假裝全五冊 定價各一圓
紙數各冊八十頁 送料各八錢

巖谷小波 著
岡野榮、小林龍吉、杉浦非水 著

日本の畫噺

袖珍假裝全三十五冊 定價各二十五錢
紙數各冊三十餘頁 送料各四錢

巖谷小波 著
太田三郎、岡野榮、細木原靜哉 著

オトギウタ

四六倍判假裝全三冊 定價各八十錢
紙數各冊三十餘頁 送料各六錢

(書圖俗通定鑑省部文)
お伽し——それはお子さんたちの成長に作ふ止みがたい留置の表現です。篇々ちのたつたお話はお子さんたちにどれ程大きな糧となるか豊り知れないものがあることは否めない事實です。鹿島先生のお話は直ちにお子さんたちの心に強く入つてゆくことを信じます。

お子さんたちの一番のお友達はお伽噺と動物の世界です。その抱く想像力は到底大人の及ばぬ夢の國の美しい宮殿です。小波先生はお子さんたちのお相手として少しも不満のない物語りを精麗な繪に添へて書いて下さつたのがこれです。

見るものも聞くものも、お子さんたちにとつて、それはすべて歌びです。歌びを感じたとき誰しもきつと唱へずには居られないでしょう。これは美しい繪と一緒に次々と讀いてくる小波先生のお伽噺、さあ皆して唱ひませう。唱ひませう。

東京日本橋通
丸善株式會社
東京・田三・田丸
大 神 京 名
戸 都 屋
阪 門 都

世界少年少女偉人傳大系 (1) 大木雄三先生著・裝幀 寺内萬治郎畫伯
挿畫 柳田謙吉畫伯

ドンヌダルク

馬上にフランス國旗をかざして「進め！進め！」と叫ぶ聲が聞えては来ませんか。ジャンヌ・ダルクの名を聞いただけで、必ず皆さんの耳に此の可憐な少女の叫び聲が響く事と思ひます。

今から四百年程前、丁度ヨーロッパは、麻の如く亂れてをりました。フランスはイギリスと戦つてをりました。しかも、戦ひ利あらず、首都のパリは敵軍に包圍されて、フランスは今にも滅亡しようとしてゐました。その時、忽然として母國を救ふ爲めに、奮ひ起つたのは田舎娘のジャンヌ・ダルクでありました。彼女の女がどんな働きをしたか、皆さん御存知であります。

本書はジャンヌ・ダルクがまだ田舎の少女として暮してゐた當時からはじまつて、最後に敵軍にとらへられて火あぶりの刑に處せられ、平然として天使の如く死んで行くまでの、驚しい、勇しい彼女の一生を書いたものでありますから、是非御一讀下さい。

四六判箱入美本
内容一八〇頁
挿畫三色版外數頁
定價金九拾錢
送料六錢

東京本郷動坂町
金星社
振替東京五九五六番

世界少年少女偉人傳大系 (3) 三井信衛先生著・裝幀 寺内萬治郎畫伯

ネルソン

勇將ネルソンの名は、ナポレオンと同様に知らない人はいないでせう。トラファルガルの大海戦に打死したネルソン！その勇壯な場面は、永く傳へられて歴史を飾つてゐます。

命を賭けての戦は幾度であつたか知れない軍神ネルソンは、そも／＼如何なる人であつたか。先づ本書を一讀せられよ。

幼い時からあらゆる困難と戦ひ、負けず嫌ひで十二歳の時から水夫生活をはじめ、忽ちにして英國の大海軍の指揮者となつて、幾度か母國の危機を救ひました。正義の念に強く、國家を愛し、部下には慈父の如く慕れ、しかも、常に鐵の如き意志を以て事に望んだネルソンこそ、世界的偉人として恥しからぬ人であります。

諸君！爲すあらんと欲する人は、先づこのネルソン傳を讀まれよ。そして、弱い心を鞭うたれよ！

四六判箱入願美本
内容一九〇頁
挿畫三色版外數頁
定價金九拾錢
送料六錢

東京本郷動坂町
金星社
振替東京五九五六番

世界少年少女名著大系 (21) 金の星社編・装幀寺内萬治郎畫伯

母を尋ねて三千里(多)

四六判箱入美本
内容一九〇頁
挿畫三色版外數頁
定價九拾錢
送料六錢

本書は伊太利文豪アミチスの作った世界的名作であります。「クオレ」の名で、全世界の少年少女から熱烈な愛讀を受けました。
さて、「クオレ」は何によつて有名かといひますと、「月次講話」といふ幾つかの物語りがあつたからであります。で、本書は、その「月次講話」の中で最も有名であり、又最も讀んで見て面白くものばかりを集めました。
『母を尋ねて三千里』『難破船』『父ちゃんの看病』『少年斥候』『少年筆工』『ローマニヤの血』『少年鼓手』等何れも不朽の名作であります。三千里の道を遙々と母を尋ねて行く少年の哀話もあり、又難破船に乗り込んで自分の身を捨て、少女を救ふ勇敢な少年の話もあり各篇とも一生忘れられぬ物語りばかりです。
名著大系の第二十一篇として發行された本書こそ、是非皆さんの一讀せねばならぬ偉い名著であります。

東京 本郷 動坂 金星社
振替 東京 五九五九 六番
郵政 振替 東京 五九五九 六番

少年少女世界名篇物語

四六判箱入美本・定價各冊金九十錢・送料二十錢

甲田正夫先生著 ◇ 高坂元三装幀挿畫

第二編 八犬傳物語

本文一五九頁
挿畫十數葉

癒々發行

日本の小説の中で、八犬傳ほど、世に廣く讀まれたものはありません。八犬士それだけの、面白い中に勇ましい話や、哀れな物語のある、千變萬化、興の盡きない本書は、第一編に引つゞき、皆さまの御賞讃をいたゞくこと、存じます。
名高い芳流閣の大格闘や、庚申山の山猫退治なども、皆この中にあります。

第一編

赤穂義士物語

第三編

クオ・ヴァ・ヂス

第四編

膝栗毛物語

第五編

水滸傳物語

振替 東京 一七六一 〇番
電話 浅草 七四六 七番

東京 市外 金蘭社
振替 東京 八二八 〇番



挿	支那人のニヤ／＼笑ひ	寺内萬治郎・水島爾保布 岡本歸一・柳田謙吉
出版者	だだよ	
通	中	
山	の	
試	景	
験	信	
の	色(自由書)	
こ	日(綴方)	
も	野口雨情選	(三)
鎮西の八郎	齋藤佐次郎選	(二)
梅	山本	(一)
蚤	若山牧水	(四)
あ	土橋里木	(三)
お	久米絃一	(二)
左官蜂の話	湊一訓	(一)
天人のお嫁さん	宮嶋資夫	(三)
西川喜平		

天	五百七號室	野口雨情選
鳥	が越える	
青	い月夜の約束	
指	郎さんのイギリス行	
漫	畫芝居コドモ座	
山	の	
愛	犬物語	
猪	狩の武士と少年	
同	作	
狐	の提灯	
怪	椿の咲く	
春	の訪	
目次		
れ	(表紙・石版)	寺内萬治郎
頃	(口絵・三色版)	岡本歸一
人	(口絵・一色版)	寺内萬治郎
野口雨情		
本居長世		
鈴木氏亨		
小島政二郎		
河盛久夫		
沖野岩三郎		
入交總一郎		
杜仙之介		
三井信衛		



椿つばき
咲さ
く
頃ころ
(金の星書)
岡本歸一書

人^{じん}

怪^{かい}



(いさ下覽御を室號七百五)

寺内萬治郎畫

今
ス
グ

入
會
せ
よ

本會の十大特長

- 一、創立が古い
- 二、基礎が固い
- 三、設備が完全
- 四、信用が絶大
- 五、學制が正しく
- 六、講師が一流
- 七、講義が平明
- 八、指導が懇切
- 九、會費が安く
- 十、卒業が早い



大日本國民中學會

(輕井澤に於ける尾崎會社)

創立二十三年、

第四十四回新學期開講

入會の絶好期來る!!

東京神田駿河臺

大日本國民中學會

電話七五五〇・一〇七番

振替東京四二〇〇番

創立は一番古く内容は一番新しい
日本一の中學講義錄

講義錄見本つき規則書申込み次第無代進呈

講義全部改訂
目下入學者には
大特典提供

沖野岩三郎先生著・装幀 柳田謙吉畫伯・

四六判箱入三二〇頁
定價金壹圓八拾錢・送料六錢

日本の児童と藝術教育

著名の題問
！る現よいよい

本書一冊によつて讀者の思想に大變化を來さすべき使命を帯びた一大著述であります。沖野先生の三十年來の體驗と思索から生れ出でた本書こそ、わが國の児童教育及文學にたづさはる何人も、一讀せねばならぬ本であることは言ふまでもありません。内容三百餘頁、一々一大警鐘となつて皆さんの胸を打つてせう。

殊に『現代の日本の児童に如何なる童話を與ふべきか。』に就ての著者の大抱負を聽かれよ。

東京 本郷 町 坂 動 星 社
振替 東京 五九六 番
電話 五九六 番

赤い猫

装幀・装畫・岡本歸一畫伯、寺内萬治郎畫伯
四六判箱入美本・内容一五〇頁・送料金壹圓
日本で出来た最初の童話讀本であつて、又最も立派な童話讀本として大評判の本です。各篇とも面白いこと此の上なく、しかも深い教訓を持つたものばかりなので、沖野先生の大傑作集ともいはれてゐます。是非一度は讀んで置かなければならない名著です。

沖野岩三郎先生の二大童話讀本

金の釣瓶

装幀・装畫・寺内萬治郎畫伯、水島爾保布畫伯
四六判箱入美本・内容一五〇頁・送料金壹圓
『赤い猫』と同様大評判を受けてゐる童話讀本です。沖野先生の童話讀本は、本書の發行によつていよいよ有名になつて、各學校の課外讀本として最もよい本であるばかりでなく、少年少女を持つた家庭には是非備へねばならないといふ讃辭を受けました。

振替 東京 五九六 番
電話 五九六 番

東京 本郷 町 星 社
振替 東京 五九六 番
電話 五九六 番

星の金 世少年少女著名大系 編 社

錢六金料送・錢十九金冊各價定・本美頗入箱判六四

編一第

ロビンソン漂流記

船乗りになつて、遠い國々へ行きたいとあこがれてゐたロビンソンが、途中で難船に出遭ひ、無人島へ流されて、艱難辛苦して再び本國へ歸るまでの長い物語りです。これ程澤山讀まれた本はない。この本を讀まない者は、一生の不幸です。

編二第

ナポレオン物語

ナポレオンの一代記です。地中海の小島コルシカに生れた一少年がナポルトン、ナポレオン大帝と稱せられて歐洲を征服する榮華の時代から、遂に南大西洋の一孤島セント・ヘルナで淋しい死を遂げるまでの變化極りない物語です。

編三第

ドン・キホーテ

イスパニヤの有名なお話。毎日騎士の物語りを讀んでゐる内に、氣が少し變になつて、自分が騎士になつたやうに思ひ込んでしまひ瘡馬に乗つて本當に武者修業の旅に出かけ、到るところで大失敗をして、遂におはれな死をとげるといふ痛快な物語りです。

編四第

コロンブス物語

アメリカ大陸を發見した大偉人コロンブスの物語りです。コロンブスがあらゆる困難と戦つて、遂にアメリカ大陸を發見するまでの變化極りない運命を書いた血と涙の物語りです。この偉人の傳記を書いた本は餘りないので、非常にめづらしい本です。

編五第

大人國小人國めぐり
ガリバー旅行記

ガリバーが、難船して小人國に漂流して、奇想天外の滑稽をやリ、再び航海に出て大人國に漂流し、そこでさん／＼目にあひ、漸く驚にさらはれて、本國に歸つて来るまで實に面白い物語りです。

星の金 世少年少女著名大系 編 社

錢六金料送・錢十九金冊各價定・本美頗入箱判六四

編六第

ロビンフッド物語

英國に傳へられた有名な物語りです。もとは俗話であつたロビン・フッドが悪い男のために國を棄れて遂に義賊となつて、シャウワッドの森にかくれ、王を救ふ戦を起したり、悪い僧正をやつつけたり、そして最後に毒殺されるまでの變化の多い物語りです。

編七第

アラビヤナイト

アラビヤナイト程面白い物語りは、世界の童話文學を通じてないといはれてゐます。千年餘の間も語り傳へられた物語りである事を考へても、如何にこの物語りが讀者に興味を興へてゐるかかわかります。アラビヤナイトの中でも、特に面白いのばかりが集つてゐます。

編八第

ギリシヤ神話
オデッセー物語

ギリシヤの時空ホーマーの作であつて、世界中で一番古い、そして又一番面白い物語りです。トロイの戦争に遙々海を越えて出征した勇士オデッセーが神の怒にふれ、途中ありとあらゆる困難に出遭ひ、遂に乞食となつて本國に歸る迄の物語りです。

編九第

シェークスピア物語

有名なシェークスピアの芝居の中で、面白いものばかりを選んで、物語り風に書いたものです。『テンベスト』『御意のま』『ベニスの商人』『がみ／＼女』『夏の夜の夢』『冬の夜はなし』等、是非一度は讀んで置くべき物語りです。

編十第

グリム童話

グリムの童話は改めて述べるまでもなくドイツの有名な傳説研究家グリム兄弟の作つたもので各篇ともドイツの各地に傳へられた國民童話である。しかし、少年少女の童話として讀ばれてゐる程有名なものになつてゐる。本書の中に集められた作はグリムの数多くの作の内、最も有名な面白作ばかりである。童話の愛好者及研究家の御一讀を待つ。

星の金 系大著名女少年少界世 編社

錢六金料送・錢十九金冊各價定・本美頗入箱判六四

編一十第

入 繪
イソップ物語

イソップ物語は古くから知られてゐる話だけに、これまで、随分深山の本が出てゐる。しかし本書の如く、一つのお話に一枚づゝの立派な圖を入れて、お話と畫と兩方で面白く讀ませる本は他にない。金の星社が最も自慢の本の一つとして、是非皆さんに見ていただきたい。

編二十第

神 日 本
古事記物語

『古事記物語』ほど立派な神話は、恐らく世界の何れの國にもあるまい。實際驚く程立派な、面白い物語りである。日本の國がはじめて出来た話から始つて神々の誕生や、天照大神や、大國主の命の話や、それこそすつと末になつて、雄略天皇の御代までの神話である。

編三十第

子供キリスト傳
新 約 物 語

二千年後の今日まで、世界の救世主としてあがめられてゐるイエス、キリストの一生を聖書に従つて最も正確に書いた本である。この偉い人の一生を子供ののために書いたものは他にない。本書はわが國にあらはれた最初の子供キリスト傳として廣く世に紹介したい。

編四十第

西 遊 記

支那から印度へ、はる／＼お經を取りにわつた玄奘三藏の旅を書いたもので、お供には悟空、八戒、沙悟淨の三人の怪物がつひて行き、途中で様々の魔物に出遇ひ奇々怪々の物語。一度讀み出したら本を置けない世界的の名作。この本を讀まない者は不幸である。

編五十第

ローマ英雄物語

ローマの英雄を中心に、ローマ歴史を書いたもので、すから、面白い一大英雄傳です。ローマを最初に開いたロムルスとレマスの不思議な物語りから、シーザーやハンニバルなどの大英雄の合戦の話など、順々にあらはれ息もつけぬ面白い物語りです。

星の金 系大著名女少年少界世 編社

錢六金料送・錢十九金冊各價定・本美頗入箱判六四

編六十第

こ ども
舊 約 聖 書 物 語

『バイブル物語』とも呼ばれ、歐米各國の少年少女が、幾度となく讀み終ひ有名なお話です。日本の『古事記』のやうなお話で、ユダヤの國の昔にあらつた、神様と人間との不思議な物語りです。『新約物語』と一しよに讀んだら、聖書のことかわかつて面白味が深いでせう。

編七十第

奴 隸 ト ム 物 語

白人種のために犬猫同様にあつかはれてゐた奴隸の涙の物語りです。偉人リンコンが現れるまで、米國のあはれた奴隸たちの生活を書いたもので、米國の最初の頁から最後の頁まで涙なしに讀めぬ本です。偉大、崇高な氣持が、この本によつてどんなに養はれることとせう。

編八十第

ギリシヤ英雄物語

日本にはじめて紹介されたギリシヤ英雄の物語りで、原著は有名な英國文豪キングズレーです。傳説に従つて書かれたものだけに、その面白さは格別です。どの勇士のお話も、實に面白くて、胸をおどらせるものばかりです。かういふ面白い話を知らずに済ませるのは残念です。

編九十第

アンデルセン童話

世界第一の童話作家アンデルセンの童話は何人も讀んで置かなければならぬほど尊い世界の寶です。本書に收めた作は、アンデルセンの作の中で最も代表的なものになつてゐる立派な作ばかりですから、本書一冊を讀めばアンデルセンの作が全部わかるわけです。立派な傑作集です。

編十二第

小 公 子

幼くして父を失ひ、神の如く氣高き母を持つた小公子の運命を書いた物語りです。世界的に有名な家庭小説にして我が國にも早くから知られてゐましたが少年少女のために紹介されたのは本書が最初です。原作はバーネット女史の作で、全篇清い愛と涙と教訓に満ちたされてゐます。

家なき子

三宅房子先生譯

四六判美本・内容二七〇頁

定價金壹圓八拾錢
送料金六錢

家なき娘

三井信衛先生譯

四六判 美本・内容三六〇頁

定價金壹圓九拾錢
送料金六錢

青眼の人形

野口雨情先生著 裝幀 蔭谷紅兒書伯
挿畫 寺内萬治郎書伯
武井武雄書伯

細表紙箱入美本・定價金壹圓八拾錢
内容 二三〇頁・送料 拾 貳 錢

雨情先生の童話集で目下發行中のものは本
書あるのみ。先生の最も圓熟せる時代の傑
作のを集めた本書こそ、童話研究家の座
右に無くてならぬ名著である。好評忽ち五
版!

金の星童謡曲譜第九輯

中山晉平先生作曲

(目 曲)

あまの町まち・この町まち・木きの葉はのお舟ふね・高かう野や山さん・
鼠ねずみのおばさん・狸たぬきばやし・雀すずめなどり

『あの町この町』は中山先生の作曲中で、最大の傑作と稱せられてゐるばかりでなく、又日本童謡作曲中での一、二を爭ふ名曲であります。尚、他の五曲も寶玉の如き作であります。大好評を受けてゐるものばかりです。愛好家に捧げて御批評を待つ。

東動 京坂 市町 本三 郷五 區九 金の星社 振五 替九 口五 座九 東六 京番

東 京 本 郷
勤 坂 町
振 替 東 京 五 五 九 五 番
電 話 小 石 川 三 五 八 六 番

童謡 曲譜
あの町この町

狐の提灯

作曲 本居長世

作詞 野口雨情

軽く遠かに



きつねのちやんぽー きつねのちやんぽー



ボーボー きつねの ちやんぽーれつボー



三



か は さんさくた てんからおかねがふってくる

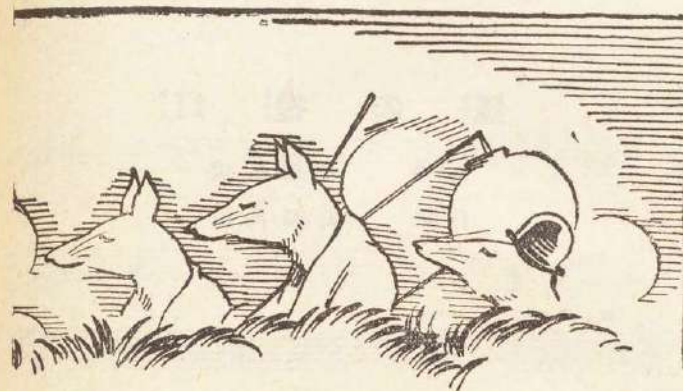


は ま は だいふだ うみからおかねがわいてくる



ボーボー きつねの ちやんぽーれつボー

二



狐の提灯

野口雨情

岡本歸一畫

狐の提灯 ボウ

ボウボウ狐の

提灯行列 ボウ

陸は萬作だ

天からお金が降つて来る

狐の提灯 ボウ

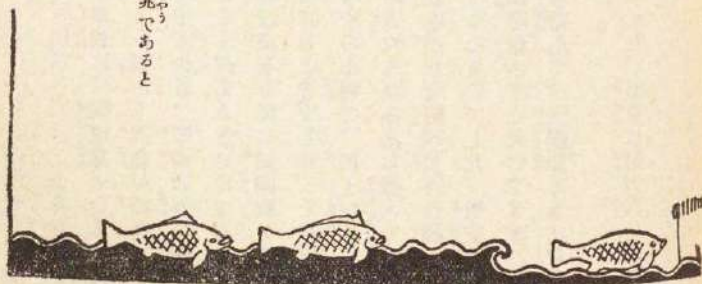
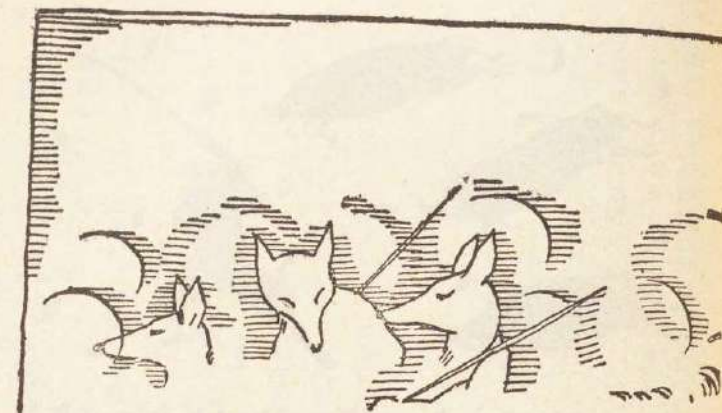
濱は大漁だ

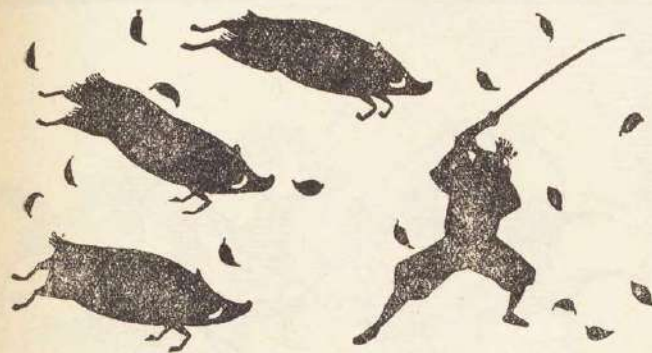
海からお金が湧いて来る

ボウボウ狐の

提灯行列 ボウ

(註。狐火の多い處は、大漁萬作の前兆であると東北地方に言ひ傳へがります)





猪狩りの武士少年

鈴木 亨

水島 爾保 布畫

一
昔、信濃國小縣郡の小泉村に、縣道玄といふお醫者さんがありました。小さい頃から武藝が好きで、一生懸命に修業したもんですから、醫術の外に劍術でも柔術でも人に負けたことがありませんでした。道玄が若い時分、武者修業をして、同國駒ヶ嶽麓の奥山村に滞在してゐた時のことでした。その村は家といつても二十軒足らずの小村で、田も畑もありませんでしたから、村の人たちはみんな獵人で鳥や獸を取つて賣つたり、炭を焼いて町へ賣りに行つたりしては、暮らしを立てゝゐるのです。道玄は其處で村人に頼まれて劍術を教へてゐたのですが、村人は道玄を先生くんと尊敬して、大變厚くもてなしてゐました。

その年のくれのことでした。道玄は村の人に向かつて、

はぐつすり寝ました。

二

「皆さん方は始終獵ばかりしてゐるのだから、さぞ立派な腕前だらうと思ふが、一度私に獵をすることゝろを見せてくれまいか。」と云ひますと、村の若い人々は、「御覽に入れる程でもありませんが、春先になると猪狩りを致しますから先生を山へお連れ申して、お飽きになる程御覽に入れませう。」と云ふのでした。

そのうちに春が來ました。ある日、村で一番古い熊十と云ふ老人は、道玄のところへやつて來て、「先生。もう大分温になりましたから、山には猪が澤山遊んでゐるでせうと思ひます。明日にも若い者らを連れて、山へ入つて猪狩りを致しますから、先生もお仕度をなすつて下さい。」と申しました。道玄は、日頃から願つてゐた猪狩りを見ることが出来るので大へん喜びました。すぐ、明日の朝早く出かけることを約束して、その夜

翌る日は夜の明けないうちから、早起きをしてみんな仕度をしました。朝御飯を食へ終つても未だ外は眞暗でした。熊十老人は

「今から出かけますと、山へ入つた頃に夜が明けますから、恰度よろしう御座いませう。」と云つて山路へさしかゝりました。

一行は四十年も獵をしてゐる熊十老人と、血氣勢んな若い者が四人、三郎といふ十四になる少年が一人、それに道玄とみんな七人でした。白い獵犬が二疋、一行の前になつたり後になつたりしてついてきました。

山は未だ雪が積もつてゐました。それが、下の方は凍りついて、上の方だけが解けだしてゐるのですから歩く度にすべります。かういふ山路を歩き馴れ

てゐる村の人達は平氣でしたが、馴れない道玄はほんとうに困りました。一足ごとにづる／＼とすべて逆も危ないのです。しかたがないので、櫓の裏に釘を打ちつけた物を履いて、やうやく進んで行くことが出来ました。

やがて一行は、駒ヶ嶽の山懐の、少し谷間にな



つてゐる處へ着きました。熊十老人は道玄に向かつて、

『私共は山奥に入つて猪を追ひ集めて御覽に入れますから、先生は私共の手際を御覽なさいますよりも、御慰さみに猪を御仕留めになつてはいかがです。で、先生はこゝで待ち伏せしてゐらつしやれば、猪は集つて來ますから、どうぞ澤山御仕留めなさいます。それから、犬が猪を追ひ出して吠えかけましたなら、先生も大きな聲で犬の應援をしてやつて下さい。でないと、犬は猪にやられて了ひますから。……犬は私たちにとつては、案内者ですからなか／＼大切なのでございます。』

と云ひ含めて、道玄一人を残し、皆ちりちりに奥山へ入つて行きました。少年の三郎も火縄銃を携へ、熊十老人の後へついて行きました。

道玄はたつた一人殺されました。やがてしばらくすると遠くの谷間から「ボン」「ボン」といり豆で



もはちけるやうな音が聞えて來ました。續いて、谷向ふの丘で犬の吠る聲がして來ました。道玄はふとその方を見ますと、雪につつまれた小高い丘の上を、大きな猪が十四五疋駆けて行きます。そして、白の雌犬がたゞ一疋でそれへ吠へかけてゐるのです。恰度そこから見てゐると、猪は犬位で犬は猫位

のにしか見えません。

『あつ危い！』道玄は思はず叫びました。もう丘の上では猪と犬が格闘を初めたのです。けれども犬は一疋ですし猪は多勢ですから、見てゐるうちに、犬は取り捲かれて了ひました。道玄はさつき熊十老人から云はれたことを思ひ出して、聲をかけやうとしましたが、何分遠いので、多分かけても駄目だらうと躊躇して、暫く見てゐるうちに、犬は猪の牙にかけられて谷底へまりのやうに投られて了ひました。それなり、犬の吠へる聲は聞えなくなりました。犬は果敢ない最後を遂げたのでした。

『あゝ、可哀さうなことをした。』道玄は聲をかけるので、悪いことをしたと思つてゐるうちに、鐵砲の音はだん／＼近くなつて來ました。道玄は、何時猪が出來来るかもしれない、といふ氣がしましたので、小高い所に登つて、岩を小楯に待ち構へましたが、足場も悪いし、その上に木の枝が低く垂れ

下がつてゐて、刀を思ふさまに振り上げることも出来ないことが分りましたから、刀を木の枝に結び付けて置いて、脇差を抜き、片手は木につかまつて、あたりの草叢の動くのを注意してゐました。

間もなく直ぐ傍の谷間から、大きな猪が三疋、牙をむき出して駆けて來ました。三疋の猪は道玄の居た廣場へ來て、どちらへ逃げたものかと、戸惑ひした様子でしたから、道玄は、これを腕ためしに仕止めてやらうと、

「オー！」

と聲をかけました。と、そのうちの一疋は矢庭に道玄に向かつて飛びかゝつて來ました。道玄は猪が自分の方へ飛びかゝつてくる隙を狙つて、胸の所を真ッ向から、背中までも突き抜けよとばかり突き刺しましたが、猪は皮を少し刺れただけでびくともしません。反つて猛り狂つて、隙もあらば飛びかかつて道玄を一突きにしやうとしてゐます。道玄は

一〇
また同じ胸の所を突き立てましたが、少しも弱つた氣色を見せません。益々死物狂ひになつて、無氣味な叫び聲を立て、飛びかゝつて來ます。道玄は今度こそと、胸の所をまた突き刺すと、流石の猪も三度も突かれたのでとう／＼弱つて、直ぐ下の谷へ轉げ落ちて了ひました。

道玄は、三度目に猪が向つて來た時、自分の體のかはしやうが悪かつたので、胸から腹へかけて牙にかゝつてやられて了ひました。見ると血は着物の上に滲み出てゐます。しかし手當などをしてゐやうものなら命はいくつあつても堪りません。もう直ぐそこには三疋目の猪が先のよりは猛々しく飛びかかつて來てゐるのです。道玄は少し慌て、身をかはすなり切り付けました。それがかへつて幸運になりました。といふのは、猪は鼻の先を切り落とされたからでした。急所を切られた猪は恐ろしい聲を出して、吠えたかと思ふとその儘、屏風を倒す

ように、仰向けに谷へ轉がり落ちて了ひました。こんどは三疋目の猪が、火のやうに兩方の目玉を光らし、口惜しさうに牙を噛み鳴らしながら飛びかゝつて來るのです。胸や腹を切つてもとても駄目だと思つた道玄は、今度は體を反らして、猪の兩方の前足をつかひました。それがうまく圖に當つて、前足を失つた猪は體軀の平均がとれなくなつて、これも谷底へ落ちて了ひました。下の方では死に切れぬ猪の狂ひ廻るのが、物凄く聞えて來ます。

三

道玄ははつとして、猪の牙にかゝつた傷跡をしらべて見ると、木綿の綿入れ二枚と、絹の胴着まで切り裂かれ、腹の中期から脇腹へかけて、九寸ばかりの曳傷を受け、血が止めどなく流れ出るのでした。山中のことゝて充分な手當も出來ず、しかたなく、下帯で傷の所を固く巻き付け、岩にもたれた儘暫く

休んでゐました。

あちこちの谷からは、盛んに鐵砲の音が聞えて來ました。こんなに鐵砲を打たれては、山中の猪がみんな自分の居る所へ逃げ集つて來るに相違ない。いくら自分が劍術に優れてゐても、澤山の猪に一度に飛びかゝられてはかなはない、自分は今に猪の牙で突き殺されてしまふのかと思ふと、道玄は猪狩りなどを見たいと云つたことを後悔せずにはゐられませんでした。こんな獸物のために命を取られるのが残念で残念で情なくなつて來ました。

「だがもう、しょうがない。」

道玄は心の中でかう呟きました。三疋だけは仕留めたのだから村の人々に申しわけは立つが、腹を突き刺したり、鼻を切り落としたり、兩足を切つたりしたのは、武術の先生とも云はれてゐる自分の恥になるから、今度猪が來たなら、胴切りか、眞向からの唐竹割にしてやらう、そして腕の牙えを見せ

てやらうと決心しました。それから今度は脇差を木の枝に結び付けて、長刀を持ち、今までのところよりは稍廣い所へ行つて待ち構へました。



もこれには驚きました。「どうせ命はないものだ、死んでから村の人達に笑はれないやうに、一疋でも多く切り殺してやらう。」と、思ひました。そこでまた、

「オー！」と呼びかけました。聲をかけられると猪は引返しました。逃場を失つた十一疋の猪は、長刀を持つた異様な人間が立つてゐるもんですから、反つて驚いたと見えて、牙を鳴らしながら、簀毛を逆立て、猛然と突き進んで來ました。道玄はもう命はないものと覺悟しました。そして道玄の胴腹目がけて、一番まつさに飛びかゝつて來た猪を、ひよいと身を開くなり、反對に猪の胴を眞二つと切り付けました。すると何の雜作もなく猪の體は二つに切り離されたのです。續いて來るのを同じやうに切り付けると、これも手もなく切り離されました。道玄は偶然猪の急所を見つけたもんですから、これなら何十疋來ても恐ろしくはないと、急に元氣



づきました。

仲間の猪が、二疋も苦もなく殺されたのを見た澤山の猪は、怒り出したものと見えて、四方八方から道玄に飛びかゝつて來ました。しかし猪が飛びかゝつて來る時は、五六間先で狙ひを定めると、

小さな尾をヒョイと立て、それから飛んで來るので、すから、道玄には猪の呼吸がわかりました。その時身をひらりとかはして、道玄の頭の上を飛び越して行くのを切り付ければ、大底好い丁合に胴腹を眞二つに切る事が出来るのでした。もし切り損じて、猪は自分の勢ひで五六間も先の方へ飛んで行くので、直ぐ次の猪に向ふ準備して身構へをすればいいのでした。かうして残りの猪を相手に息もつかず戦つてゐましたがどうやら八疋の猪を眞二つに切り離す事が出来ました。そして残りの三疋はこの勢ひに恐れをなしたと見え、逃げだしてしましました。

道玄は猪退治の呼吸を覺へたので、こんどはもつと澤山出て來ればよいと、急に強がりました。そのうちに鐵砲の音もしくなりました。道玄はこんなに見ごとに切つたのを見たなら、村の人らはさぞ感心するであらう、と得意になつて、皆の歸つ

て来るのを待つてゐました。間もなく熊十老人が歸つて來ました。見ると手には猪の皮を三枚携けて、大位の猪を一疋背中に負ふてをりました。

「この猪は肉も柔らかでおいしいですから、お夕飯の時に先生に差し上げやうと思つて參りました。」と熊十老人は言ひました。それから、その場のありさまを見て、

「さすがに先生様だけあつて、見ごとにお仕留めになりましたなア。」と、大へんに感心したらしく云ひました。さう云はれると道玄も嬉しいので手柄話をしてゐますと、他の若者達も皆二三疋づつの猪の皮を携けて歸つて來ました。そして、初めに道玄が切り付けた三疋の猪が未だ死にきれないで苦しんでゐるのを見て、谷へ下りて行つてその上に乗しかかつて皮を剥ぎました。それから膽を取り出したりしました。皮は敷物になり、膽は藥に用ひられるのでした。

「向つまらないなア。」

道玄は、少年のかう云ふ言葉を聞くと、子供とは云ひながら、武士に向つて無禮な少年だと思ひました。熊十老人も三郎少年が遠慮會釋もなく、あけすけに云ふもんですから、めんどろなことになるなればいゝがと思ひましたが、道玄もこれには何か理窟があるに相違ないと、

「それはどう云ふわけであるか？」と尋ねました。三郎少年は、

「このやうに猪を胴切りになさつては、皮が疵物になつて了ふではありませんか。皮が疵物になつては、皮の値段が安くて取つた甲斐がないのです。」と答へて、まだ話しつゞけました。

「それに先生、向ふの丘で犬と猪が格闘してゐましたが、あんな時には、大きな聲で犬に加勢してやつて下さらなくては犬は負けて了ひます。」と云ひました。

みんな歸つて來たので、愈々引き揚げやうといふ時になつて、少年三郎がまだ歸つて來ないのを發見しました。運が悪くて猪に突き殺されたのではなにかとか、或は山に迷つて行方不明になつたのではないかと、みんなは大へんに心配をしました。

「三郎！三郎！」と、大きい聲で少年を呼びましたが、初めは何の返事もありません。續けて呼んでゐるうちに、向ふの谷から「オーイ」と返事をする聲が聞えて來ました。皆はやつと安心しました。待つてゐると三郎も大きな猪の皮を四枚も携けて歸つて來ました。道玄を初め村の人々はこれを見て思はず顔を見合はしました。三郎は平氣でそのあたりを見てゐましたが、とつせんこんなことを云ひました。「先生！先生は大馬鹿だな。こんな殺しやうでは何十足殺したつて役に立たないではありませんか。それを自慢なさるなんて随分おかしいな。先生は劍術の大先生だと云ふから、餘程強いのかと思つたら、

大へんすまないことをしたと思つてゐたのですから道玄も、

「遠い所だから應援しても駄目だと思つてしなかつたのだ。」

と言ひわけをしますと、熊十老人も、
「遠い所でも、犬に聲さへかけてやれば犬は勢ひがついて決して猪などには負けるものではありません。かへつて猪が恐れをなして逃げて了ふのでした。先生が聲をかけて下さらなかつたから、あの犬は猪に殺されてしまつたのです。白い雌犬でなくては猪狩りの役には立たないので、本當に惜しいことをしました。」

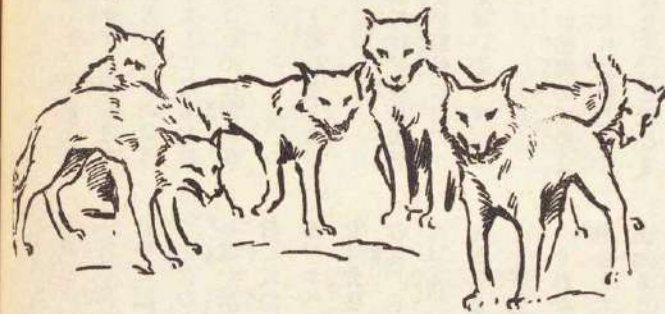
と残念がりました。

それから一行は澤山の獲物をついで村へ歸つて來ました。道玄は、今まで知らなかつたことを、澤山知ることが出來たので、熊十老人や三郎少年に深く感謝しました。

愛犬物語

小島政二郎

寺内萬治郎



五

二匹は暫く睨み合つてゐましたが、そのうちに、隙を見出したのでせう、バツクはいきなり喉を狙つて飛び込んで行きました。が、惜しいことに、もう少しでガブツとそこの柔かい肉を噛み裂くことが出来ようと云ふところで、スピッツの牙にガツチリ受け留められてしまひました。

ガチ／＼と牙と牙とが打ち合つたはずみに、バツクは唇に傷を受けて、タラ／＼と血を流しました。二匹はまた離れて、睨み合ひました。

スピッツは、一騎討ちの勝負には馴れ切つてゐました。しかも、いまだ曾つて負けたことのない犬でした。ですから、初めから勝たうとあせるやうなこととはなく、落ち着き拂つて、決してこつちから攻撃に出るやうなことはありませんでした。相手の攻撃を防いでからでなければ、飛びかゝつて行きません

でした。

ところが、バツクは、これが生れて初めての命の遣り取りでした。ですから、相手を倒すことはかり考へて、ついあせり氣味になりました。

二度目に飛びかゝつて行つたのも、バツクでした。しかし、今度も、危いところで逃げられて、その上、あべこべにヒラリと飛び込んで来た敵のために、右の肩を一噛みやられました。

怒つて、素早く噛み返しに行きましたが、スピッツは巧みにヒラリ／＼と逃げ廻つて、こつちの隙を狙つては、肩へ一撃を加へて飛び退くのです。

バツクは懲りずに、またしても飛びかゝつて行きました。が、今度は喉を狙つたと見せて横からドーンと體をぶつけて、その場へ敵を倒すつもりでした。しかし、スピッツの備へは頭丈で、踏けもしずに飛び退きざまに、またしても肩を一噛み噛み裂いて行きました。

あなた方は相撲を取って御存じでせう、餘計に體を動した者の方が早く息の切れることを……。丁度バツクがそれでした。彼は血にまみれて、苦しげに喘いでゐました。

勝負はいよいよ真剣になつて來ました。

二匹を取り巻いた狼の群からは、どつちかの倒れるのを待つて久振で獲物にありつかうとして吐く息吹が、おもむろに立ちのぼつて、凍つた空中に漂ふのを見ました。

バツクが漸く息を切らし出したのを見て、スピッツは、初めて攻勢に轉じました。攻勢に轉じたとなると、實に電光石火のやうな早業でした。さつと飛び込んで來たかと思ふと、バツクの體は彈かれて、ヨロ／＼と蹣けました。が、立ち直る暇も與へず、スピッツはまたドーンと體をぶつけて來ました。これには流石のバツクも足場を失つて、あはや横ッ倒しに倒れたと見えました。と、五十匹に餘る犬の全

らへながら、三本足でバツクに立ち向つて來ました。バツクは勝ちに乘じて、なほも肩を使つて敵を倒さうとしました。しかし、スピッツもさるもので、蹣けながらもその度に立ち直りました。最後に、バツクはまた前と同じ手を用ゐて、右の前足を深く噛み砕くことに成功しました。

それでも、強情我慢のスピッツは、痛みと不自由とをこらへながら、傷ついた惡魔のやうに荒れ狂つて、戦ひ續けようとしてました。しかし、その時にはもう、例の圓陣が、目を光らせ、舌を吐き出し、銀色の息吹を立ちのぼらせながら、彼の上に迫りつゝ、ありました。それを見定スピッツは、これと同じ圓陣が、これまでに幾度か自分の斃した敵の上に迫るのを見たことを思ひ出しました。

バツクは最後の突撃を試みようとしてました。その間にも、圓陣は次第に輪をちぢめて、彼等の吐く息が、バツクの毛先に感ぜられる程近寄つて來てゐま

軍が、目を輝し涎を滴らして、一齊に飛び出しかけました。が、バツクは猫のやうに、殆んど空中でその身構へを立て直して、ガツチリ四本足の上に立ちただかりました。——圓陣は、失望したやうに、また元に戻つて靜まり返りました。

もうバツクは死物狂ひでした。が、死物狂ひになればなる程バツクに勝ちみはありませんでした。しかし、前にも云つた通り、彼は利口な犬でした。夢中になつて激しく噛み合ひながらも、一方では、頭を働かして戰術を工夫しました。

十分足場の定るのを待つて、バツクはまた攻撃に出ました。肩で敵を弾き倒さうとするやうに見せかけながら、矢庭に頭を低くさげて、下からスピッツの左の前足へ噛みつきました。

力を込めて一噛みすると、ボキ／＼と骨の碎ける音が聞えました。その時には、早くも彼はヒラリと飛びのいてゐました。見れば、スピッツは痛みをこ

した。見れば、スピッツのうしろにも、兩脇にも、恐ろしい目が無數にらん／＼と輝いてゐました。

なせかその時、みんなは一旦ちつと石のやうに息を殺して靜まり返りました。唯スピッツだけが、體をふるはし毛を逆立て、ヨロ／＼と蹣けながら、まはりに迫まつて來る死を追い拂はうとするやうに威しの唸りを低く發してゐました。

バツクは前足に力を入れて身構へたかと思ふと、飛び込みざまに、敵を倒してヒラリと飛びのきました。と、圓陣は忽ち、月光を浴びた雪の大海原の上に、黒い一點の汚點となりました。

バツクは一人英雄のやうに群を離れて、満足さうにこの有様を眺めてゐました。

六

『どうだいベロール。僕が云つた通りだらう、バツクは恐ろしい奴だよ。』

翌る朝、フランソアは、幾ら探してもスビッツが
ゐず、バツクが疵だらけになつてゐるのを見た時、
かう云ひました。彼はバツクを火の傍に引き寄せて、
その光りで疵を調べてゐました。
「見給へ、スビッツはまるで悪魔のやうに噛むんだ
ね。」



ペロールも傍に蹲んで、バツクの體中に口をあけ
てゐる疵跡を眺めながら云ひました。
「しかし、バツクは地獄の鬼のやうに噛むからね。
——まあ、これでいゝや。スビッツさへゐなくなれ
ば、もう面倒はなくなるだらう。」
かう云ひながらフランソアは、バツクの疵の手當
をしてやりました。

それが済んでから、ペロールが昨夜使つたいろん
な道具を櫓に積み込んでゐる間に、犬追のフランソ
アは、一匹づゝ順々に革紐で櫓へ繋ぎにかゝりまし
た。

すると、その時、バツクがツカ〜と、もとスビ
ツクの占めてゐた先導の位置に進み出ました。しか
し、フランソアはついうつかりしてゐて氣が附かず
に、その位置に、片目のソルを連れて來て繋がつと
しました。彼の考へでは、スビッツの亡い後は、ソ
ルが第一等の先導犬だと思つたのでした。ところが、

しかし、幾らバツクが利口でも、まだ權犬になつ
たばかりの南國生れの彼が、むづかしい先導犬にな
れようとは考へられませんでした。

で、フランソアは、

「バツク、どけよ。」と、やさしく向うへ押し遣らう
としましたが、彼は身動きをしようとしませんでした。
した。

「どかないか、バツク。」

今度は稍聲をあらげて、バツクが喉を喰らして威
すのもかまはず、フランソアは首筋を掴んで引きす
り離して、そのあとへまたソルを置き直しました。
ところが、ソルはバツクを恐れてゐる風を示して、
その位置へつくことを、餘り喜んでゐない様子でし
た。

しかし、フランソアは一向そんなことにはお構ひ
なしに、うしろを向いて革紐を拾つて再び向き直つ
て見ると、いつの間にかまた、バツクはソルを追ひ



バツクは猛然と飛びかゝつて、ソルを追ひのけて悠
然とその跡に立ちはだかりました。
「おや、〜。」と、フランソアは面白さうに腿を叩
きながら、「ペロール、見ろよ。バツクの奴、スビ
ツクを殺して後釜を狙つてゐたんだぜ。」

のけて済まして立つてゐました。

「よし。」とう／＼フランソアは腹を立てました。

「そんなに俺の云ふ事を聞かないなら、これを喰つて見ろ。」と、天幕の中から太い棍棒を提げて歸つて来ました。

棍棒を見ると、バツクは恐れて後ずさりしました。

その暇に、フランソアはソルを革紐に附けてしまひました。その間、バツクは棍棒の届かないところまで退いて、物凄く唸り聲を立てながら、ソルとフランソアとのまはりを荒れ狂ひました。しかも、荒れ狂ひながらも、棍棒が投げつけられる時の用心に、絶えず氣を配ることを忘れませんでした。

その外の犬は、何の面倒なしに、皆これまで通りの位置に結びつけられてしまひました。あとは唯、デーブの前のバツクの位置が残つてゐるだけでした。

「バツク、バツク。」

バツクは巧みに體をかはして避けました。

しかし、バツクは遠くへ行つてしまふやうなことはありませんでした。唯その邊を逃げ廻つてゐるだけのことでした。つまり自分の希望さへ容れられれば、喜んで歸つて來る意志を示してゐました。

「畜生。とても叶はない。」

フランソアは、雪の上に腰を卸して降参してしまひました。

「フランソア、もう出發が一時も遅れてゐる。あいつの云ふ通りにしてやらうぢやないか。」

今まで、どんな猛犬だつて、自分の思ひ通りに使ひこなして來た二人は、顔を見合はせて苦笑ひを洩しました。

「なんて利口な犬だらう。」二人ともお腹の中では感心してゐました。

間もなく、フランソアは立ち上つて、ソルの傍へ歩いて行つて、

しかし、彼は近寄つて來ずに、却つて二足三足後ずさりをしました。で、フランソアもそれだけ前へ歩み出ましたすると、バツクはまた退くのでした。

(あゝさうか。撲られると思つてゐるんだな。)そこへ氣の附いたフランソアは、急いで棍棒を捨てました。しかし、それでもバツクは、近寄つて來ませんでした。バツクは實は撲られるのを恐れてゐたのではないのでした。彼は公然と反抗を示したのでした。彼は先導の地位を自分が占めることをフランソアに求めてゐるのでした。バツクに云はせれば、その地位は、彼が命がけで我物にしたのでした。ですから、當然それは自分のもので、その地位を占めるまでは、どんなことがあつても承知しないつもりでした。

ベローが手傳ひに來ました。どうかしてバツクを掴まへようとして二人で小一時間も追ひ廻しました。二人は怒つて、幾度か棍棒を投げつけました。が、

「バツク。」と、呼んで見ました。すると、バツクは鼻に鐵を寄せ、牙を剥いて笑顏を見せましたが、近寄つて來る氣振はありませんでした。

フランソアは、ソルの革具を解いて、もとの位置にかへして、それからもう一度

「バツク。」

と呼んで見ました。彼は、前と同じやうに牙を剥き、體を揺つて笑ひましたが、やつぱり一步も近寄つては來ませんでした。

「棍棒を捨てなければ駄目だよ。」

ベロールに注意されて、フランソアが手から棍棒を放すと、バツクは悠然と歩み寄つて、先導の位置に就きました。

急いで彼の體に革具が附けられると、

「ヒュー。」と云ふフランソアの號令と共に、櫓は靜かに迂り出しました。



山の唄

小山勝清

岡本歸一畫

二四

東京のある大きなビルディングの七階にあるS商會の給仕に、『山の少年』と呼ばれてゐる一少年がおります。

元々山國に生れ、山が好きで私は、なつかしい其のアダ名に誘ひこまれて、商會の重役の人に頼んでその山の少年を紹介して貰ふことにしました。

重役は、私の頼みを心よく引き受けながら

「……ほんとに、あれは山の使です。古郷を離れた都會の人達に、古郷を教へに來た山の使です。毎日々々、かはききつた生活をしてゐる私達に、あれは、うるほひを與へました。あれのお蔭で、私達は愉快に事務を取ることが出来るのです。どうか、都會の少年達に、あれの事を御紹介下さい。いや、都會ばかりではない。田舎にある少年達にも是非知

らしていただきたいものです」と、かう言つて、その少年給仕にひき合して呉れました。

二

皆さん御存じですか、九州南部山脈といふのを。俗に九州アルプスと言つて、九州の真中を走つてゐる幅の廣い大山脈です。其處にはまだ斧を入れたことのない密林もあれば、百年かゝつても伐り盡せない大森林もあるのです。斯うした山々のうち、一番深山とされてゐるのは、豊後と肥後と日向の國境です。この國境の山脈の中に、十里四方もあるといふ大きな村がありました。しかし、この村の中に、人家はわづか三百戸しかありません。

その村の或る谷間に、いつの頃からか粗末な丸太づくりの西洋館がたてられ、三人の者がすむやうになりました。それは、静男と静男の両親でした。静男の父親は、何でも外國の學會の雜誌にまで名を出

したこともある植物學者といふことでしたが、どういふ考へか、すつとこの山奥に引つこんで終つたのです。

静男は、毎日、一里半もある學校へ得意の口笛を吹き乍ら、山坂を越へて通つてゐました。先生は、一寸法師のやうに小さい人でした。學校も小さくて一年から三年まで一室に集つて勉強するのでした。四年生になると、みんな先生よりも脊が高くなるけれど、先生はちつとも悲しそうな顔をしないで、『みんな大きくなれ、山のやうに大きくなれ、すると先生は、みなさんの腰にぶらさがつて、東京見物に行かう。……みなさん、東京は、こゝから東北にあたります。靖國神社は誰さまを祭つてゐるか知つてゐますか。知つてゐる人は手をあげなさい。』

こんな事を言つて授業をすゝめるのでした。修學旅行の季節になると、先生は、全校の生徒五十人を連れて、平野の村の小學校へ泊りがけで連れ

二五

て行きました。登り坂では、先生は「ハア」息を切りました。と上級の生徒達が、手を引つぱりました。下り坂になると、先生は、幾度も「足すべらしさうになりました。生徒達は、下に立つて手をひろげました。

日暮れにやつと平野の村に着きました。

そして、その夜は、村長さんと、助役さんの家へ泊りました。夜が明けると、生徒達は馬と舟と自轉車を珍らしさうに見學して、翌日山へ歸りました。馬も舟も自轉車も、自分達の村にはないのです。

先生が小さいもんだから、その村の生徒達が、色々悪口を言ふのでした。先生は知らぬ顔をしてをられたが、生徒達はほんとに残念でした。そして、先生が早く大きくなるやうに祈りました。しかし、先生はこれより大きくなれさうにも思はれません。先生はもう三十五でしたから。静男は、「うち出の小づちの語が、ほんとうのことであれば

都會に負けちや駄目だよ。恐しいこと、悲しいことがあつたら、お前の胸にうつつてゐる山のことを憶ひ出しなさい。」と。

愈々春になりました。お父さんは決心して、静男を筏に乗せて町の停車場までおくりました。一寸法師の先生は筏の乗り場まで、他の生徒達と一しよに見送りました。先生の目は涙でぬれてゐました。

「静男さんや、ではこれが別れだ。うんと出世して下さい。昔から偉人は山國から出てゐます。大きい自然は、大きな人物をつくるのです。先生もな、あたり前のからだゞつたら、東京へ出たんだが、……先生は、それはよく出来る子供だつたからね。しかしもう駄目だ。もう三十五だ。直ぐにお爺さんになる……。」

斯う言つて静男の手を握られました。

愈々、汽車に乗りこんだ時、お父さんは改めて、

い。」

と、何度思つたかも知れません。

三

ある日、お父さんが圍爐裡のそばで村田銃の手入れをしながら静男へ言はれました。

「静男や、わしはお前を一生この奥山にうづめるつもりではない。今年、山の雪がとけたら、お前を東京に出してやる。だから、今のうちに、しつかりと山を見ておきなさい。どんな事があつても、山の青い影がお前の胸から消えぬやうに、強く山姿を見ておきなさい。世の中に山ほど偉大なものはない。東京あたりでは七階八階のビルディングを見て、大きいと威張つてゐるが、山にくらべたら何でもないんだ。家の飾が美しくと言ふが、山に咲く花にくらべたら夢のやうなものだ。どんな偉い學者だつて山に言葉を交す人はゐないんだ。な、静男や、

行く先きの路を教へ、昔のお友達に宛てた一封の手紙を渡して、

「お父さんは貧乏で學費をおくることが出来ない。だから、昔のお友達の會社に使つて貰ふやうに頼んでおいた。その代り夜は學校に行ける筈だ。」と言はれました。

汽車は走りつゞけました。廣い平野を走ると思へば、せまい山合ひの谷間を馳けのぼりました。又海に沿ふて走るところもありました。

静男は、一寸法師の先生へ手紙を書きました。

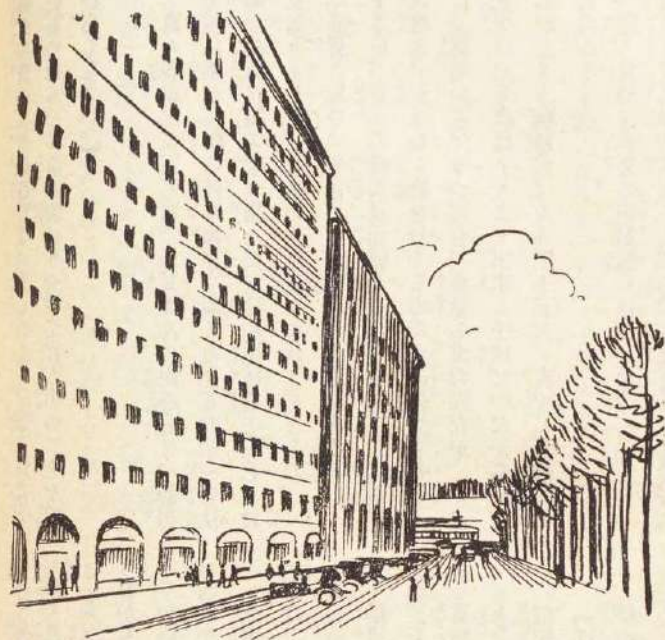
眞暗なトンネルを出たら

大きなお山が

電信柱を杖に、ひよつくり顔を出して

『ぼつちゃん、今日は。』と言つた。

びつくりしちゃつた。



廣い／＼平野に出たら
長いお山が
霞の中で、寝ながら笛を吹いてゐた。
可哀さうだな。

海々々
山はどこにある
はるかの空に
かゝるのが山か
目にしみて痛いなあ
涙が出ちやつた。

お父さんが電報でもうつておいたのか、
停車場には、お友達の方が待つてをられま
した。その叔父さんは、静男の肩に手をや
つて、

「どうだ、大きい停車場だらう……御覽、
あれが有名な丸ビルだよ」斯う言つて立ち

並んだビルディングを指さゝれました。しかし、静男

には、そんなに大きく見へませんでした。静男は、
もつと／＼大きいものだと思つてゐたのでした。と、
静男は、いつかのお父さんの言葉を思ひ出して成る
ほどだと思ひました。この時まで、静男の心には大
きな山の姿が、はつきり残つてゐましたので、この
ビルディングを大きいと感心しなくともよかつたので
す。

その夜は、叔父さんの家に泊ることになつて、夕
飯の御馳走になつてゐる時、叔父さんは、叔母さん
に言はれました。

「静男さんはね、停車場を見ても、丸ビルを見ても、
ちつとも感心しなかつたよ。」

すると叔母さんは、

「ほゝゝゝ、餘り大きいんで見へなかつたでせ
う。」

と、言つて笑ひました。静男はむつとして答へま

した。

「だつて……山は、もつと／＼大きいや。」
すると叔父さんは感心して言はれました。

「なるほど／＼。これは理くつた。しかし静男さん、
丸ビルは人の住居だが、山はさうではないでせう。」
で、静男は又答へました。

「山だつて人が棲んでるよ、叔父さん。鳥だつて熊
だつてすんでらあ。」

「いや……これは參つた。なるほど／＼。」斯う言
つて叔父さんは頭をかきました。「しかしそのうち
に、東京が大きく見へるやうになるんだ。静男さん。
東京は恐ろしいところだよ。うんと力を入れてゐな
くちやいけませんよ。」

「東京なんか負けるものか！」 静男は斯う強く
思ひました。

しかし、愈々床には入つて、じつと耳をすました
時、静男は、悪魔が馳けめづつてゐるやうな、夜の

都會の騒音を聞いて、思はず夜具をかき抱きました。今にも、人間界の一切の災害が、自分の上に襲ひかかるやうに思はれるのでした。静男は、じつと目をとちて、一生懸命に、心に浮ぶ山の姿を見つめました。けれどもその夜静男は、よく眠ることが出来ませんでした。

翌日、静男は、ビルディングの七階にある商會に連れて行かれ、改めて、其處の給仕として多くの社員に紹介されました。人々の視線は一齊に静男にそ、がれました。静男は、はつと立ちすくみました。どの人の目も何といふかはききつた情味の無い目です。

「都會の目だ！」静男は斯う思ふと、なんだか自分一人で無人島にゐるやうな心細さをひし／＼と感じました。

その時以來、彼の心からは自然に山の姿が薄くなつて行きました。そして都會の姿のみが、大きく力

強くうつつてくるやうに思はれました。その大きな影のために、今にも押しつぶされるやうに思はれるのでした。

四

商會の人達は毎日、目のまはるやうに多忙でした。そして、只機械のやうに働いてゐました。だから、他の人の事なんか少しだつて考へる暇はありませんでした。たゞ／＼休憩の時間が來ても、そのかはき切つた目で、壁を見つめたり、たばこをふかしたり、つまらない雑談を交すばかりでした。

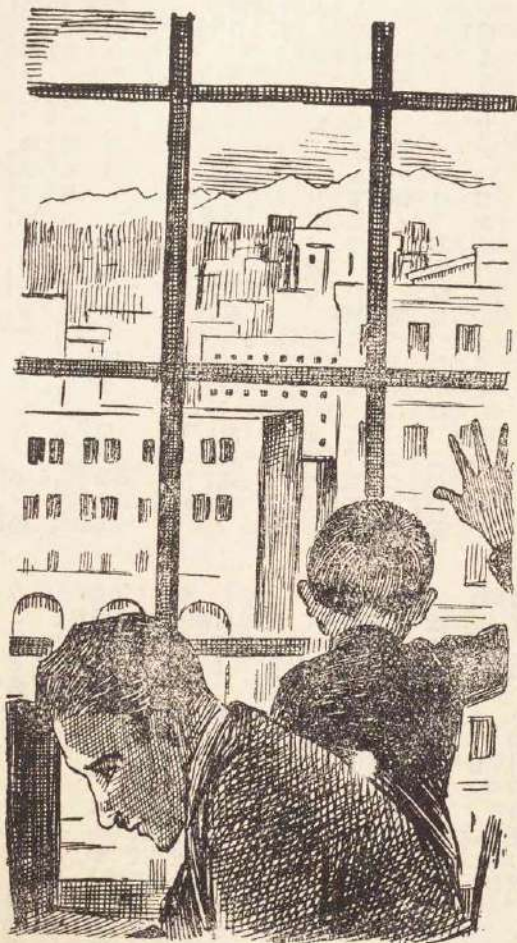
ある晴れた冬の日でした。静男は、今日始めて、窓際によつて外を眺めました。建物の下には、自動車や人々が、蟻のやうに這ひまはつてゐました。少し目をあげると、大小の建物の屋根が、岸邊に打ち寄せる波のやうに、先へ／＼とつゞいてゐました。すつと顔をあげて正面を見た時、静男は思はず、

「あつ。」と、叫びました。それは、はるか／＼の彼方の空でしたが、白い雪をいたゞいた山脈が、大空にくつきりと姿を現はしてゐたのです。

山！ 山！ 山！ 静男は狂喜して叫びました。山は、はるか空から、双手をあげて、静男に呼んでゐるやうです。

「静男さん、しばらく。僕は毎日、あなたがその窓から顔を出すのを待つてゐたんですよ。」と。

その日以來、静男は、この窓に倚つて山を見るのが唯一の慰めとなりました。空が晴れて、はつきりと山が見える日、静男は非常に快活でした。そして、



久し振りに、快活な山の口笛を吹きました。空が曇つて山の姿が薄く見へたり、まつたく見へない日は、静男は物悲しさうに、悲しい／＼調子で口笛を吹くのでした。

始め社員達は、何とも思つてゐませんでした。或日、静男が、風邪心地で欠勤した時、社員達は、何だか物足らぬ心持ちがして、みんな朝から、ぶつぶん怒つてゐましたが、誰も、そのわけを知つてゐるものはありませんでした。が翌日になつて、窓際から、快活な口笛が聞えて來た時、人々は、はつと氣がつきました。昨日、不愉快だったのは、この口笛が聞えて來なかつたからだといふことに初めて氣がついたのでした。

さう思ふと社員達は、今更のやうに、首を傾けて、すきとほるやうな口笛の音楽に聞き惚れました。それは、ほんとに愉快な樂譜でした。清い衣をつけた天人達が、大空からこの都館の上に飛び下りて、よ

て昨夜、私は、あの山達と一しよに遊んだんですもの。山達は、私を抱いてくれました。そして言ひました。

「ぼつちやん。よく來てくれました。私達は、毎日、東京を見て、ぼつちやん達を呼んでゐるのです。私達は足がないから歩いて行くことは出来ません。だからぼつちやん達の方から私達の方に歩いて來て貰はなければなりません。空が晴れて、東京がはつきりと見える時、私達は、おどろあがつて、皆さんを呼んでゐるのです。そんな時、顔をあげて私達を見てくれる人があつたら、私達はどんなにうれいのでせう。しかし、空が曇つて東京が見へない時、私達は、どんなに悲しいこととせう。そして、只、祈つてゐるのです。自動車にしかれぬやうに——電車からおちないやうにと。ぼつちやん、山は人間達の古郷です。どうか山を忘れないで下さい。」

静男の話を、社員達は熱心に聞き惚れてゐました。

ろこびを振りまいてゐるやうな曲でした。

その翌日になると、今度は、哀しい口笛が窓際から聞えて來ました。はるか／＼の空の彼方から、亡くなつたお母さんが呼んでゐるやうな涙ぐましい氣持が人々の目をうるませました。かうして、静男の口笛は、社員達の唯一の慰めとなり、なくてはならぬものになつてしまひました。

しかし、みんな、静男が、どんな事を思つて口笛を吹いてゐるかわかりませんでしたので、社員達は協議して、そのわけを聞いて見ることにしました。或る土曜日の午後、静男は、みんなの前に立たされた。その日は、いつもよりも、すつと晴れた日でした。その日の音楽は又、いつもより、すつと快活でした。静男は尋ねられるまゝに話し出しました。

「みなさん、わたしは、あの窓際で毎日、山とお話してゐるのです。とりわけ今日は愉快でした。だつ

人々の心には、今、少年の時をおくつた古郷の山々が強く、なつかしく浮び出て來たのです。

静男の話がすむと、みんなは、そろ／＼と山の見える窓際に集つて首を出しました。はるかな空に、秩父の山は、くつきりと姿を見せてゐました。

何事が起つたかと、隣の室の人達も、次の室の人達も、つき／＼に窓から顔を出しましたが、美しくい山の姿を見つけて出して、

「きれいだなあ！」

と、叫びました。静男は、思はず、口笛を吹き始めました。

斯うして此の日から社員達は、静男のことを「山の少年」と呼ぶやうになりました。それは、だんだんと山の雪がとけて、緑の衣と着けかへる春近い冬の日のことでした。

(をばり)



二

色の黒い大きな男は石炭を船に入れて置いて、石段を登つて来ました。そしてわかりやすい英語で、『どうしたんだい?』とききました。それは指郎さんがイギリスの土地に上陸した最初に聞いた英語でした。指郎さんは日本式の英語で、『キリスト教の青年會館へ行きたいのです。』と言ひました。すると

指郎さんの

イギリス行

沖野岩三郎

寺内萬治郎畫

三六

其の男は指郎さんを町の角まで伴れて行つて、ていねいに道筋を教へてくれました。

指郎さんはサンクユー、サンクユーを何度もくり返して男に別れました。そして四五町ほど行つたと思ふと、もうさつぱりわからなくなりました。で、交番へ行つて巡査に尋ねますと、巡査は親切に何度も何度も聞直して、『あゝ、Y・M・C・A・か。』と云つて紙をさへ

わかりやすく地図をかいてくれました。

指郎さんは其の地図を見い／＼二三町歩いてゐると、後からハーローと云ひながら指郎さんの肩へ手をかけた者がありました。驚いて振り返りますと、それは見知らぬイギリスの若者でありました。『何か御用ですか。』とききますと、若者はにこ／＼笑ひながら、

『君もお疲れでせうから、どこかの酒場へ行つて、ビールでも飲みませう。』と云ひました。指郎さんは直ぐ其れが不良少年であると知りませんでしたので、返事もしないで、さつさと歩き出すと、若者も指郎さんと並んで歩きながら、しつこくビールを飲みに行かうと云ふのです。

『僕はビールは飲みません。』と強く言ふと、『ではカフェーへ行つて、コーヒでも飲みませう。』と言ふのです。『コーヒは飲みたくありません。』と言ふと、たうとう若者は、『それではすまないが、

お金を少し下さい。』と、言ひました。

指郎さんは通りかゝりの人に助けを求めようとしたつて、言葉が不十分です。どうすればよいかと思つてゐるうちに、通りすがりの一人の紳士が、色の黄色い東洋の少年が困つたやうな顔つきをして、不良少年らしい若者と一絡に歩いてゐるのを見て、『どうしたんですか。』と云つて傍へ近寄つて来て呉れました。けれども若者は其の紳士に對つて、べら／＼と口早に何だか言ひましたので、紳士はうなづきながら、さつさと行つてしまひました。

『あいつは、いゝ加減なことを言つて、ごまかしたのだなあ。』と思つた指郎さんは、むツと腹を立てました。で、臍力を据ゑて、

『あなたは乞食ですか。』と問ひました。すると其若者はふる／＼身をふるはせて、

『乞食? 失敬な事を言ふものではない。君が途を知らないらしいから案内してあげようと思ふんだ。』

と、云ひました。

「だつて君は、僕にビールを飲まう、コーヒを飲まうと云つたぢやないか。」

指郎さんも、どもりながら言ひ返しました。

「それは君が疲れてゐるだらうと思つて、親切に言つてあげたんだ。」

若者は指郎さんの袖を捉へながら言ひました。すると指郎さんも勇氣を出して、

「僕は道を知つてゐます。疲れてもゐません。君の御世話にならないでもいい。」と言つて、ふり切つて歩かうとしましたが、若者は容易に袖をはなしませんでした。

「では、こゝまで案内して来た案内料として一パウンド（九圓七十七錢）を下さい。」

若者は、たうとう本音を吐きました。指郎さんはどさん！ としました。所が幸にも丁度其時、二三十間歩きの歩道に一人の巡査が歩いて来るのを見



ました。で、指郎さんは心の中で、「しめた！」と思ひながら、

「僕はこゝに五十パウンドのお金をもつてゐるんだが……」と云つて、ポケットへ手を入れました。

指郎さんは其時五十パウンドどころか、三十パウンドの金も無かつたのです。しかし、ゆつくりと、落ついた調子で、

「I will give you some money.」と言ひますと、若者は急に、にた／＼と笑つて、

「I thank you a thousand times.」と、馬鹿にいていねいな、あいさつをしながら、青白い大きな手をさし出しました。すると、指郎さんはポケットから一錢銅貨を一つ取出して、其の青白い手の上にベチリ！ と投げつけて、其のまゝ一目散に巡査の方へ駆けつけました。

巡査はびつくりして、何事だと尋ねましたが、不良少年の事は言はないで、Y・M・C・A. に行きた

いのだが、道がわからなくて困つてゐるのだと言ひました。すると、巡査は、

「あア、それはドツランガムのコートロードだ。私が案内してあげる。」と言つて、指郎さんを青年會館まで案内してくれました。

行く道々、巡査は早口で、いろんな事をきゝましたが、指郎さんにはちつともわかりませんでした。しかし、自分は英國と同盟國である日本人だと言ひますと、巡査は頻りにうなづきながら、親切にしてくれました。

青年會館では、係りの人が出て来て、イギリスへ来た目的を詳しく聞いた上、近くのミセス・スミスといふ婦人の家へ案内して呉れました。

ミセス・スミスは、もう四十すぎた、やさしい婦人でした。はる／＼遠い日本から来た少年だといふので、マイボーイ、マイボーイと云つて親切にしてくれました。

指郎さんに、あてがつてくれた室は、日當りのよい、立派な室でした。そこへ落つくと直ぐ指郎さんは、日本にあるお父さまの所へ手紙を書きました。

お父さま、コーランボの姉様の宅を出立してから、こゝへ着くまでの間には、苦しい事もありましたが、又た面白い事もありました。私の乗つてゐる船が、バナンの港へ着くと、馬鹿に背の高い男が、案内させてほしいと言つて、厚い帳面を出して見せるのです。それは「自分は此の通り、各國の人達から正直者だといふ證明を得てゐます。」と云ふつもりですが、その帳面には、日本人の手蹟で「此男信用すべからず。」とか、「見かけによらぬ、するい男なり。」とか書いてありました。

私達は馬車を備つて市外の小高い山に上りました。其邊一體に生えてゐる大きなヤシの木は本當に見事でした。それから極楽寺といふ寺を見まし

たが、そこには東郷大將や乃木大將の書いた額がかゝつてゐました。バナンからは印度人のお客が多勢来込んで来ました。それは回々教の信者で、他人の炊事したものは決して食べない習慣ですから、炭だとか薪だとかを、めい／＼に持參です。船からは水だけもらつて、いろ／＼の物を煮て、それを手づかみで食べてゐました。

コーンボの防波堤の宏大には驚きました。これは英國政府が一千萬圓を投じて經營したものださうです。新しい領地を統治する爲にこんな良い港を作るなどは、日本の政治家には出来ない事だと一人の紳士が慨いてゐました。

お父さま、大きな聲では申されませんが、私は日本を離れて、まだ文明國といふものを、見ませんが、それでも、もう日本の事を考へると悲しくなります。總てが小さくて貧弱に思はれてなりません。日本よ、お前を世界の一等國だなんて誰が言



ひ始めたのかと言ひたくなります。

お父さま、私はコロンボを出てから十日目の夜明け方、終生忘れる事のできない光景を見ました。

いよ／＼船がスエズの運河に入る日だと思つて、朝早く甲板に出て見ると、右手に有名なシナイ山が見えるではありませんか。千古の英雄モーゼが、奴隸の境遇にある幾百萬のイスラエル人を、エジプトから救ひ出して、四十日四十夜祈りに祈つた山です。私は此のシナイ山を見た時、この景色をお父様にも一目見せてあげたいと思ひました。

それから意外に思つたのはスエズの運河でした。私はもつと大きなものかと思つてゐましたが、それは熊野川の半分位しかありませんでした。船と船とが行き違ふ時、一方の船は岩に繋がれて、一方の船の行過ぎるのを待つのです。そして、船の揺盪ふ時は、兩方の乗客が甲板の上から帽子をふつたりハンカチーフをふつたりして互ひに健康

を祝し合ひます。

ボートサイドから地中海に向つた所に、この運河の設計者であるレセツプスの銅像が立つてゐました。それから一しきり荒波を蹴つて進んだ船が、コルシカ島を左に見ながら進む時、私は英雄ナポレオンの末路を想つて、感慨無量でした。

其の翌日船はマルセイユに着きました。有名なノートルダム塔が見えた時、乗客はみんな言ひ合したやうに聲をあげて喜びました。

私はこのマルセイユの築港を見ました時、さらに驚きました。これは又たコロンボなどの遠く及ぶ所ではありません。世界は私の前に段々廣大くなつて行きます。

日本よ！ お前も今にこんな大きな港をもつやうな富める國におなり！

乗客はみんなこゝで降りてしまひました。イギリスまで行く乗客は、日本人中二等乗客では僅

か五人だけでした。

船はマルセイユに二日間泊りましたので、博物館や寺院を、あちこちと見物しました。一つとして私の眼を驚かせないものはありませんでした。

いよ／＼船がマルセイユを離れるといふ日の朝、美しい二人の娘が紅い着物を着て、マルセイユズといふ曲に合わせて、面白い踊りを見せてくれました。

指郎さんは、そこまで



手紙を書いた時、萬年筆のサヤが、どうしたはずみにか、ころころと床の上に轉げ落ちましたので、椅子を離れて、それを拾はうとしますと、急に膝返りがしたので。

「あ、いたい。いたい。……」と言つて、

指郎さんは大きな聲を立て、叫びました。あんまり大きな聲を立てたので、ミセス・スミスが入口の所へ来て、戸をたゝきながら、しきりに何とか早口に言つておました。

指郎さんはコムラガヘリといふ英語を知りませんから、日本語で、

「コムラガヘリ、筋引き、筋引き、コムラガヘリ、筋引き、筋引き……」と言ひました。

すると、ミセス・スミスは戸を開けて入つて來ました。そして、びつくりしたやうな顔をしてゐますので、指郎さんは和英辭書の中の『Komuragaeiri』の所を見せようと、ミセス・スミスは、

「本國からは一錢の送金もありません。」

指郎さんがさう言ひますと、ミセス・スミスは驚いた顔付で、

「では、現金をもつてゐらつしやるんですか。」と、尋ねました。

「こゝに廿四バウンドあるだけです。」と云つた指郎さんの言葉をきいたミセス・スミスは、呆れ返つて、

「まあ廿四バウンド、それはこゝの食費八週間分だけちやありませんか。」と、申しました。

「だから私は、苦學するつもりです。」

指郎さんは悲しそうに言ひました。ミセス・スミスは暫く考へてゐましたが、

「では、あなたのお知合でもあるのですか。」と、ききました。

「知つた人はありませんが、こゝに一通の紹介狀があります。」と云つて、コーランボの牧師さんから貰つた紹介狀を見せようと、

「Oh! Champ?」と言つて笑ひました。指郎さんは、コムラガエリを英語で、克蘭ボといふのだといふ事を知りました。これは指郎さんがロンドンに着いて一番最初に覺えた英語でした。

指郎さんがスジヒキ、筋引きと云つて大聲を立てたのを、ミセス・スミスは、シジュイック、シジュイックと聞いたのでした。シジュイックといふのはミセス・スミスの伯父さんに當る人の名前だったので。

二三日たつと、ミセス・スミスは食事のあとで指郎さんに勉強の方針を尋ねました。そこで指郎さんは、どこかの中學へでも入つて、行く／＼はケンブリッヂかオックスフォードか、どつちかの大學に入りたいのだと云ひました。すると、ミセス・スミスは、親切に、

「では本國から月々どれだけの送金があるのか、それによつて下宿料を相減したい。」と、申しました。

「あ、さうですか。では早速其所へ行つてごらん下さい。」と云つて、ていねいに道筋を教へてくれました。

始めて、イギリスの電車に乗つて、ロンドン郊外のスタンボローといふ所へ行つて、交番の巡査に紹介狀を見せて、道をきくと、

「それはあの大きな建物だ。」と云つた巡査の指さきを見ますと、すてきに大きな建物です。

指郎さんは恐々其の建物の中に入つて、受付の人に紹介狀を渡すと、間もなく一人の青年が出來て來て應接室へ案内してくれました。

そこへ入つて來たのは一人の老紳士でした。指郎さんは老紳士を見上げながら、握手しますと、老紳士は指郎さんを椅子にかけさせて、日本を出た事情をききました上、

「あなたは今、どれだけの學資金をもつてゐるか。」とききました。で、指郎さんは正直に財布を倒にし

て有金全體を机の上に置きました。紳士はそれを勘定して、

「甘バウンドは私が預つて置く。四バウンドだけ、あなたの小づかひにもつてゐらつしやい。」と言ひました。そして、「まあ、最初は硝子拭と芝生の掃除をなさい。それからパンのやき方を覚えるがよろしい。あなたの將來は私が引受けてあげるから、今日からこの寄宿舎にお入りなさい。」と申しました。

指郎さんは、びつくりして、様子をきゝますと、

そこは、スタンボーパーク・ユニヴァースといふ大きな宗教大學で、紹介状の主はウキリヤム・フランシス・ウードといふ其の大學校長だつたのです。

日本の田舎の中學四年を修業したばかりの少年指郎さんは、かうしてイギリスの大學校へ何の苦もなく入ることが出来ました。けれども學科を學ぶ迄には少くとも二三年の勉強をしなければなりません。指郎さんは、そこで一ケ年間硝子拭と庭掃除をし

てゐる間に、一生懸命に勉強しましたので、翌年の四月から大學豫科の一年生に入學を許可してくれました上、學校内にある食料品製造部へ入つて、グループン・ブレードといふ膠質のパンと、健康ビスケットといふ病人の食べるビスケットの製造を手傳ひながら、其の賃錢で下宿料や月謝を納める方法をつけてくれました。指郎さんはこのスタンボーパーク・ユニヴァースに八ケ年ゐました。大正九年の冬そこを卒業して、日本へ歸つて來ました。

其頃、指郎さんが最初イギリスへ行きたいと言つた時、強く反對した町の牧師さんが、もう牧師をやめて鎌倉の稻村ヶ崎へ來て、そこで金の星の童話を書いてゐましたので、指郎さんは早速横濱から稻村ヶ崎へ行つて、その元の牧師さんに出あつて、いろいろの面白いお話をいたしました。其の牧師さんであつた人といふのは、この物語りを書いた私であります。(をばり)



青い月夜の約束

入交總一郎

水島蘭保布畫

晴れた夜の天空には、高くに青い月がかゝつてゐて、傾きかけた古い宿屋も、うつくしい光りの中に浮いてゐました。夜はだんだんと更けていつて、もう、旅のお客さんも見えなくなつたころなので宿屋の人も、

「どれ、あすの朝は、早立のお客さんもあるゆえ、そろそろと店をしまひませうか。」と、ひとり言を言つて、戸をしめ、寢床の上へ横になりました。そのをり、今、しめたばかりの表の戸を軽くとんとんと叩いて、

「旅のものです。どうぞ、泊らしてください。」と、たれかが、言つてゐる聲が聞えました。

「折角、店をしまつたばかりなのに……」
「盤がぶつぷつと泡をふくやうに、宿屋の人はさう泣きながら、下へおりていつて、また、戸をあけました。」

「いらつしやいまし。」

「こんばんは。」

「たいそう、おそいお着きでいらつしやいますね。」

「どうも、どうもおそく來てすみませんなあ。つひ、月夜の道中に氣をとられて、道草を食つてゐたもんでね——、いゝ月だ。月が青いでせう。それに、この邊の景色

が、じつにもう、結構なところなんですから、それでつひ……」
外に立つてゐた旅人は、まだ、若い男でありましたが、さう言つて、もう一ど、仰いで月を見ました。

「えい、えい、この邊りは、仰しやるとほり、自慢にしたいくらい



いゝところなんです。さ、どうぞ、おはひりくださいまし。」
宿屋の人は、かう云つて、新しく来たお客さんを、奥の座敷に案内しました。そこは、廣い庭を前にした部屋でありました。窓からも、青い月の光りがさしこんでゐて、静で氣もちのいゝところでした。

「私は、大へんくたびれてをりますから、すぐに寝かして下さい。」

と、若い旅人は、荷物を肩からおろして、それを隅の方へ置きながら言ひました。

「はいはい、では、ごゆっくりとおやすみなさいまし。」
と、さう愛想よく言つて、寢床

を設らへて、宿屋の人は部屋を出て行きました。若い旅人は、枕もとの燈火を消して、柔かい寢床の中へはひりました。そして、やれやれと溜息をほつともらしめました。さうして目をつむつて眠らうとしました。が、心の中では、「あの晩も、やつぱり、こんな青い月夜であつてくれたらいいがなあ。」と、そんなことを考へてゐました。すると、いま、とはつて来た道のうつくしい景色が、目の前にちらちらとちらついて来て、どうしても眠ることができません。
「あゝ、こまつたなあ。」と、若い旅人は、寢がへりをしました。と、眠れないさえたその目に、不思議なものが見えました。自分



の他にたれひとりあるはずのない部屋の中に、おちいさんが黙つて坐つてゐました。しかも、全く知らない人でありました。おちいさんは、青い月の方へ向つて、何か一心になつて、本を讀んでゐました。そして、おちいさんの傍には、

白い小さな袋が置いてありましたが。

「おや？」若い旅人は、狐につまされたやうな心もちがして、寢床の上に、半ば身を起して、

「おちいさん、おちいさん。あなたは、いつのまに、こゝへ来ましたか？ それに、おちいさんは、本を讀んでゐますね。いつたい、どんな面白いことがその本の中に書いてあります？」と、ききました。

「これはね、幽冥の書と言つて、たうてい、人間の見ることできない尊い本です。」

おちいさんは、別に惡びれたやうすもなく若い旅人の方へ身を振りかへつて答へました。

「さう、そんな尊い本でしたか。ぢやあおちいさんは、人間ではありませんね。まるで、枯枝のやうに瘦せおとろへてゐるが、鶴のやうに何となく奥ゆかしい氣がします。」

「おゝ。」

「そんなら、何の神さまです。」

「わしはな、婚禮の司神と言つて天下の婚禮をあつかつてゐるよ。」

「さうでしたか、そこに置いてある袋には何がひつてをります。」

若い旅人は、目をかきやかしてききました。すると、おちいさんは、袋にちよつと手をつけて、
「この中には紅い紐がたゞ一ついてあるだけだ。これで夫婦にな

らうとする約束のある男と女とを
結んで置くのだ。こんな小さいよ
わよわしい紐であるが、一ど、こ
の紐で二人の間を結びつけると、
それが例へ仲の悪い敵同志であつ

ても、きつと、夫婦になるし、ま
た、何萬里と國をへだて、遠くに
ゐても、きつときつと、夫婦にせ
ずにはゐられない不思議なほど恐
しい力をもつてゐるよ。」



五〇
と、にこにこ笑つて言ひまし
た。若い旅人の心は、知らずしら
ずになどつて來ました。まだお嫁
さんも貰つてゐませんし、それに、
いひなづけと言ふやうな定まつた
人もありませんでした。若い旅人
は、顔を赤めて、
「ぢやあ、私のお嫁さんにならう
とする人は、いまは、どこにをり
ますか。」
と、だんだんと始めの心をどり
は、心配に變つて、聞く聲さへも
わなわなと微かにふるへてゐまし
た。
「なに、それをききたいのか。う
ん、うん、さうだ。きみのお嫁さ
んはな、ちやうどいゝところにあ
るのだ。こゝから一町ばかりも行



くと、野菜を賣つてゐるおばあさ
んが住んでゐるよ。そのおばあさ
んの娘こそ、きみの一生つれそふ
お嫁さんだよ。」
若い旅人は、さう聞くと、びつ
くりして目を丸くしました。あんな

まり、とつせんなところに自分の
お嫁さんがゐる。これがほんたう
だらうか。夢だ、嘘だ。このおち
いさんは、氣まぐれにおしやべり
をしてゐるのだと思ひました。
「それは、どうも……。」若い旅人

は、ちらとおちいさんを睨みまし
た。
「わしの言ふことが嘘か？」
おちいさんは顔を赤くして怒
ました。
「ええ、でも、でもあんまり。」
若い旅人は、おちいさんの怒つ
た顔を見ると、こまつて口ごもり
ました。
「それぢやあ、わしについて來る
がよいわ。きみのお嫁さんを見せ
てやらう。こつちへ來るがよい。」
と、言つて、立ちあがりました。
若い旅人は、おちいさんの後ろへ
言はれるまゝについて行きました。
た。おちいさんは、黙つて、すた
すたと歩きました。さうして、一
丁ばかり行くと、おちいさんは立

ちどまりました。

『あそこを見い。』

と、若い旅人の方へ振りかへつて、一軒の野菜を賣る店を指さしました。店は小さくて見るからに不愉快な氣もちのするほど、野菜や紙きれなどが散らかつてゐました。

『ほら、あの子供が、きみのお嫁さんだよ。』

と、おちいさんは、もう一ど、指をさして奥の方から出て來たものを若い旅人に見せました。ぼろぼろになつた着物を着て、鼻みづをだしたおばあさんが、二つばかりの女の子供を抱いて、ぼんやりと店さきへ坐りました。

『あれが、私のお嫁さん……ああ。』

と、若い旅人は、女の子を一目みて、おどろきのあまり、聲も出ませんでした。

まあ、なんとと言ふきたない貧乏くさい女の子だらう。あれが私の嫁さんになるつて……若い旅人はみてゐればゐるほど心がかなくなつて來ました。そして、

『ほんたうですか？』

と、泣くやうな聲で言ひながら、おちいさんの方をみました。が、どうしたことであらうか、いま、で一しよにゐた筈のおちいさんの姿が、いつの間にかみえなくなつてゐました。若い旅人はぎよつとし

ました。

『あんなきたない女の子を、お嫁さんにしなければならなかつて、

私ほど不仕合せな人間は、世界中を探してもないことだ。』と、若い旅人はしばらくしてこんなことを考へました。

『あのおちいさんは、もう私と、あの女の子との間を紅い紐でむすんでしまつたのだ。けれども、私は、あんな女の子はいやだ。あんなきたない百姓の女の子をお嫁さんにするなんて、自分の心にも恥しいことだ。私は、世界中で一等うつくしい立派なお嫁さんを貰はうと思つて、一生けんめいに勉強してゐるのに……』

若い旅人がしょんぼりと立つて、かなしうに考へこんでゐますと、野菜の店さきへ坐つてゐましたみすばらしいおばあさん

だ。しかし、もし、あの子が死んでしまつたら？』

若い旅人の顔に喜びの色がさつと浮んで來ました。『さうだよ、あの子が死んでしまつたら、私は助かるのだ。そして他からきれいな美しいお嫁さんをもらふことが出来るわけだ。』と、若い旅人は、目をすえて女の子をみつめてゐました。

『さうだ、死んでしまへばいいのだ。そしたら、私は、あの子をお嫁さんにしなくともいいのだ。そして他から立派なお嫁さんが来る。よし、殺してしまはう。』と、思ふと、やにはに劔をぬいて、店の中へ躍りこんで行きました。さうして、おばあさんと、女

の子の方へ劔を振りあげて近寄つて行きました。

『氣狂ひッ。』

と、おばあさんが叫びました。その絹をさくやうな叫び聲をききつけて、となりの人たちが寄つて來ましたから、若い旅人は、額へたゞ一つ斬りつけただけで、つひに、目的をはたすことができたのでした。

時がたちました。月が重なりま

が、急に若い旅人の方を向いて、こゝと笑ひかけました。しかし、若い旅人は、何といふいやな笑ひ顔だと思ひました。まるで『へへん、いくらお前さんがかなしがつても無駄なことだよ。もうお前さんとこの子とは紅い紐でむすばれてしまつたのだもの。』と、言つてゐるやうに意地悪い顔に見えたのでした。若い旅人はそのおばあさんがにくらしくなつて來ました。そしてまた考へました。

『もし、あの女の子が生きてゐれば、私はどうしてもあの子の夫にならなければならぬ。あゝ、もしさうだとしたら、私はこれからさきいくら長生しても少しもうれ

しいことがないのだ。無駄なこと

した。年が遠慮なく過ぎ去りました。それから十四年、それとも十六年もすぎたでありませうか。そのときの若い旅人は、三十を越した年を迎へました。そして、父のあとをついで、高い位の役をもつ官吏になりました。



さうして、役人はお嫁さんをもらひました。お嫁さんは、花さへうつとりとしさうなほど、姿うつくしい若いお嫁さんでした。そして役人は、今日からは世にも仕合せな夫になつたのです。

けれど、このお嫁さんは、朝から晩まで大きいはなかんざしを額の上に置いて、すこしの間も、離したことがありませんでした。

「おまへは、なぜ、そのかんざしをとらないか？」

と、仕合せな夫は、或る日、怪しんできゝました。

すると、お嫁さんは、袖をひろげて、さつとあからめた顔をかくしながら、

「わたしの額には、恐ろしい刀きず

があります。それで、このはなかんざしをとるわけにまゐりません。」と、小さいふるへ聲で答へました。

「何？ 刀きずが……。」

仕合せな夫は、高い高い崖の上から、谷底へ落ちこむやうな、悲しい、おどろきの聲で叫びました。

「はい、さうなのです。」

お嫁さんは、うつくしい目にためた涙をふきながら、

「この刀きずにはこんなお話があります。わたしは、もと、位の高い役人の娘でありましたが、お父さんは、うまれたばかりのわたしひとりを置いて死んでしまひました。けれども、そのをりは仕合せ



せにも、兄弟もなく、また、親類もちりぢりになつてゐましたので、わたしはみなし子になりました。でも、深切なおばあさんがありまして、見すしらすの幼いわたしを、自分の子供のやうに育て、くれました。おばあさんは、しかし、大へんな貧乏な暮しで、町へ

毎日野菜を賣りに行きました。そのお金で一日一日と、わたしをやうやく養つてゐました。と、わたしが二歳の時の或る日、わたしをふところにいれて、ふと、店さへでて行きますと、ひとりの若い旅人が、氣でも狂つてゐましたか、それとも、お酒に酔つてゐましたかしてゐて、やにはに、刀をぬいてわたしたちに斬りつけて來ました。けれども、わたしたちの運がつよかつたでせうか、仕合せにも命はたすかりましたが、この額の刀きずは今になつても消えませんでした。

「小さいをりにゐたころは、いつたいどこだつた。それを聞かし

てくれ。」

夫は深い深い溜息をして、苦しうにきゝました。

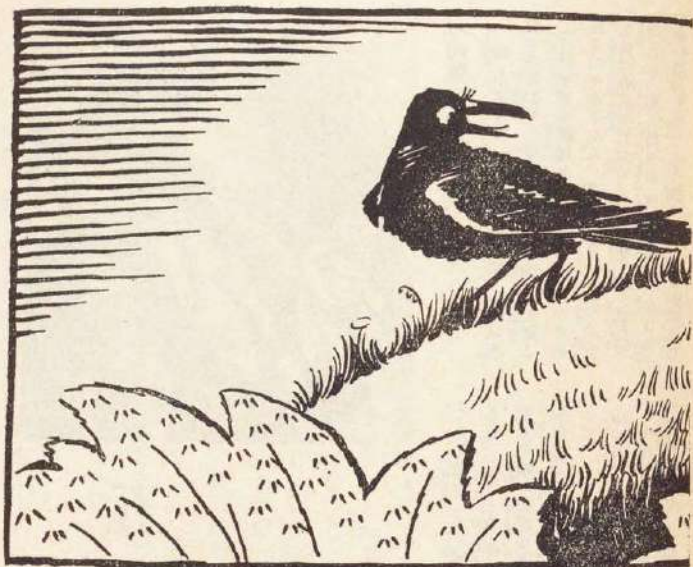
「采城といふところです。」

夫は、それを聞くと、まつ暗い穴の中から、急にあかるい世界にとびでたやうに、なぜか心が軽くなつて、

「何、采城？」と、叫んで、手をぱんと打ちました。

うつくしいお嫁さんをもつた世にも仕合せな夫は、むかしまだ若かつたとき、旅をして青い月夜の宿屋に泊つた時のことを思ひ浮べました。そして、そのをりのおちいさんの言つた言葉を、刀きずの話からもう一どなつかしくきゝ、やうやく、ほんたうだと思ひました。

(をばり)



鳥が越える

五六

杜 仙之介
寺内萬治郎畫

お山の上を

鳥が越える

お山の上は

青い 青い空だ

鳥よ 啼くな

だまつて越えな

お山の下を

鐵砲打ち通る

鳥よ

啼くな

お山の上を

いそいで越えな

五七

五百七號室

三井信衛

寺内萬治郎畫



【前號までの梗概】

滋の家は寶石商であつた。フランスから三年ぶりに歸つた父は、滋に土産としてラヂオの機械を與へた。ところがその夜のラヂオから、東京放送局の放送後二時間半つて、不思議な鐘の放送が聞えた。明る朝まで、鐘の音が響いて、父は上へ下つたが、その後で店のダイヤが、た

くさん偽物とすり替へられてゐるのを発見した。滋は少年店員の夏雄と、ラヂオの鐘の放送を不思議に思つた折も折、おなじ少年店員の謙一が、硝子の機械を作つて、その鐘をさくことが出来た。それに、おなじ少年店員の謙一が、東京から餘り遠くではないといふ推定が下された。すると、おなじ少年店員の謙一は、有

名な會社や銀行などに、夜な／＼七軒づきの盗難が起つた。そればかりか時には一日に、何十といふ盗難事件が起つて、人々は皆恐怖の底にあつた。しかも不思議なラヂオの鐘は、依然として夜毎に聞えて来る。ある時には三つづ／＼ある時には二つづ／＼、J.O.A.K.の放送後二時間半の後に聞えるのである。無論それは放送によつても、

J.O.A.K.の放送でないことは、明かであつた。滋と夏雄と謙一が、今夜も十一時近くラヂオの前に坐つてゐると、いつもの鐘の放送があつて後、突然に聞えたものは『あゝ……滋……滋……悪魔だ……神だ……』といふ父の聲ではないか！果して父の聲か？父の聲だとすれば一體何の意味か？

お父さんのお聲ぢやないでせうか。『……やつぱり、やつぱりさうだらうか？上海へ行かれて大分日が経つのに、あの何度もの至急電報にも何のお返事が無い。これやひよつとしたら、あの鐘の音を放送してゐる恐ろしい悪漢共の巢窟へ、監禁されてゐらつしやるのかも知れない。』

心の色が現れました。ラヂオから洩れたもの一つの聲、あの恐ろしい狼のやうな聲は、きつと悪漢の一人に違ひがない！だが、父を救ふとすれば如何にして救へばいいか？さうなれば、何よりも先に突き留めなければならぬのは、あの秘密のラヂオの放送場所です。そこに若しも父が監禁されてゐるとすれば、言ふまでもなくその場所を、はつきりと知らなければなりません。

ラヂオから洩れた奇怪な聲は何者？
滋の父は果して監禁されてゐるか？

その三 養心堂病院の

怪事件

1 氣づかはれる父の身

『夏雄君、謙一君！』

『おゝ、滋さん、これは、これは、』

『……おゝ、願ふことぢやありませんが、何故か僕もそんな氣がします。さうして店長は悪人共の隙を見て、放送機から放送をなすつたんぢやないでせうか……。』

夏雄と謙一も交る／＼に言ふのでした。滋の目には、見る／＼サツと決

『さうです。』記憶のいゝ謙一は、目を閉つてそれを浮べました。『しげる、しげる。悪魔だ、神を……神を……。』

「たしかに、神を……と言つたね。が、それは一體何のことだらう？」

悪魔だ、神を——さうして父の聲はバツタリと途切れたが、それを思ふと、その不思議な謎の言葉より何より、ばつたりと途切れた父の聲が、今は一層氣にかゝつてなりません。さうだ。父の身には悪い奴のためにその一刹那、恐ろしいことが起つたのではないだらうか？

「夏雄君、謙一君、お願ひがある。僕はどうしても、お父さんを救はなくてはならないよ。今一度上海のオタル・ド・シャンハイへ電報を打つてみるが、そこにお父さんがゐれば幸、とにかくあの放送の場所を探さなくちやならない。」

どうか諸君。僕の力になつてくれ給へ。」

「え、力どころではありません。二人は答へました。『滋さんと心を一つにして、どうしても悪い奴の居所を探つて、店長さんをお助けしなければなりません。』

『有難う！ それちや頼む。』滋がさう言つて、二人の手をとつたその時です。

「滋さん！ 滋さん！」ドアの外から大きな聲がしました。確かに松本支配人。

「あ、松本さんですか？」

「お父さんです！ お父さんです。」

「え、ッ？」

「お父さんがお歸りになりました。」

して、いゝかわからない。お父さんは上海どころか、悪い奴のために、



「どうなすつたんです？」
「ちやアお前は、あれをすつかり聞いたんだね。」
語る登里野氏の二つの目が、ハツと一時に光つたやうです。
「え、聴きました。お父さんは「悪魔だ……神を……」とお言ひになりましたが、何故あんなことを仰有つたんです？ そして、一體その放送機のある處は何處なんです。」
「ふうむ……いや、滋。何から話

よ。今まで一室に監禁されてゐたんだ

2 「神を」とは「カミオン」だ

夢ではないか。これは夢ではないか。さう考へる暇さへもなく、滋は轉ぶやうに部屋を出ました。と、階段の降り口でビツタリと出會つたのは、呼吸せき切つた父の登里野氏であつた。

「お、ッ、お父さん！」

「滋……滋！」

「お父さん！ お父さん！」

只さう言つたばかり、餘りの嬉しさに滋はボロ／＼と涙を落し、懸命に父の胸に縋りつきました。

「お父さん、お父さん。何うなすつたんです？ 今、ラデオから「滋」と呼ぶ聲が聞えて、もうすつかりと心配してゐたんですよ。」

「お、ちやア、やつぱり……。」
「やつと悪い奴の隙を窺つて、窓から飛び降りたが、これが天の恵みといふのか、何處一つ怪我もしなかつた……。」

「え、窓から……！ その窓、窓といふのは一體何處なんです。」

「それは……カミオン……カミオン商會といふ貿易商だが、實はそれが悪漢の巢窟だつたんだ。」

「えッ、カミオン商會……お、お父さん。それちやお父さんが、あの「神を……」と仰有つたのは、カミオちやなくつて、カミオンと仰有つたんですね？」

「さうだ……。わしが逃げようとすると、追ひつめられて入つたのが、恰度放送機のある部屋だつた。」

それでわしは一心に、聲を限りに叫んだが、悪漢に組み伏せられて、詳しいことは何一つ言へなかつた。やつと窓を開けて飛び降りたが、そこは六階の頂上だ。」

「えゝ？ 六階の頂上……さうして、そのカミオン商會といふのは一體何處です？」

と再び滋の言ひかけた時、これは又何事、確かに滋の部屋の邊りから鋭い聲で、

「滋！ 滋！ 滋！」

圖らずも一つの聲が聞えたのでした。

「おッ！ あの聲は……？」

「おや！」

父と滋とは思はず目を見合せました。確かにラデオです！ ラデオ

オだ！ と思ふなり、滋はばたばたと廊下を駆けて、グイと力一杯ドアを開きました。途端、ラデオからは又しても、恐ろしい聲が。

「……うぬ！ うぬ！ うぬ……滋！ 滋！ 早く！ 早く！ カミオ……カミオ……！」

これは一體何事であらう？ 又たもや滋カミオと呼ぶ鋭い聲！ 利那、不圖振り返つた滋は思はず、

「あッッ！」

と、叫んでしまったのでした。

3 五階の頂上から

後には真黒い布で覆面をした一人の男が、ちいッと、ちいッとして、ビストルを突きつけてゐるではないか！

六二

「あッッ！ 誰か！」

と叫ばうとしたが、その不氣味な男の引金を持つ手が、もじくと動きました。

だが、何といふ不思議は出来事ではう！ 今が今ほんの目の前で父と話してゐたのに、又してもこのラデオの聲。ラデオの聲が本當の父か、今會つたのが本當の父か、だが先刻の父は、確かに父の登里野氏でした。

さうだ！ 悪漢が父の逃げたことを知り、滋たちに油斷をさせるために、父の聲に似せた放送をしたのではあるまいか。さうしてその隙に乗じて襲つて來たのが、今日の前にある不氣味な黒い覆面の怪人ではあるまいか？

「あッッ！ 誰か……！」

「黙れ！」

とも怪人は言はない。何一言も

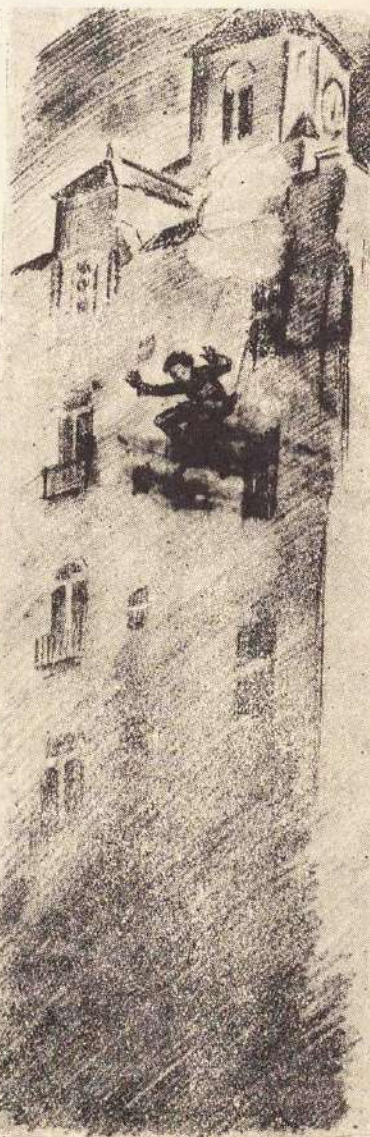
ビストル！

思はず滋がよろめいて、つとそ

の肩に觸れたのは、裏梯子に通ず

つけたが、もうその時は遅かつた。追はれ……て屋上に昇つた滋。

「おゝ、もうこれまでだ！」



語らずに、ぎら／＼と光るビストルの引金に、つと手をかけました。途端、もや／＼とした煙が部屋に充ちました。おゝ、悪漢の手にしてゐるビストルは、最新式の無音

一枚のドアでした。素早くそこを開けて、ばた／＼と階段を傳つたが、ビストルの煙は音もなく、後から／＼と襲つて來ます。騒がしい音に店中の人々が、驚いて駆け

折しも四度放たれたビストルの煙の中に、ハッとして身を躍したかと思ふと、登里野實石店の五階の頂上から、仄暗い街に向つて、どつとばかりに飛び降りたのでし

た……。

4 松本支配人の話

早くも十日の日が経ちました。こゝは神田淡路町にある養心堂病院といふ外科病院でした。さほど大きい病院ではなかつたが、外科の醫術にかけては東京でも、かなり聞えの高い病院でした。

今、ベッドの上に寝かされてゐるのは滋です。手と足とに大きな白い繃帯を巻いて、つい四五日前までは、呼吸も絶えぬに傷の痛みを訴へてゐたが、昨日邊りからはすん／＼と快方に向つて、今は寝ながらに、その側に付き添つてゐる松本支配人や、さては夏雄謙一の二少年と、時々静かに話すこ

とも許されてをりました。

「滋さん、如何です。だん／＼と快い方になりまして結構です。」

松本は言ひました。

「あゝ、有難う。全く今度は、皆さんに心配をかけてしまつた。」

「いゝや、何よりも天祐でしたよ。全くあの晩、あなたが五階から飛び降りて、家の前に氣絶をなさつてゐた時は、これやアもう駄目だなと思ひました。」

「お父さんのお行方は？」

「はい……未だに何の手掛りもございせん。さうしてあの晩、あなたを狙撃しました奴も、未だ縛につかない様子です。」

「滋さん。」

その時まで黙つてゐた夏雄は、

「滋さん、如何です。だん／＼と快い方になりまして結構です。」

松本は言ひました。

「あゝ、有難う。全く今度は、皆さんに心配をかけてしまつた。」

「いゝや、何よりも天祐でしたよ。全くあの晩、あなたが五階から飛び降りて、家の前に氣絶をなさつてゐた時は、これやアもう駄目だなと思ひました。」

「お父さんのお行方は？」

「はい……未だに何の手掛りもございせん。さうしてあの晩、あなたを狙撃しました奴も、未だ縛につかない様子です。」

「滋さん。」

その時まで黙つてゐた夏雄は、

「滋さん、如何です。だん／＼と快い方になりまして結構です。」

松本は言ひました。

「あゝ、有難う。全く今度は、皆さんに心配をかけてしまつた。」

「いゝや、何よりも天祐でしたよ。全くあの晩、あなたが五階から飛び降りて、家の前に氣絶をなさつてゐた時は、これやアもう駄目だなと思ひました。」

「お父さんのお行方は？」

「はい……未だに何の手掛りもございせん。さうしてあの晩、あなたを狙撃しました奴も、未だ縛につかない様子です。」

「滋さん。」

その時まで黙つてゐた夏雄は、

「滋さん、如何です。だん／＼と快い方になりまして結構です。」

松本は言ひました。

「あゝ、有難う。全く今度は、皆さんに心配をかけてしまつた。」

「いゝや、何よりも天祐でしたよ。全くあの晩、あなたが五階から飛び降りて、家の前に氣絶をなさつてゐた時は、これやアもう駄目だなと思ひました。」

「お父さんのお行方は？」

「はい……未だに何の手掛りもございせん。さうしてあの晩、あなたを狙撃しました奴も、未だ縛につかない様子です。」

「滋さん。」

その時まで黙つてゐた夏雄は、

「滋さん、如何です。だん／＼と快い方になりまして結構です。」

松本は言ひました。

「あゝ、有難う。全く今度は、皆さんに心配をかけてしまつた。」

「いゝや、何よりも天祐でしたよ。全くあの晩、あなたが五階から飛び降りて、家の前に氣絶をなさつてゐた時は、これやアもう駄目だなと思ひました。」

「お父さんのお行方は？」



何か變つたことはありませんでしたか？」

と、それを聞いた支配人の松本、微かに「うゝ」と唸るやうに、「滋さん。それちや今、もうお身体も大丈夫ですから、何も彼も申し上げますが……。」

「おゝ、ではやつぱり……。」

「えゝ、實はあれから、又白金の時計が七個、變なニツケル時計と拘り替へられてるんです。」

「えッ、又七個……。」

「それに昨夜はまた、市内の七ヶ所の會社へ泥棒が入つて、大金を盗んださうです。」

「ふうむ……。」

「それから、もう一つ可笑しいことがあります。それは與原といふ

家の店員ですが……。」

「えゝ？ 與原……といふと、あの口数の少い順しい人。あの何にかあつたのですか？」

「はい、その與原が、恰度あの騒ぎのあつた晩、不意に腹痛をおぼえまして、もう醫者を招ぶやら何やらで大騒動でした。さうしてやつと家の掛りつけの東さんに來て頂くと、どうも盲腸炎らしい、とかういふ御診断でした。」

「盲腸炎……。」

「えゝ、それももう患部が餘程悪くなつてから、直ぐに入院して手術をしなければいけない。かういふ御命令だつたので、私たちは寢臺車を雇ふやら……。」

と、その時、語る松本の聲が、

何となく苦しげに響きましたが、尙も懸命に話し續けたのでした。

「……ところが、その與原の行方が、病人の與原の行方が、不意に不意に見えなくなつたのです。」

「えゝ？ その病人が……？」

「さうです。」松本支配人が黙つてゐましたので、夏雄がその後を話しました。「動けないやうな病人がです。そして苦しみなから逃げた證據には下駄も片々を履いて、帽子も人のを冠つて行きました。」

「そして松本さん。何かその與原に、これまで怪しいことがあつたんですか？」

滋がかう訊いても、松本は何の答へもありません。しかも、その顔色は刻々と青ざめ、もはや今は

土のやうでした。

「あッ、どうしたんです！ 松本さん。どうしたんです？」

「松本さん！」「松本さん！」

交るゝにさう言つた時、松本支配人はその場に「うゝ」と唸つて、ばつたりと倒れてしまつたのでした。

いゝや、「松本さん！ 松本さん！」

と叫びながら、支配人を抱き起した夏雄と謙一、その二人の顔色も見るゝ内に眞青となつて、

「おゝッ！」

と言ふなり、その場へどつと倒れてしまひました！ これは又、何といふ意外な、不思議な出來事だらう！

「看護婦さん！ 看護婦さん！」

叫んだが返事も無い。「早く來て下さい！ 早く來て下さい！」言

ひながらに滋は、今はもう痛む身をベッドから無理に起し、よろよろとドアを開けて廊下に出まし

た。

壁に確りと身を支へ、よろゝゝ、

よろゝゝと廊下を傳つて歩いて行くと、恰度そこは大手術室のドアの前、内部からはがやゝと人の聲が聞えて來ます。

では、こゝに看護婦たちが集つてゐたのだらう、思ふなり早くド

アを引いた滋。

「早く來て下さい。早く！」

と叫んだが、滋の姿を見て、あツと驚く看護婦たち。いゝやそれよりも、もつと驚いたのは滋でし

た。

今、手術臺の上に、痲藥にかつて寝てゐるのは、登里野の店にゐた與原その人ではないか！ その白い蠟のやうな與原の腹部を、何挺かの鋭い手術刀で、切開手術をしてゐるのは、三人の外科醫です。

しかもその與原の腹部から、きら／＼と光つた大きなダイヤの珠が一つ、醫者の手によつて取り出された一利那でした！

「あゝッ！」

さすがの滋も、松本を始め二人の少年のことさへ、一瞬間忘れ果てたやうに、鋭く叫んでよろめいてしまひました。

(つづく)



童謡

野口雨情選

(子供篇)

天氣 (賞)

熊木宮本 (學)

あしたは
天氣か
空焼けだ
とんぼよ
あしたも
お天氣か

ちぎれ雲 (賞)

千葉大川 (政雄)

今夜は月が
かささした
かさのふち
ちぎれた雲が
とんでゆく

すゞめ

群馬須永 (たけ)

今日は曇り日
雨降りだ
すゞめの
お家は
どこだらう
すゞめが

お家を
さがしてた

落葉

東京細川 (武保)

落葉おちたよ
みんなでひろへ
はやくひろへよ
落葉をひろへ
風にくかれて
どつさりおちた
みんなひろへよ
落葉をひろへ

子守女

山口永見ミヤ子 (萬二)

六八

子守が
泣く子を

すかして
居りました

だいぐの木で
すゞめが啼いて
をりました

日暮

秋田岩谷 (真三)

大寒小寒
はよかへろ
日暮の野原は
寒い風
あしたの朝も
霜かしら

大寒小寒
はよかへろ

すゞめ

群馬吉住 (まつ)

すゞめが
むざわら
くわへて
とんでいつた
とんでいつた

朝日

山梨藤堂 (文雄)

朝はやく
どてをとほつて
ゐると
朝日がばつと

どてへ
かがやいた

今日の おてんき

群馬青木 (つね)

今日は
おてんとさまを
くもがかくしたり
だしたりしてゐます

山風

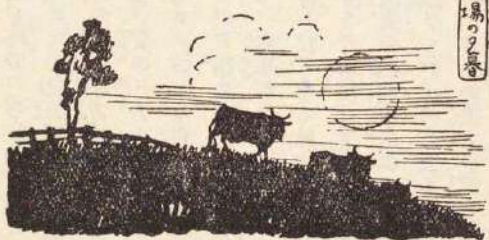
千葉川津 (誠一)

山風ふいた
こうとふいた
木の葉がいつしよに
ちらちらおちた

牧場の夕暮

滋賀山本みゆき (尊五)

牧場の夕暮



牧場の夕暮さきいだな
もうくくくと
牛かへる

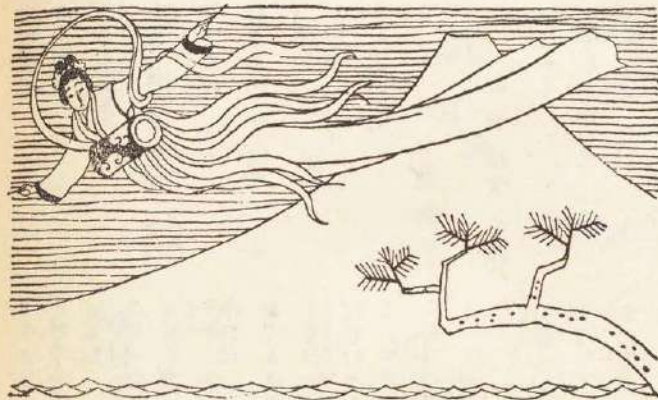
山の向ふへ日が落ちた

がん

朝鮮河野正三郎 (十三)

北風 北風
今夜も寒い
がんよ綿入れ
着せてやろ
北風 北風
親子のがんよ
綿入れ着ないと
かせをひく

六九



天人のお嫁さん

西川喜平

水島爾保布畫

七〇

晴れわたつた青空に、クツキリと眞つ白に浮き出したやうな富士の山、山の裾はボーツと紫の霞に包まれて、それから續く紺青色の海の面に、チラリチラリと白浪が見える景色を前に、三保の松原の海邊の松の根方に、腰を掛けて眺めてゐる、都の者らしい姿の一人の若い男がゐりました。

「ア、いゝ景色だなあ。まるで繪のやうだと云ひたいが、繪にもかけない景色だ。それにボカ／＼と暖で、春風がソヨ／＼と……何んとも云へない、心持ちだ。なるほど話しにある通り、天人が遊びに来さうな所だな。昔天人が羽衣を松の枝へ忘れたのを、漁夫の伯龍と云ふ人が拾つたと云ふ、古い話だから思ひついて、わたしもお嫁さんを探してゐるのだから、どうか美しい天人に逢つて見たいものだと思ひかけて来たのだ。うまく天人がくればいゝが待つ身になると永いものだ。」と獨り言を云つてゐました。すると、はるか遠くの方から、

「コロリン、コロリン、シャン、シャン、コロリン」と琴の音が聞えて来ました。

「オヤ琴の音が聞える。あの羽衣の話に、天人の來る時には、空から花が降つて、音楽が聞えると云ふことだから、あの琴の音は、天人が降りて來る先ぶれではないか。さう思ふと、なんだか胸がドキドキする。」と、空を眺めてゐると、折りからサツト吹いて來る風に、何所から飛んで來たか、赤い衣物が、ヒラ／＼と風にひるがへりながら、はるか向ふの松の枝に懸りました。

これを見た若い男は、勇み立つて、

「それやおいでなすつた。」と大急ぎで、松の根方へ駆けつけ、松の木へよち登つて、赤い衣物を取つて下りました。

「有難い／＼。天人の衣物に違ひない。これを持つてゐれば、天人に逢へるだらう。」

と、ホク／＼喜んでゐると、だしぬけに、後から

頭をボカリと打たれました。

「あッ。」と驚いて見ると、五六人の男や女が、怖い顔をして立つてゐました。

「この泥棒、お嬢さんの長襦袢を返せ。」

と、先に立つた男が、衣物を取りにかゝると、若い男はチャツと後へかくして、

「ドッコイ、さう手輕く渡せるものか。美しい天人に逢つてからだ。」と言ふと、男や女はドツと笑つて「この奴は泥棒じやあない、氣狂ひだ。」と、ドヤドヤと寄つて來て、衣物を取らう、やるまいと、争ひましたが、とう／＼若い男は波打ち際へ突き飛ばされて、コロ／＼と轉がると、丁度打ち寄せる白波を、頭からザツと浴びました。

若い男は、ズブ濡れになつて起き上つて見ると、赤い衣物は取られ、今までの男や女の影もかたちも見えませんでした。

「ア、酷い目にあつたものだ。かうズブ濡れになつ

ては、寒くて仕様がな。」「と、ブル／＼慄へながら、歩いて行くと、チラホラ、茅葺き屋根の家が見えて、小松があちこちに生えてゐる所へ来ました。と、見ると、垣根の中から出てゐる小松の枝に、



ゆうせん模様の衣物が懸つてゐました。『やッ、これも天人のものらしい。今度は首尾よくやりたいものだ。』と、その衣物を取り下ろしてゐると、後から小さい聲で、

『モシ／＼貴方、その衣物をどうなさるのです。』と云はれました。ハッとして振り向くと、色の黒い、肥つた小柄の若い女が立つてゐました。

今度こそ取り返されまいと、男はその衣物を、しつかりと抱きかゝえて、

『この衣物の持主に逢つて、お嫁さんになつて貰ふのだ。』と云ひますと、その女は不審さうな顔をして『その衣物の持主を、お嫁さんにして下さるのですつて。』と、問ひかけました。

男はこの優しい言葉に、もうさつきのやうな、酷い目にも逢ふまいと安心して、

『えゝその積りで、わざ／＼この土地へ出掛けて来たのですよ。』と、物知らずに云ひました。



この言葉を聴いてその女は、恥しさうにポツト顔を赤らめました。

やがて男の姿を見て、

『あなたの召し物は、大そう濡れてゐますこと。こ

ちらへおいでなさいまし。乾かして上げませう。』と云ひましたので、男は喜んで、

『有難うございます。それではさう願ひませう。』と女に伴れられて、傍の茅葺き屋根の家へ入りました。

『その召し物をお脱ぎになつて、お氣味がわるいのでせうが、これをちよいとお召しなさいまし。』と、女は今の衣物を男に着せて、濡れた衣物を、日の當つてゐる小松の枝へ掛けました。

男はまるで、狐につまづけたやうな氣でゐながら、四邊を見廻すと、家は古いながら、掃除がとゞいて、小綺麗な田舎家でありました。

日當りのいゝ、縁先の柱へ寄り掛つて、庭に咲いてゐる紅い桃の花を眺めてゐると、遠くで鶏の聲が長閑に聞えてくるので、ウト／＼と夢のやうな氣もちになつてゐました。

すると襖の開く音がして、白髪頭のニコ／＼した顔のお爺さんが出て来ました。

お爺さんは、男の前へ丁寧にお辭儀をして、
『私はこの娘の親でございます。どなたさまか存じ
ませんが、不束な娘をお貰ひ下さるなんて、何ん
もはや有難いこと。』と、頭を下げました。



男は、何が、何んだかわかりませんので、
『へえ——お娘子さんを、どなたがお貰ひなさるの
で。』と云ふと、お爺さんは驚いた顔をして、
『只今娘が申しますには、貴方から有難い仰があつ
たと云ふので。』

『やッそれは飛んでもない。』

『アレ、飛んでもないとは……さつきおつしやつ
たのは、うそでございますか。……田舎者と思つて
おだましなすつたのですか。』と云つて、娘はワツと
泣き出しました。

『コレ泣くな。都の男にはウツカリするとたま
されるだ。』

がつかりした父親の顔と、娘の泣く姿を見て、男
は氣の毒になつて、思はず娘の顔を見ると、さつき
はさほどに思はれなかつたが、目の細い、鼻や口の
小さい、丸顔の、色こそ黒いが、可愛らしい、繪に
かいたおかめさんのやうな、愛嬌のある顔立ちが目



にとまりました。
その顔を見ても、いかにも心だての素直に優しさ
うな、それにさつき、自分の濡れた衣物を乾かして
呉れた親切なことを思つて、

『こんな親切な者は中々あるまい。心の美しいのが
何よりだ。それにあの福々しい顔はお嫁さんとして
恥しいことはない。』と、心に決めて、
『わたしはわるかつた。お嫁さんに貰ひませう。』と
大きな聲で云ひました。

親子は一緒に口を揃へて、

『それはほんたうのお心でございますか。』

『ほんたうとも、わたしの日頃信心する、お稻
荷さまに觀音さま、天神さまに不動さま、それから
出雲の神さまへも誓をかけて、キツトお約束をしま
す。』と、云ひました。

親子は、これを聴いて跳り上がるほど喜びました。

男は、おかめさんのやうなお嫁さんの手を取つて
『お前のやうなお嫁さんが出来たのは、天からさづ
かつたのに違ひない。これがほんたうの天人のお嫁
さんだ。』と、喜びながら、二人連れ立つて家へ歸り
ました。

(をほり)



(自然の不思議)

左官蜂の話

宮島資夫

寺内萬治郎畫

七六

一、左官蜂はどうして巢を造るか

フランスの田舎へ行くと、カリコドマ、ムラリヤ、だの、カリコドマ、シクラだのと云ふ蜂の種類があります。カリコドマ、ムラリヤの方は、石塀のカリコドマ、と云ふような意味で少し、カリコドマ、シクラの方は、小屋のカリコドマと、灌木のカリコドマの二種に分れてゐますが、レオニユルと云ふ學者は、

かう云ふ蜂に左官蜂と云ふ名を與へました。カリコドマ、ムラリヤの方は、雌と雄との色合がまるで違つてゐて、一寸見た人は、それはまるで違ふ種類の蜂だと思ふ位です。雌の身體は、ビロードのように綺麗な色をしてゐて、その羽根は薄紫色でありますが、雄の方はこの黒いビロードが、かなりきつい赤い鐵錆色になつてゐます。それで、どう云ふわけでこの蜂が、石塀の左官蜂

と云ふ名をつけられたかと云ひますと、この蜂は好んで、石塀の上だの、石塀の上だのにコンクリートのような巢を作るからであります。

フランスの南部諸州の方へ行くと、この左官蜂は、大抵石の上にその巢を作ります。左官蜂が好んで巢を作る石の大きさは、握り拳より少し大きい位の丸い奴で、この石は氷河時代の洪水がロオヌ河の谷の臺地に運んで來たものだといふことですが、つまり表面のざら／＼した礫の石なのです。しかし、萬一かういふ石のない場合には、左官蜂は、畑の境界石の上にも、または石塀の上にも、どんな石の上にもその巢を作ります。

左官蜂が自分の好きさうな石を撰ぶと、ちき近所にある、砂粒の澤山ある乾いた土を唾でねつて、可なり大きな丸さにして運んでくると、それを石の上へ、丸い座布団のようにひろげるのです。この左官仕事をするのには前足と口とが、コテになつたり、

土をこねる鏝になつたりします。土が堅いと、また唾を出して軟かくしては握ね直し、だん／＼ひろげて、丸い土臺の恰好が出來ると、こんどは、小さい豆粒ぐらゐの角ばつた砂を運んで來て、そのそと側に順々につめて行きます。これが左官蜂のビルディングの第一階で、それから、二階、三階と重ねて行つて、二三センチ、メートル位の高さになるのです。

人間も石垣を築く時には、石を置いてセメントをなすり、更に石を積んで、と云ふ風にして築いて行きますが、左官蜂のやる方法もこれと少しも違ひません。それに蜂はだれからも教はらずにかう云ふことを知つてゐたのですから、もしかしたら、人間が左官蜂の真似をして、セメントやコンクリートの方法を考へたのかも知れないのです。全く古代人は、鳥や蛇に天氣の好し悪しを豫め知る事を學んだり、獸に喰べられる穀物を教はつたこともあるのです。

七七

自然こそ人間の師匠だから、断えず自然を観察する事を怠つてはいけないとは、いつでもえらい博物學者達のいふ所です。

所でかうして、カリコドマの巢はだん／＼に出来て行く。外側から見ると、ざら／＼した砂の角石が凸凹に突き出てゐて、丁度西洋の田舎の建物みたいになります。中の方はそこで解る幼虫の柔い膚を傷けないように、すべ／＼な漆喰細工で塗られて、全體の恰好は小さな卵なりの塔のような工合で、井戸のように圓い穴が真中に通つてゐます。

巢が出来上ると、左官蜂は、近くの洲にある、エニシダの花から、蜜を吸ひ取り、花粉をお腹に一杯つけて歸つて来ると、まづ頭から先に巢へ入つて行つて、そこで暫く跳ねたりそっくり返つたりして、自分の餌袋にためて来た蜜の精を吐き出してしまひます。餌袋が空になると、一旦巢からそとに出て今度は先とは反對に後すきりに入つて行くのです。さ



うして、二本の後足でお腹の下の方をこすつて、花から取つて来た花粉をふるひ落します。然しこれだけではまだ済みません。左官蜂はもう一度そとに出ると、また最初の時のように、頭から巢の中へ入つて行つて、頭の匙で、今吐き出した蜜の精と、花粉とがよく交り合つて、工合の好い練物になるようにかき廻すのです。

巢の半分位、この練物がたまると、左官蜂はその中に卵を生みつけて、それから巢の入口に、井戸の蓋のように漆喰で蓋をしてしまふのです。

第一の巢が出来上ると、その隣に第二、第三と、この小さい巢を並んで作つて、かれこれ六つから十位まで作り終ると、こんどはその並んだ巢全體の上に、唾でぬらした土ばかりで、厚い蔽ひを作つてしまふのです。左官蜂は、小さな口で土をくはへて来ては、一と脚へ、一脚へ鏝でもつて塗りあげて、その大きさが、二センチ米突にもなると云ふのです。

ら、人間として考へたら、随分大變な建築ではありませんが。然もかうして、巢を作り、蜜を集め、と云ふのが、一つの房に二日位で出来ると云ふのですから、十の房と全體の蔽ひとを作るのにも、恐らく三十日を出ないのです。

フランスの子供は、野原へ行つて、この左官蜂の巢を見つけると、蔽ひの土をはがして、巢の中に蜜を入れて、蜜を吸ひ取つては蜂の御馳走を失敬してしまふさうです。そんな話を聞くと、あのカフェーなんかで、ソーダ水を呑むときに使ふ、ストローの事なんかを思ひ出すではありませんか。

巢の出来上つた所は、まるで石塊と同じような形をしてゐて、然もその堅さもやつぱり石と同じやうで、それを切るには堅い刃のナイフでなければ駄目な位です。だから夏の炎天の日をうけても、蒸風呂のようにはならないし、秋の雨もくさらず事が出来ず、冬の寒さも、ひゞ割らせる事が出来ないのです。

かうしてそこに生みつけられた卵は、安全に年を過し、やがて來年の春になると、中から堅い土を破つてそとに出て來て、春の日の下にうなりをあげて、薄紫の羽根で飛ぶようになるのです。

二、フアーブルの實驗

この左官蜂の事を研究した、フアーブルと云ふフランスの大昆虫學者は、或時こんな事を實驗して見ました。

それ以前に、このカリコドマに左官蜂と云ふ名をつけた、レオミユルの友人のデユ・ハメルと云ふ人が、ガラスの漏斗の下に、左官蜂の巢を入れておいて、漏斗には、ガーゼで口をしておいた所が、巢の中から、石のように固い殻を破つて出て來て左官蜂も、薄いガーゼを破れないで死んでしまつた、と云ふ記録を残しておいたのです。

然しフアーブルはこの實驗を不満足に思ひました

それは第一に石のように固い殻を破る左官蜂の嘴に、ガーゼを破らせるのは、土方の鶴嘴に仕立屋の鉄の代りをさせる無理があること、第二にはガラスのような透明のものの中に、かう云ふ虫を入れておけば、厚い土の中から出て來たばかりでガラスの透明なのを知らないこの虫は、やがてガラスに打つかつて死んでしまふ恐れがあつたからです。

そこで、フアーブルは、この虫がもう成虫になつてゐる二月に、石の巢をそつとこはして藁を取り出して、それを別々の葦の中に入れました。さうして、第一のものには土を埋ねて造つた栓をし、第二のものには厚さ三分程の唐もろこしの髓を、第三のものには灰色の紙でふたをして縛つておきました。かうして、ガラスの鐘の中に入れて、蜂が出てくる五月の月を待つてゐました。

やがて五月の暖い日が來ると、カリコドマは、フアーブルの埋ねた土の栓も、唐もろこしの髓も、

灰色の紙も、同じように、きれいに圓く穴を明けて、そこに飛び出して來たのです。これで見ると、この虫は、必ずしも巢が造られたのと同じ土でなくても、即ち、唐もろこしの葦でも灰色の紙でも、うまく切り破つて出られるものだといふ事がわかりました。

丁度それと同時に、フアーブルはまた、二つの石の巢を持つて來て、一つの巢の上には、灰色の紙をしつかりとかぶせておきました。かうしておく、左官蜂は、自分の巢を喰ひ破つても、すぐに、それに密着した灰色の紙をもう一枚破らなければならぬのです。それから第二の方は、同じ質の紙で造つた、圓い筒で伏せておきました。これは下の方は三分位すいてゐるだけで、頂天の方はもつと離れてゐるようしておきました。

すると、第一の方のものは、その巢を破つたのと同じように、密着した紙に圓い穴を明けて出て來ましたが、第二の方のものは、その巢は完全に破つて

そとに出たが、もう少し先にある、もつと柔い、破れば破れる紙の筒を破らうともしないで、筒の中で死んでしまつてゐたのです。

この原因と結果との間の關係は、どう云ふ理由に基くのかと云ふと、つまり、この虫が成虫にならうとして巢から出る場合には、石のように堅いその殻でも、紙でも、唐もろこしの葦でも何でも破る力を持つてゐる。左官蜂の口には鉄でも鋸でも鶴嘴でも、テコでも何でも立派な道具が具つてゐるから、出來るのです。だから巢に密着した紙は苦もなく喰ひ破つたが、この虫はただそれだけの事を知つてゐるだけで、そこからもう少し先にあつた、灰色の紙、それはさつき容易く破れたものでも、もうまるで別のものになつてゐて、それをどうして破つたら好いかを知らなかつたのです。だからその口の一打ちで破れるものゝ前で、この虫はもろくも死んでしまつたのです。

つまりこの虫は、成虫になる時に、巢を破ると云ふことは、たゞ一度しか出来ないで、それをもう一度繰り返すと云ふ智慧は持たなかつたと、云ふ事が判つたわけです。

三、左官蜂の戦ひ

ところが、ファアブルはまた、かういふことをして見ました。それは、エイグ川と云ふ所の寄洲の積石の上で巢を造つてゐた、二疋の左官蜂をつかまへて、オランジュの自分の家まで持つて來ました。エイグ川とオランジュの間は直徑四キロですから約一里あります。

さうして採集箱の中に入れて運んで來た二疋のカリコドマに、白い記しをつけて、日の暮方に放してやりました。

それから翌朝早く、ファアブルはまたエイグ川の寄洲の昨日の左官蜂の巢に行つて待つてゐると、や

八二
がて露が解ける頃になつて、一疋の左官蜂がその巢のところで働き始めました。然し、そ奴は白い記しをつけてゐません。だからこれはほかの左官蜂が早速その空巢を占領に來たものだと云ふことがわかりました。

けれども、やがて十時頃になると、昨日放した、白い記しのついた左官蜂がひよつこりそこに歸つて來たのです。昨夜は餘り遅くなつたのでどこかで泊つたものでせうが、今朝はもうこゝへ歸る途中で仕事をしたものと見えて、餌袋は一杯になつてゐるし、お腹の下の方は花粉で眞黄色になつてゐました。この蜂はそんな場合にも遊ばずに、歸り道を利用して働いて來たのです。

さうして彼女は、自分の巢の中に入つてゐる、見なれないよその蜂を見つけると、

『何だこの穴巢ねらひめ。』と怒鳴るやうに羽をうならせて、すぐ飛びかゝつて行きました。二疋の左官

蜂は、空中で猛烈な追撃戦を開始しました。時々二三寸離れた距離で面と向ひ合つたまゝちつと睨み合つて舞つてゐます。それはぶん／＼罵り合つてゐるのでせう。やがて一方が自分の物にしようとする巢の上におりると、そこで烈しい組打が始まるのです。然し、かう云ふ場合にでもこの蜂共は、その



得意の短剣を抜いて刺し合ふような事はしなかつたのです。

それはもう母親になつてゐるこの蜂が、わづかの事で決闘して、命を失ふと云ふような事はどうしても出来ないで、争ひはたゞ敵對的示威をしたり、拳骨でなぐり合をする位で終りました。

然し遂にその巢の持主の方は、自分に權利があるのだ、と云ふ覺悟から、二倍の勇氣と力を得て来るものらしく、巢の上に足を頑張つて、どうしても動かうとしません。そしてもう一疋の蜂が近づいて来ると、猛烈に羽ばたきの一撃を喰はせるのです。かうしてしまひに侵入者の方はがっかりして退却する。すると、持主の蜂はいま迄の争ひなんかは忘れたいように、すぐと活潑に仕事にとりかゝつたのです。

左官蜂の間には、よくこの放浪者が、持主のある巢を取らうとしたり何かする事があるさうです。然

し、さう云ふ場合には、たとへその放浪蜂の方が力も強く身體が大きくても、必ず遂に敗けて逃げる事になるさうです。

これは、『力は權利に先だつ。』と云ふ人間のバカバかしい格言の反對に、『權利は力に先立つ。』と云ふ道德的な感じが、この昆虫にも、ちゃんと備つてゐるからだとフアーブルは云つてゐます。

それにしても、採集箱に入れられて、一里も遠い所に運ばれた左官蜂が、どうして自分の巢にすぐ歸つて来られるか、これは實に不思議な謎です。

もし私達が、目隠しをして暗い箱に入れられて、十里も遠い原の中へ持つて行つて捨てられて、誰れにも歸り道を聞く事が出来ない場合には、どこへ行つてしまふか判りません。

自然の中には、實にいろ／＼不思議なことがまだ――澤山ひそんでゐます。

(つゞく)

おちち (推薦)

東京 湊 一 訓

ちらちら緋桃の花ざかり
牝牛のお乳は
白いちち
ねねして坊やは
夢を見る
緋桃の花さく
里の子の
しほるおちちは
しろいちち





あゝ無情

久米 絃一

柳田 謙吉 畫

ジャンバルヂヤンは、パン一片を盗んだために、十九年間牢獄に入れられてゐました。その爲に心が金と腐んでしまつて、牢屋を出てからも、自然と悪事を働くやうになつてゐました。ジャンバルヂヤンは、非常に力のある男だつたので、牢屋では、『起重機』のジャンと云ふ結名がついてゐました。或晩の事、ジャンバルヂヤンは、デューニと云ふ町に来て、宿を借りうとしましたが、誰れも貸して呉れる者がありません。何處へ行つても、野良犬のやうに追回されるのでし

た。併し最後に、ミリエルと云ふ僧正は、親切にジャンを家へ入れて、色々とお馳走をして呉れたり、立派な晩餐に饗させて呉れたりしました。その晩の事、ジャンバルヂヤンは僧正の家の銀の皿を盗んで逃げました。併し直ぐに捉まつて、僧正の前へ引いて來られしました。僧正は、ジャンバルヂヤンの罪を許し、其の銀の皿を返さうと云へました。ジャンバルヂヤンはそれ以來、全く心の入れがはつた男となりしました。……これ

一、マドレーヌ市長
佛蘭西に、モントルーイ・スニール・メーと云ふ、而倒な名前の町があります。もと寂しい田舎の町でしたが、今では大へん賑やかな所になりました。と云ふのは、或る一人の男が、この町で、ガラスの飾り玉を製造する新工業を起したからでした。その頃、ガラスの飾り玉は随分需要が多かつたので、幾んど進つても足りないといふ有様でした。男や女や、老人や子供ま

でも、メーの町へ来て、職工になりました。新しい工場がどん／＼出来る。それに付れて、色々な商賣をする店が殖えて行く。メーの町は暫くの間は、見違へるやうな繁華な町となり、人々はそれ／＼裕福な暮らしが出来るやうになりました。

かうなつたのも、みんな始めて工業を興して呉れた、あの男の御蔭だと云ふので、町の人々は協議の末、その男を市長に推薦する事になりました。

男と云ふのは、一體誰れでせうか？
今から四年前十二月のある寒い夕方の事、その男は、汚れたシャツを着、肩には大きな袋を背負ひ、手には太い鞭の杖を持つて、このメーの町へ這入つて來ました。

誰一人として、その男の前身を知つてゐる者はありませんでした。男は何時も言も云はずに、何かちい／＼と考へ込んでゐるといつた風でした。

男は人々から、マドレーヌと云ふ名で呼ばれてゐました。マドレーヌは市長となつてからも、決して高ぶつたりせず、何時も親切に人の世話をしたりしましたので、その評判

は益々よくなりました。

ところが、この町の中で、たつた一人だけ、マドレーヌを嫌つてゐる男がいました。それは、ジャブエルと云ふ刑事でした。ジャブエルは、よくマドレーヌ氏の後姿を見送りながら、かう獨言を云ふのでした。

「ハチな、何處かで見たやうな奴だが………ツローンの牢獄にゐた、あいつぢやないかなはてな………市長だなんて済してゐるが、俺は決してあんな奴に騙されはしないぞ。今に見る。きつと化の皮を現はしてやるから。」

ジャブエルは、よくかう云つて、マドレーヌ氏の後姿を何時までも睨んでゐるのでした。

皆さんも御推察の通り、このマドレーヌ氏と云ふのはジャンバルヂヤンでした。ジャンバルヂヤンは、ミリエル僧正の御蔭で、全く心の入れがはつた男となりました。そして、このメーの町へ来て、今では市民達から敬ばれ慕はれて、日々を平和に暮してゐるのでした。

二、早く早く！

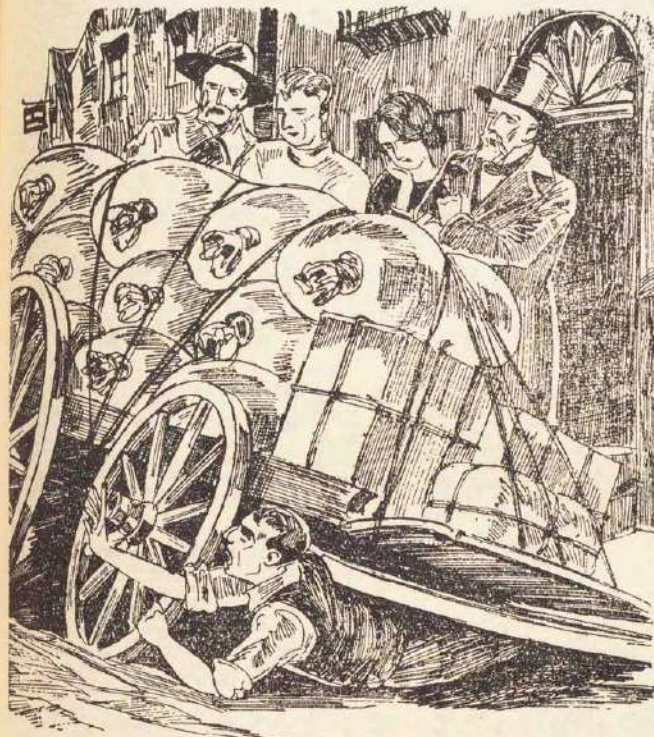
或朝の事、マドレーヌ氏が、通りを歩いてゐますと、何か向うの方に人だかりがして、ワイ／＼騒いでゐる聲が聞えました。マドレーヌ氏は、靜かにその方へ近寄つて行きました。そして、人々の後から伸び上つて見ると、驚いた事には、一人のお爺さんが馬車の下敷になつてゐるのでした。お爺いさんは、フオーシユルパンと云つて、荷馬車の取手をしゐる男でした。今朝方、重い／＼荷物を馬車に積んで此處まで來ると地面が軟かつた爲に、一方の車の輪がマールと土の中にめり込んでしまひました。その爲に馬車が傾いて、お爺いさんは「あッ」と云ふ間もなく、馬車の下に轉げ落ちてしまつたのです。

お爺いさんは身をもがいて、どうかして馬車の下から出やうとしましたが、どうしても駄目でした。雨の降つたあとで道が軟かつたため、車は一刻とめり込んで、お爺さんの胸を押しつけて行きます。もう五分も放つて置いたら、お爺いさんは押し殺されてしまふでせう。

そこへマドレーヌ氏が通り合せたのでし



なあたりに響きました。その時、群衆の後方から低い聲で、「起重機と同じやうな力のある者でなくちや、そんな事は出来やしない。」と、駭いた者がありました。マドレーヌ氏は振り返つて、その方を見ました。それはジャブエル利事でした。ジャブエルは、その底光りする眼で、ちい々とマドレーヌ氏の顔を見つめながら、だん／＼後へ近づて来ました。『彼はたつた一人、そんな男を知つてゐる。』といつはウィロンの牢獄に働いてゐた奴で、『起重機のジャン』と云ふ種名がついてゐた。それいつならきつとこの仕事を仕をはせらう。』ジャブエルはかう云つて、なほもちいつとマドレーヌ氏の眼を見つめてゐました。一瞬間、マドレーヌ氏の眼に、暗い影がさしたやうに思はれました。併し直ぐと又、元の平静さに還りました。『さア誰れかやつて見る者はないか？ 二百フランだ。』併し一人として返事をする者がありません。



た。『起重機はないか？』マドレーヌ氏は四邊を見廻しながら、大聲で叫びました。『只今、取りに行つて来ます。』と、一人が答へました。『何分でこゝへ来られるか？』『さやうでございます、一帯近所に行つて居りますが、十五分ぐらゐはかかりませう。』『そんなに待つてはしない！』マドレーヌ氏は叫びました。そして、あたりに見廻して、『さア誰れか、この馬車の下へ這入つて、春中で車蓋を上げる者はないか？』然し、誰れも返事をする者がありません。こんな車の下へ身を入れたら、自分も一緒に潰されてしまふに違ひありません。『五十フランや。』マドレーヌ氏は叫びました。『この馬車の下に這入る者があつたら五十フランや。』『百フラン！』マドレーヌ氏の聲が、野が

『これが出来るのは、あの起重機のジヤン』
より他にはない』と、又ジャブエルが吠え
るやうに云ひました。

マドレーヌ氏は眼を擧げて、ちいつとジャ
ブエルの顔を見つめてゐました。そこには深
い決心の色が現はれてゐました。

矢張りマドレーヌ氏は、自分の上衣をぬぎ
棄てました。そして、人々があつと云ふ間も
なく、身を屈めて馬車の下に這入つてしまひ
ました。

人々は、漸く我に返つて、云ひ合したやう
に馬車のまはりを取り巻きました。

『マドレーヌさん。そんな事をなすつちやい
けません！』
『早く去り、出ていらつしやい。死んでしま
ひますよ！』

マドレーヌ氏はそれには耳にもかけず、腹
部になつて、駄と膝に力を入れて、ウシ
と車臺を上げやうとしたが、駄目でした。

マドレーヌ氏はもう一度試みました。併し、
やはり事は上りませんでした。顔は眞
赤になつて、脚には太い青筋が浮んでゐ

たので、そこへ子供を預けました。そして自
分は一人、メールの町へ用務員に行つた
のでした。

フアンテレーヌは、ガラス工場で一生懸命
になつて働きました。そして、毎月セフラ
ンツのお金を、子供の養育料として、テ
ナルディユの許に送りました。

『市長さん……私には、どうなつて
も構ひません。……どうか、直ぐ出て下さい』

フォールシュルバン爺さんは、苦しい息を
絶え、に、かう云つて嘆願しました。併し、
市長はきかへませんでした。

と、忽ち、今までビクともしなかつた車
臺が、ムクリと動きました。そして、深く土
の中に潜り込んでゐた車の輪が、一寸、二
寸と浮き上つて來たのです。

『上つた、上つた！』
『もう一息！』
『市長さんを助ける。車の下へ這入れ！』
直ぐに二三人の男が、車の下へ肩を入
れました。車は、忽ち持ち上げられて、フォ
ールシュルバンは往來へ引き出されました。

マドレーヌ氏は眞蒼になつて、息をはづま
せながら立ち上りました。その顔には、云ひ知
れぬ苦難の中に、責任を果した安心の色が浮
んでゐました。

フォールシュルバンは、マドレーヌ氏の前に
膝をついて、その腕にキスしながら、ぼろ
ろと涙を流しました。感謝の言葉のべ

な役を仰せつかりました。……喉の奥から起
きて、水を汲む、掃除をする、食事の用意を
する。自分と同一年のテナルディユの子供が
起きて來ると、その顔を見てやつたり、靴
下を穿かせてやつたりする。晝は晝い、版
の掃除から家中の者の汚れ物の洗濯までする
まづ、一寸の休む間もないのでした。

お内儀さんは、口汚くコゼットを罵つ
て、ぶつたり叩いたりしました。

寒い、風の吹く冬の夕方など、コゼット
はよく、赤くかじかんだ手に、大きな棒を
持つて、往來を掃いてゐました。棒は自分
の背よりも大きかつたので、扱ふのに大へ
ん骨が折れました。

コゼットは、卓の上で食事をする事を許
されませんでした。何時も床の上で、犬や猫
と一緒に、同じ木の皿から御飯を食べてゐま
した。それも分遣が少なかつたので、コゼッ
トの顔色には、余く血の氣がなく、眼ばかり
大きくて、何時も涙を流してゐました。

自分の娘がこんなひどい目に遭つてゐよ
うとは、フアンテレーヌは少しも知りません
でした。亭主のテナルディユは、よく手紙で、

やうにも、喉につかへて出ませんでした。
たゞ涙を流すだけでした。

マドレーヌ氏は、そつと眼を擧げて、ジャ
ブエル利事の方を見ました。ジャブエルは、
なほもその裏のやうな眼で、ちいつとマドレ
ーヌ氏の顔を覗んでゐました。

三、赤豚さん
お話しはかつて、モンフェルメイと云ふ町
に、一人の哀れな寡婦が住んでゐりました。

寡婦の名は、フアンテレーヌと云ひました。
數年前、夫に死別して、今ではコゼッ
トと云ふ三つになる女の子と一緒に、寂し
く暮してゐたのです。

フアンテレーヌは自分の子の爲に、一生懸命
になつて働きましたが、田舎では充分に賃
金がとれませんでした。そこで仕方なく、あ
の硝子の飾り玉を製造する、メールの町へ出
稼ぎに行くことに決しました。

それに先づ、足手まひのコゼットを、
何處かへ預けて行かれました。フアン
テレーヌは、町でテナルディユと云ふ人の内
儀さんが、大へん親切で、お話を聞い

フアンテレーヌの所へ、次のやうに云つてや
るのでした。

『コゼットは大へん丈夫です。丸々と肥つて、
リンゴのやうな頬をして、毎日愉快に遊び
廻つてゐます。』と。

ですからフアンテレーヌは安心して、毎日一
生懸命に働いて、そのお金をテナルディ
ユの所へ送りました。

窓はりのテナルディユは、もつと、お金
が欲しくなりました。そこで、又手紙で、

『冬が近くなつて來たから、コゼットに毛糸
のチョッキを着せねばならぬ。直ぐ、十フラ
ンだけ送つて呉れ。』と、云つてやりました。

母親はその手紙を見て、嘆息をつきました。
どうして自分の身で、そんなお金が得られま
せう。

四、可愛いコゼットへ
その晩の事、フアンテレーヌは、町の理髪師
の所へ出かけました。そして、主人
の理髪師に、自分の房々とした髪を見せまし
た。

『見事なお髪です！』理髪師は思ひすか

云つて感嘆しました。フアンテームが
 櫛を抜き取ると、鏡色に波を打った髪
 は、ほとんど腰のあたりまで垂れ下り
 ました。
 『髪で買つて戴けませうか。』フ
 アンテームは頷きました。
 『十法では如何でございますか？
 奥様。』
 フアンテームは寂しくほゝみまし
 た。

そして、彼女の髪は、ぶつりと切
 られて、十法の金にかへられました。
 彼女はそれのお金で、暖かきうなチ
 ヲツキを買ひました。そして、チナル
 デイムの所へ送つてやつたのです。
 と、ところがチナルデイムは、そのチ
 ヲツキをコゼットには與へずに、自分の
 娘に着せました。可哀さうにコゼッ
 トは、相變らず服着一枚で、ふるえて
 ゐました。
 フアンテームは、そんな事とは少し
 も知りませんでした。そして、ほゝ
 みながら、櫛を抜き取つてました。



『コゼットは、もう決して寒くはないでせう。
 だって、私の髪を売ってやつたのです
 の……』
 それから五六日して、又、チナルデイムの
 處から手紙が来ました。それには、
 『コゼットが肺炎にかゝつて、容體が思はし
 くないから、どうしても病院に入れればなら
 ぬ。それについて、四十法入用だから、直
 ぐ送つてもらひたい。』と、書いてありまし
 た。

フアンテームは、その手紙を見ると、驚を
 たて、笑ひました。
 『まあ、なんて馬鹿な人達でせう。私がそ
 んなお金持だと思つてゐるんでせうか。』
 併し彼女の女は、その日一日、娘の事を心
 配して、仕事に手がつきませんでした。そし
 て、夕方になると、こつそりと町の方へ出
 けて行きました。
 ある薄暗い四角で、香具師の齒磨き賣りが
 人を集めて、何かペチペチと喋りたてゝゐ
 ました。齒磨き賣りは話しながら、チオイ
 ヨイフアンテームの方を見てゐましたが、話
 が済むと、彼女の方を向いて云ひました。

『そこにある若い娘、貴女のその
 うつぱい玉鬘のやうな前齒を、二本だけ
 私に賣つて呉れませんか？ 金貨を二枚送
 上げます。』
 大勢の中でさう云はれたフアンテームは、
 顔を紅くして、迎けるやうに其處を去らう
 としました。齒磨き賣りは後から、
 『娘さん、よく考へてごらんさい。金
 貨二枚ですよ。四十法ですよ。もし宜かつ
 たら、今夜、ダルヂヤンの宿屋へいらつしや
 い。お金を上げますから……』と、云ひまし
 た。

フアンテームは、ふん／＼怒つてゐました。
 『まあ何んと云ふ恐ろしい人だらう。人の齒
 を二本も抜けるなんて……誰れがやるもんで
 すか！』
 併し彼女は、さうは云ふものの、家へ歸つ
 てくると、またちいつと考へ込んでしまひ
 ました。彼女は、チナルデイムの手紙を讀み
 返しました。そして、室の中をぐる／＼と歩
 き廻つて、思ひ惑つてゐました。
 八時が打つと、フアンテームは又帽子を冠
 つて、外へ出て行きました。彼女は遂に、齒

を抜いて貰ふ爲に、ダルヂヤンの宿屋へ行つ
 たのでした。

それから二時間ほどして、フアンテームは
 眞赤な顔をして歸つてきました。彼女は、右
 手にしつかりと握つて来た二枚の金貨を、ベ
 ーリと車の上に載せました。そして、太い
 吐息を洩しました。
 やがて彼女は立上つて、戸棚から鏡を取
 り出し、自分の口の中を映してみました。
 前齒を抜いた跡には、二つの黒い、陥穿
 のやうな穴があいてゐました。フアンテーム
 は思はず顔をそむけました。
 フアンテームのこの血のやうなお金は、間
 もなくチナルデイムの許へ送られました。
 と、ところが、コゼットが病氣だなど、云ふの
 は、眞赤な嘘で、コゼットは相變らず、朝早
 くから叩き起されて、自分の昔よりも、大き
 な簪を持つて、往來を掃いてゐました。
 『私には、お母様で無いのかしら？』
 コゼットは、赤くかかんだ指先を、自分
 の鼻で暖めながら、よく、かう思ふのでし
 た。



幼年詩

松 (賞)

若山牧水選

京城若
草町 河野正三郎
(十三)

冬になつても
松だけは
かれずに
緑の色して立つてゐる
元氣のいゝ
松の木
野、松の木は葉に草薙ですなほな歌です。
(牧水)

蛭と人間

土橋里木

寺内萬治郎畫



九四

夜の十時頃です。或る田舎の家です。
小さい電燈が一つ、赤く黄色い光を投げて、ボンヤリと灯つてゐまし
た。その下で、一人の若い男がそのお上さんと、頻りに蚤退治をしてゐ
ました。
「チエツ！ 逃げたな。」若い男は、うつかり逃がした一匹の蚤を、さも
惜しさうに追ひかけながら叫びました。
「なせ今年、こんなに蚤が多いんでせう。ほんとに嫌になつちまう。
第一、赤ちやんがこんななもの。ね、可哀さうで〜。ほら。」
お上さんは、亭主の若い男に赤ちやんを見せました。赤ちやんの柔か

すゝめ (賞)

山形縣権
深校尋二 林 登美子

すゝめがわらをくはいて
すをこしらへた
さむくなるとすゝめは
そこにねてゐるかもしれない
許いどうもさうらしい、かわいゝすゝめよ。
(牧水)

木の實 (賞)

神奈川縣
逗子新町 茅原久美子
(十二)

真赤にじゆくした
木の實を
お山の上の
夕日がてらす
許いかにくみこな木の實が想像される。
柿らしいな。(牧水)

「綺麗な身體は、手も足も、お腹も背中も、すつかり蚤に刺されて、真
赤に腫れ上つてゐました。」
「うん、全くだ。ちや、明日は町へ行つて、蚤取粉でも買つて来ようか
な。」
「えゝ、せひさうしておくんさい。夜もおち〜眠れないと見えて、
時々泣き出す事さへある程ですよ。」
「あゝ、いゝとも。明日はきつと買つて来るから。」
「だけど、お前さん。蚤取粉位で、こんなに澤山の蚤が取り盡せるも
のでせうか。赤ちやんどころか、終ひには私達迄、蚤の爲にすつかり食
べられてしまふんぢやないかと思へて、私、何だか恐しくなりますの。」
「馬鹿を云ひなさんな。こんな粟粒ばかりのものに、何が出来るものか
い。蚤取粉の少し強いのも撒いてごらん、忽ち塵殺だせ。」
若い男はワハワハと大聲に笑ひました。
その翌る日の朝でした。
一匹の蚤が、疊の接ぎ目から這ひ出して來ました。
昨夜、若い男の爲に、もう少して捕まりさうになつた蚤でした。蚤は、
命から〜疊の接ぎ目へもぐり込むと、そこで一晩中震へてゐねばなら
なかつたのです。だから、お腹がペコ〜に空いてゐました。

おもだかの花

千葉縣平岡校高二 根本 悦子

夜露のとたんに落ちる晩
先生へへんじ書いた
おもだかの花が咲いたと書いた
評、美しく寂しきおもだかの花に似たるこ
の歌。(秋水)

のはらの杉

山形縣橋
澤校時五 金子半兵衛

のはらにたつてゐる

一本杉よ

夜でも晝でもたつてゐる杉よ

風がふくたび

杉の葉が落ちる

評、潮聲の浪の木の歌と同じく素直な大
きい所がある。(秋水)

山

山形縣橋
澤校時二 吉田たけの

月山にはまつ白な

ゆきがふつてゐる

遠い山にもゆきが

ふつてゐるだらう

ここにもいますこしで

ゆきがふるだらう

評、斯んな正直な歌はいかにも子供らしく
てい。大人には出来ない。(秋水)

おちば

千葉縣平岡校時二 石木リカウ

庭をはくその下から

また、はがちる

また、はがちる

評、調子が面白い。(秋水)

「あゝ、腹が減つた。何かうんとうまいものはないかなあ。」
蛋は一つピンと跳ねました。蛋は若くて元氣でした。自分の脊丈の百
八十倍位の高さに跳ねました。けれど、何のうまい御馳走にもありつけ
なくて、又疊の上に、コロツと投げ出されました。蛋はへこたれずに、
第二回目をやつて見ました。今度は前よりかすつと大きく、脊丈の二百
五十倍位の高さに跳ねたのでした。

ふと、蛋は、自分の身体が、フワリと柔かい物に支へられたのを感じ
ました。若い男の兵子帯の上にのつかつたのです。若い男は、蛋取粉を
買ひに町へ行かうと、上り端へ腰かけて、恰度今、ゴム足袋を履いてゐ
る最中でした。兵子帯の上の蛋の所へは、暖かいうまさうな人間の身体
の香ひが、ブン／＼香つて來ました。

「こいつは堪らないな！」

蛋はあはてず、着物の縫ひ目を探し始めました。

蛋は、それが、昨夜、もう少して、自分の命をとらうとした人間であ
るなどと云ふ事は、少しも知りませんでした。そしてどん／＼奥深く入
り込んで行きました。

若い男は、町へ向つて元氣よく自転車に乗せてゐました。

ふと、脊中がむづがゆくなつて來ました。

「オヤッ、今着かへて來たばかりなのに、もう蛋がついたのかな。」若
い男は自転車を止めると、大きな手を脊中へやつて、力任せに引つ掻き
ました。掻きたいだけ掻いて、すつかり氣持がよくなると、若い男は又
自転車で飛び乗つて、すん／＼飛ばし始めました。けれど、いくらも行か
ない中に、又もや脊
中がひどくむづがゆ
くなつて來ました。



「チュッ！しぶとい
奴だな。」若い男は仕
方なしに、一度自転
車を止めて、かゆい所
を掻かうとしました。

けれど、あひにく、今
度は上から伸ばしても、下から廻しても、うまく手の届かない所でした。

とう／＼若い男は怒り出しました。
「馬鹿め！いくらでも悪さをするが、いや。その代り、見ろ。すぐに
頭から、い／＼香ひの黄色い粉をぶつけてやるからなその時になつて、

汽車の音

神奈川県
逗子町

河邊すみ子

汽車の音きくたび
考へる

大阪へ行つた

おばあさま

今はなき

おばあさま

朝もや

千葉県
岡部高二

福原みつ子

朝もやが深い

友のこゑがする

をながもなく

先生が来たよ

霜の朝

東京市
浅草

久保田曉蔵

今朝

田圃道を通つたら

すてたわらちに

白い霜がおりてゐた

歸り路

千葉県
岡部高二

清水 信夫

父と祭からの

かへり路

道ばたの青草が

三日月に照らされた

たまにコホロギがなく

だまつてる路

九八

どんなに泣いたつて、眼を廻したつて、誰も知らないぞ。」

若い男はブン／＼怒りながら、もうこれからは、どんなに蚤が刺したつて痒くなつたつて、決して構うまいと決心しました。そしてその悪戯者を脊中に背負ひ込んだ儘、風を切つて自轉車を飛ばして行きました。

蚤は、自分が、今どんな早さで、どんな所へ運ばれてゐるかななどと云ふ事は、少しも知りませんでした。只、とし／＼、若い男の身体から、おいしいミルクを吸ひ續けました。

お腹が一ぱいになりました。お腹が一ぱいになると、暖かさは暖かし、すぐ睡くなつて來ました。

『あー、いゝ心地だ。どれ一ねいりしようかな。』

蚤は、若い男の脊中の邊の、着物の襷へもぐると、すぐグウ／＼寢込んでしまひました。

三

若い男は、漸く町の藥屋へ來ました。

『蚤取粉を下さい、うんと強いのを。』

『かしこまりました。これなら如何でせう。』

『効きますとも。蚤はおろか、蠅でも、蚊でも、蜘蛛でも、す

ぐに殺す力を持つてゐます。』 若い男は蚤取粉を買つて、藥屋を出ました。

『先づ、今夜からは安心だ。蚤の奴、今にどんな目にあはしてやるか、見ろ。』

若い男はホクン笑みながら、自轉車を飛ばしてゐました。

大通です。馬車が來ます。自轉車が來ます。電車が走りま

す。人がウヨ／＼と動いてゐます。

ふと、向ふの方から一臺の自動車か、疾風の様に飛んで來ました。若い男はハツと思つて左へよけました。と、忽ち、左の角からも一臺の自動車か、ヌツと顔を現はしました。若い男



だりや

山形縣樺
澤校尋六 長岡キクヨ

だりやの花は
うつくしい
だりやの花は
しをれると
みなおちる

風

山形縣樺
澤校五 石澤 ヨシ

しやせいをしてゐると
風にふかれてゐる木
どうしても
かかれぬ
あられ

京師日出
校尋三 河野 浩

あられが
ガラスまどにあたつて
ばち／＼
音たてる

煙

千葉縣平
岡校高二 根本 三つ

落葉たいた夕方
其のけむりが
はしものまわり よどんでる

赤ごんば

甲府市
佐度町 豊島 泰

青い空 赤とんぼ
小さくなるまで
はつきり見える

一〇〇

はすつかりドギマギしました。ハンドルが狂ひました。アツと云ふ間に、若い男は突き倒され、自動車はその脊中を轢き過ぎました。若い男はもう生きてはゐませんでした。

人が黒山の様に集つて來ました。

「何だ／＼。自動車に轢かれたんだ——のろまな男だな。」人々は囃しました。

サーベルを下げて、髭を生やした、こわい顔のお巡りさんも走つて來ました。

「この男の持ち物としては、蛋取粉三罐だけかな。アーン。」お巡りさんは手帳を出して、その事をつけ込みました。

「なんだ、蛋取粉なんぞそんなに澤山買ひ込んで、いつたい何にする積りだつたらう。變な男だな。」人々は又囃しました。

四

どれだけの時間が過ぎたでせう。

「ハツクシヨン！」

蛋は噓一つして眼が覺めました。あたりがすつかり冷え切つて、寒さがゾクゾク身に浸みて參ります。

「ばかに寒くなつたぞ。一體どうしたんだ。」

蛋は着物の襷から、ちよつと顔を出して見ました。すると驚きました。今迄、あんなに暖かだつた若い男の身體が、いつの間にか、石の様に冷えてゐて、いくら吸はうとしても、ミルクはちつとも出では參りません。

「オヤ／＼、又一厄介か。」

蛋は、しぶ／＼若い男の身體から這ひ出しました。

「つまらないな、又そろ／＼腹が減つて來た。第一、こんな所にあると身體が冷えて仕様がな。うんと暖かくて、おまけにしこたま御馳走のある様な所はないものかなあ。」蛋はビンと一つ大きく跳ねて見ました。地面には固い石がゴ／＼してゐて、跳ね落ちると、口もきけない程、痛い目にあはねばなりませんでした。

「アイタタツ！ 何て痛い所だ。」

蛋は顔を擧めながら、尙も跳ね續けました。そして、ふと、又、自分の身體が、フワリと柔かい物に支へられたのを感じました。

暖かい、うまさうな、人間の身體の香ひが、ブン／＼香つて參ります。第二番目の御馳走と、寢床とが見つかつたのでした。

「しめ／＼！」蛋は、恐い顔をしてそこに立つてゐる、お巡りさんのズボンの縫ひ目を、悠々と這ひ上つて行きました。

(をばり)

(作者住所 山梨縣四八代郡上九一色村)

梅と椿

若山牧水

梅の花の白いのは

雪やこんこん降りがため

椿の花の赤いのは

雪やこんこん降りがため

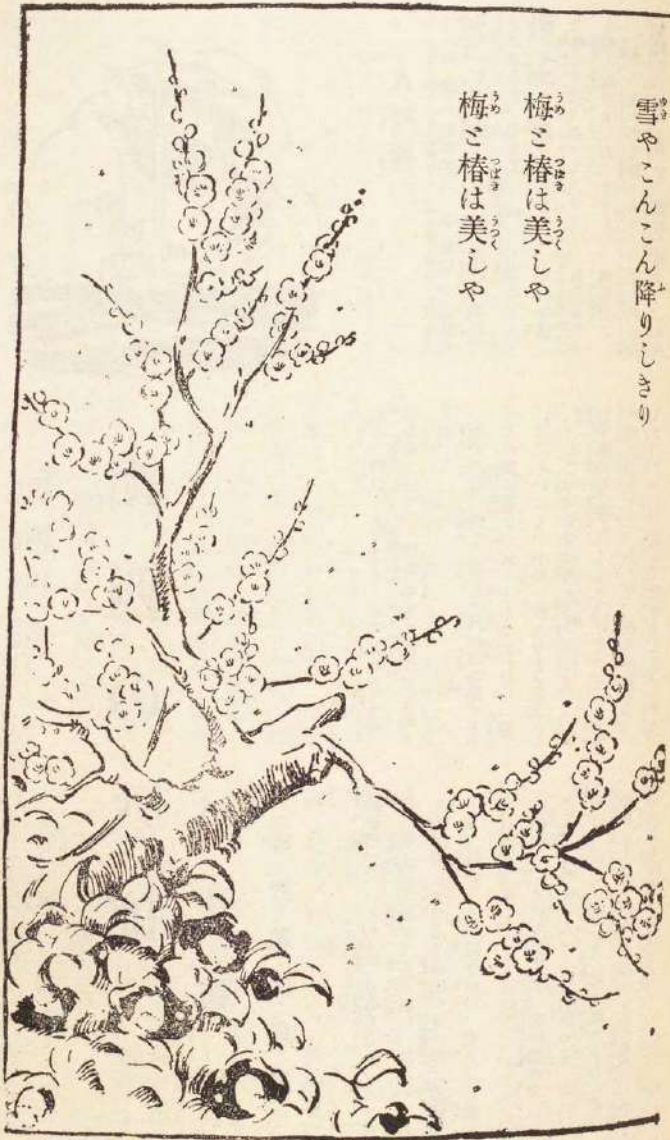
雪やこんこん降りしきり



雪やこんこん降りしきり

梅と椿は美しや

梅と椿は美しや



(爲朝物語)

鎮西の八郎

三島霜川

寺内萬治郎畫



八町磯

八町磯の紀平治は、舊虬山で爲朝を見失ふと、一時は、まづたう遠方に暮れて了ひました。しかし、幸に甘藷をウソと撥つて持つて居りましたので、それを焼いて喰へば、あつちこつちと、爲朝の行方を探し廻りました。さうして、奥那原といふ港の方へ出て参りますと、丁ど其の時爲朝は、その港から船に乗り込んで、九州

の方へ向はうとすると、船は今、帆を張上げて、港口の方へ出かけてゐました。紀平治は、港の者から其の事を聞くと、すぐに船に追いつかうとしましたが、港には、あいにく、小船一艘ありませんでした。そこで、すぐに素ッ裸になつて、着物を太刀を頭にくくりつけて、バツと海へ飛び込みました。そして、波手を切つて、さうさうと、泳いで行きました。しかし、

紀平治が、いくら泳ぐ名人でも、大きな帆を張上げて駛つて行く船に、追いつかれる筈がありません。波浪や大浪を、乗越え、泳いで、紀平治は、だんく後れるばかりでした。爲朝は、それを見ると、船の舷の方に立つて、『帆を下ろせ。船を停めよ。あれ、助けて。』と、喚ち、氣を揉みましたが、船頭とは、一人として、その命令に従ふ者はありませんでした。

紀平治は、泳ぎ、船は、駛る。さうして、一町、二町と、兩方の間が、だんく遠くなつて行きました。爲朝は、『もう、駄目だ!』と思つて、只、足すりして居りました。

紀平治は、細い麻繩のやうな長い、細の紐に、何百丈もあらうといふやうな細の紐に、絆を退治したのと同じやうな分銅をつけて、自分を承巻のやうにして、グルグル巻きつけて居りました。紀平治は、それを、恰も蜘蛛が糸を吐き出すやうに、片手でもつて、魔術のやうに、ソロソロ繰出したが、片手で泳いで行きました。さうして、支度の出来たところで、船の帆柱を目掛けて、ヤツと、分銅を投げつけました。

分銅は、細の紐の尾を引いて、船の帆柱に飛びました。そして、帆柱に命中つて、めり込むどころか、爲朝は、走寄つて、細の紐を押へて、手繰りかけました。細の紐の片はしの方は、紀平治の胸に、しツか

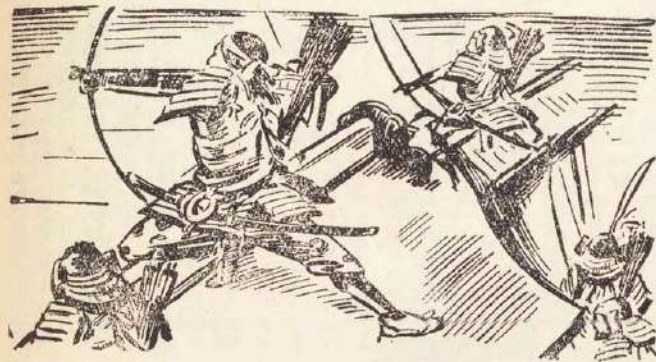
と、括りつけてありました。それで、紀平治は、程なく船に泳ぎつく、とが出来ました。爲朝と紀平治とは、抱合ふやうにして、互に、無事な再會を悦び合ひました。

保元の二十八騎

九州の阿蘇に歸ると、爲朝は直ぐにまた旅装を改めて、都へ上つて行くことになりました。お供の家來は、透間主計悪七別當、手取の與次、與三郎の兄弟、大矢の新三郎、越矢の源太、松浦の次郎、打出の紀八、高間の四郎などの勇士に、八町磯の紀平治を加へて、廿七人。それが、かはるゝ籠に入れた『金札の鶴』を擔つて、長い旅に上りました。都へ上ると間もなく、歴史に名

高い『保元の亂』といふ戦が始まりました。爲朝の兄の義朝は、大勢の家來をつれて、後白河天皇のお味方となりました。こちらには、平の清盛も一方の大將になつて居りました。

さて、爲朝の父の六條判官爲義は、崇徳上皇のお召によつて、四男、頼實、五男、頼仲、六男、爲宗、七男、爲成、九男、爲仲等を引きつれて、その方に参りました。爲朝も、むろん、廿七人の勇士をつれて、父に従ひました。こちらの方の大將は、左大臣藤原頼長といふ人でした。しかし、爲朝は、この戦の大立者でした。爲朝は、頼長に謀をすゝめて、『凡そ、戦に勝つには、夜討はど



「好いものはありません。今夜、敵に夜討を仕掛けて、一舉に、やつつけて了ふが宜しうございましょう。」と、云ひました。

すると、頼長は、「フ、ン、お前はまだ小僧だよ。戦には、少しく経験があるさうだが、それも、片田舎の小せりあひに過ぎんのぢやないか。今度の戦は天下のお争である。よろしく堂々とやらなければ可かん。」

と、云つて、威張つて居りました。

爲朝は、自分の謀が、とても取上げられないと見て取ると、それきり、黙つて了ひました。そして、自分の扣所へ歸つて來ると、「長袖のお公家様には、戦のこと

一〇六

は解らない。敵の方には、兄の義朝がある。あれは、戦上手だから、今夜、きつと、夜討を仕掛けて來るに違ひない。さうして、この戦は、こつちの敗だ。」

と、紀平治等に云つて聞かせました。

真夜中過になりますと、果して、後白河天皇の方の義朝に清盛。それと、源頼政などの大將が、一千七百の兵を引きつれて、崇徳上皇の御所に押寄せて來ました。

その時になつて、頼長は、大に慌てました。そして、急に爲朝を「藏人」といふ官に引上げて、爲朝の機嫌を取らうとしましたが、爲朝は、

「いえ、戦をするに、官も位も要



りません。私は、鎮西の八郎で可いのです。」と、キツパリ斷つて、僅に廿七人の家來だけを引きつれて、御所の西の御門を守つて居りました。

西の御門へ向つて來たのは、清盛でした。これが、伊藤景綱、伊藤五、伊藤六の三人を眞ッ先驅として、六百の兵を以て押寄せて來ました。

爲朝は、ビクともしませんでした。

「どれ、平家の弱蟲めらに一泡噴かせて遣らうか。」と、弓を取つて、一矢放ちました。その矢が、伊藤六の胸を射貫いて、次の伊藤五の鎧の袖に立ちました。六は、ム、と呻いて、そのまゝ死んで了ひま

した。五は、ビクくりして、その矢を持つて行つて、清盛に見せました。その鎌の大きさが、丁ど鑿ほどもありました。

清盛は、それを見て、たまげて、舌を捲きました。

「こんな奴に出會つては、かなはん。他の門へ向はう。」と、飾毛を擲つて、北の御門の方に向ひました。長男の重盛は、それを「卑怯だ。」と云つて、踏止まらうとしましたが、清盛は、きかないで、そこを引上げて了ひました。

清盛と入替つて、こゝへ向つて來たのは、義朝の家來の鎌田政家でした。これが百騎の兵で攻立て來ますと、爲朝は、門を開いて、廿八人、一とかたまりになつて突



進して、見る／＼うちに追散らして了ひました。すると今度は義朝が、自分に、三百の兵をつれて向ッて來ました。夜の明けかゝる頃でした。

「お前は、兄に向ッて矢を引くのか。」

義朝は、さう云ッて、爲朝を罵りました。

「さういふあなたは、父に向ッて弓を引くのですか。」

と、爲朝は、やり返しました。

義朝は、返事をしないで、「それッ」と、軍勢を指揮して、猛烈に、打ッてかゝりました。爲朝は「敵であつても、兄を殺すのは、道でない。おどかして、追逃げよう。」と、一矢を放ッて、義朝の兜の星

を射貫きました。

「お前は、まだ、うまくないな。」

と、義朝は、哄ひました。

「わざと、然うしたのです。お望みならば、何處でも射て御覽に入れましょう。」

さう云ッて、爲朝は、直ぐに矢を番ッて、義朝の家來の一人を射倒しました。しかし、義朝は、その弓勢に恐れて、他の門へ向ッて行くやうなことはしませんでした。さうして、双方が入亂れて、劇しい戦になりました。

義朝の方には、大勢、強い家來が居りました。それで、爲朝の方の廿七人の勇士も、だん／＼に討たれて、透間主計や手取の兄弟を始め、二十三人まで討死して了ひ



ました。それでも爲朝は、紀平治等と、僅に五人で、堅く門を守ッて、敵を、一步も、門内に入れずに奮闘して居りました。

するうちに、義朝は、御門の一方に火を放けて、火攻にしました。西風の烈しい朝でした。火は、見る／＼うちに、御殿に燃移ッて、さすがに爲朝も、御門を守ッて居られなくなりました。さうして清盛の向ッた北の御門も破れて、御所も焼拂はれて了ひました。

肘を抜かれて

この戦は、上皇方——即ち爲朝等のお味方をした方の敗となりました。

爲朝は、爲義に従ッて、叡山に

逃げました。さうして、爲義は關東の方に下ッて、二度の旗上げをしようとしたのですが、あいにく、病氣にかゝッて、髪を剃り落して坊主になりました。そして、子どもの頼賢や頼仲爲仲等と一緒に、爲朝をたよッて、降参しました。

爲朝は、「降参したなら、きつと首を斬られて了ふ。」と、云ッて、父や兄に別れて、只、一人、近江の國の方へ逃げました。爲義は、果して、その後、六條朱雀といふところで斬られて了ひました。

爲朝は、近江の國の輪田といふところに隠れてゐて、機を見て、九州の方へ下らうとしてゐるうちに、運悪く病氣に罹りました。幸に、その病氣は、だん／＼快くな

りましたが、密告する者があつて、ある日、温泉に入つてゐるところを、三十人の敵の勇士に圍まれて、捕つて了ひました。それは保元元年の九月二日のことでした。

爲朝は、都に送られました。そして、爲義等と同じやうに、首を斬られるところでしたが、朝廷の方にも、

「爲朝は、稀代の勇士である。この勇士を、ムザ／＼殺して了ふのは惜い。」

と、いふ人もあつて、命だけは助けられました。さうして、肩の番をはづされ肘を抜いて、伊豆の大島へ流されました。肘を抜かれて、爲朝は、力は少し弱りました。手が長くなつて、弓を引くこ

とは、反つて以前より上手になりました。

九州の方でも、舅の阿蘇忠國は、菊地、原田の兵に攻められて、討死して了ひました。そして、爲朝の妻の白縫姫も、阿蘇の館を落ちて、討死をしたか、何處へか隠れたか、それさへ解らないといふことでした。八町礪の紀平治は、何うしたでしょう。——これは、爲朝等が叡山に登る前に、爲朝と約束をして、九州の方へ落ちて行つたことだけだつた解つてゐました。

秘密の使者

春が去り、夏が来て、爲朝は、「流人」として、十年あまりを島に暮らして了ひました。島では、

と申してゐるやうでございます。」
「島の者ではないのだな。」
鬼夜叉は、もしや、都の方から間諜でも来たのではないかと思つて、ちよつと、心配さうな顔つきをして、たづねました。

「いゝえ。」と、島の者は頭を振りました。

「侍ではないのか。」

「違ひます。」

と、島の者は、ぶツきらばうに云ひました。

「逢ふて追るぞ。庭に廻せ。」

爲朝は、むぞうさに云ひました。さうして、その「おかしな奴」は、丸木の椽先へ連れて來られ

た。
見ると、まツたく、おかしな奴

でした。腰に腰刀をつけて、頬骨が高くツて、色の眞ツ黒な大きな男でしたから、漁師かと思ふと、さうでもない。また、時たま伊豆の方から來る商人でもあらうかと思ふと、然うでもありません。しかも、此奴が、長い刀を帶して、どこか、侍らしい様子もしてゐるのです。

「何んの用か。」

爲朝は、まづさう訊ねました。

その男は、蜘蛛のやうに平伏したまゝ、何んとも返事をしませんでした。そして、そのぶざまな恰好も、丁ど蜘蛛のやうでした。

「都から参つたのか。」

爲朝は、かされて、たづねました。

鬼夜叉といふ家來も出來ました。また、龍江といふ、島長の女を娶つて、爲丸、朝稚、島君といふ三人の子どもたちも出來ました。さうして、自分は、伊豆の七島を征服して、島の王様のやうに威勢をふるつて居りました。

兄の爲丸が九歳になり、弟の朝稚が七歳になつた年の正月のことでした。爲朝は、鬼夜叉たちや島の者を集めて、暮方から祝酒を汲交して居りました。すると、そこへ、島の者が一人、ひどく慌てて、飛込むやうにやつて來ました。「殿。おかしな奴がやつて参りました。こちらに見馴れない變な奴でございます。言葉がよく、解りませんが、何んでも殿に逢ひたい

「いえ、然うではございません。」と、その男は、キツパリと云ひました。そして、「密に殿に申し上げたいことがございまして、關東の方から参つた者でございます。」それが、いかにも侍らしい、しツかりとした言葉でした。

「關東。」は、武藏相模を始めとして、爲朝の曾祖父さんに當る八幡太郎義家に、縁故の深いところでした。で、爲朝は、「關東。」と聞くと、何んといふことはなしに、なつかしいことに思ひました。

「ナニ、關東から來たと申すか。」

「左様でございます。」

「關東は何處ぢや。」

その男は、平伏したまゝ、黙つて居りますと、爲朝は、他の者が

ゐては、話が出来ないのだと察して、鬼夜叉等に、その座を去るやうに命じました。鬼夜叉は、鬼のやうに怖い顔をして、その座を立つて行きました。

「誰も居らん。何んでも話すが可い。」

爲朝は、久しく、島の者より他に逢ったことがないので、この「おかしな奴」を珍らしくも思ひました。それで、言葉も打解けてゐました。

「私は、下野の足利義康の家來、梁田の二郎と申す者でございます。主人の吩咐で、一大事をお知らせに参りました。」

おかしな奴は、急に、おかしな奴ではなくなつて、着物の襟の糸

を抜いて、ビリ／＼と綻ばしました。そして、一通の手紙を引出して、爲朝に渡しました。

「ナニ、義康殿の家來ぢやと。」

爲朝は、びつくりして、手紙を取上げました。義康も、やはり、八幡太郎の孫で、爲朝とは、血筋の縁がありました。——委しく云ひますと、八幡太郎の三男義國が、下野の足利の土地を貰つて、その土地の名を自分の名前にして分家したのでした。義康は、その義國の子でした。

義康の手紙には、まづ、都の方では、すでに八年前に、義朝が滅びて了つて、今は、清盛の一族だけが榮えてゐることが書いてありました。それから、爲朝が縦

に、伊豆七島を征服して、王様のやうに威勢をふるつてゐるのは、朝敵同然とあると云つて、近日、多くの軍勢を差向けて、征伐するといふ噂のあることも書いてありました。さうして、「私は、四十になつて、まだ一人の子もありません。聞きますと、あなたには、三人のお子さんがあるさうです。どうでしょう、私に、そのお子さんの一人を下さいませんか。私は、自分の子にして、足利の家の嗣子に致します。元々、あなたも、私も、義家公の血筋ですから、さうして戴くと、源氏の血筋のために、まことに悦ばしいことでございいます。」といふ意味が、懇に書いてありました。

爲朝は、その手紙を見て、少らくじつと考へて居りました。そして

とが書いてあるか知つて居るのか。」と、たづねました。

「はい、私は只、お子様の内のお一方を、お供致して歸るやうにと申しつけられてございます。」

「然うか。ちやがナ、俺は朝敵となつて、この島に流されてゐる者であるぞ。假に、義康殿が申越された通り、倅、一人を差上げるとしても、その倅は、天下の罪人の子ではないか。お上みのお許しがなくては、この島を出て行くことはならんぞ。」

「左様でござりまする。なれど、いかに、天下の罪人のお子様でも、死亡なつた者には、おとがめはございますまい。」

「おかしな事を云ふ。俺が三人の

子は三人ともに達者であるぞ。」

爲朝は、ささく、軽く笑ひました。

「仰せではござりますが、お丈夫なお子様でも、お亡しにならうとさへ思召せば、いくらでもお亡くなりになります。そこは、御思案次第でござります。」

と、梁田の二郎は、謎でもかけるやうに、妙なことを云ひました。爲朝は、また、じつと考へ込みました。梁田の二郎は、ケロリとした顔つきで、マジリ、マジリ、爲朝の様子を見て居りました。

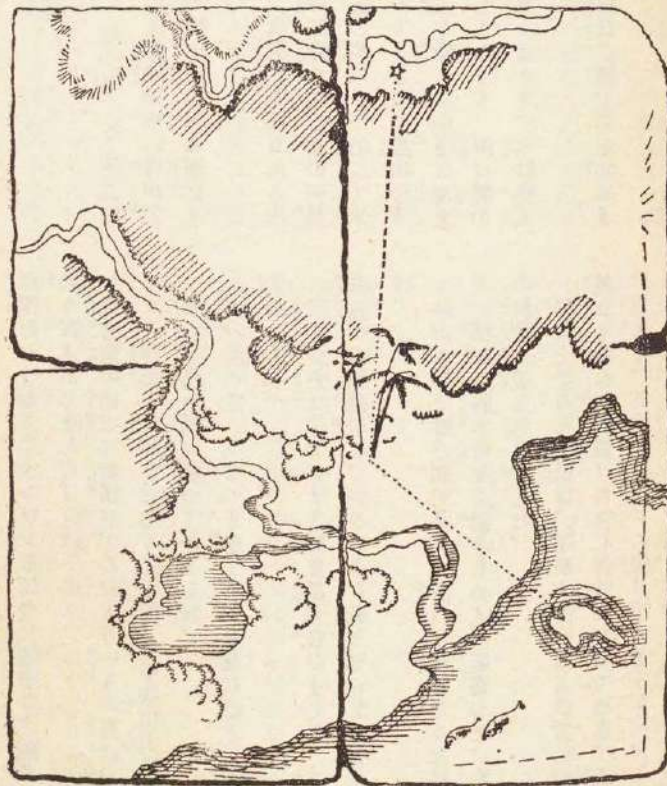
「いや、梁田。平家の奴等が、朝廷の名を借りて、この島へ軍勢を差向けようとは、かねて、覺悟をして居つた。もし、さうしつたら、



「お前は、この手紙に、どんなこ

支那人のヤク笑ひ

最上龍之介
本圖一画



「作どもは刺殺して、俺も腹を切る……さうとは思ふてゐるが、そちは、死亡なつた件をつれて行ッて、どうするのぢや。」

「下野にお供をして、足利のお家の柱と致します。」

「死亡なつた者を……。」

「左様でござります。尤も、その死亡なり方に、仕方がござります。よう。そこが、智慧の働でござります。お首なぞ、お討ちになしましては可けません。お子様のうち、お一方をお捨てなさるのでござります。」

「捨てるのか。」

「左様でござります。この島の外は、廣い海ではござりませぬか。お捨てなさるに、都合が宜しうござります。」

「致します。」

「ム……。」と、爲朝は、にっこり笑ッて、

「それを、そちが拾ふて、船へ乗せて行くのか。」

「いえ。」

と、梁田の二郎は、しぶい顔をして、頭を振りました。

「私が船へお乗せ申しなど致しましては、やはり、天下の罪人の子を、島からお連れ申して逃げたことになりまします。それでは、私も天下の罪人になりましますから、左様なことは出来ませぬ。」

「では、何うするのぢや。」

爲朝は、何うしても、その言葉の謎が解らないので、むづかしい顔をしました。

「それでは、申上げます。ちと危ない仕方ではござりまするが。」

さう云ッて、梁田の二郎は、爲朝の耳元へ口を差しつけるやうにして、小さな聲で、その仕方を話しました。

梁田の二郎は、爲朝に、どんな事を話したのでございましょう。それは、誰にも解りませんでした。さうして、梁田の二郎は、あく朝、東がしらゝとする頃に、自分で小船を漕いで、一人で、伊豆の方へ歸ッて行きました。

爲朝も、只一人、岩の上に立ッて、その小船が、浪の間に見えなくなッて了ふまで見送ッてゐました。

(つゞく)

一、エバンスの夢

獨木舟は、もう陸地間近のところに来てゐました。打ち寄せ打ち返す白波の間に、暗礁の割れ目が見えてゐて、其處は、小さな川が海へ流れ入る所だといふことを示してゐます。

遠方の小山の傾斜に添ふて、次第々々にこんもりと緑の色を深めて、太古の森林が走つてゐるのが見えます。森林は、此處では濱邊の際にまで迫つて來てゐます。遙か彼方に、ぼんやりとまるで雲のやうな地膚で聳えてゐる山々は、波が急にそのまゝ凍え固まつてしまつたやうな姿をしてゐます。海は靜かで、微にウネリの音が聞えて來るばかり、空は燃えるやうに輝いてゐました。

彫刻のしてある櫂を持つた男は、漕ぐのを止めました。『確に此處に違ひあるまい。』と彼は云ひました。彼

は櫂をしまつて、ヤレヤレと云つた様子で、兩手を前へ突き出しました。

獨木舟の前方に腰掛けてゐたもう一人の男は、チーッと陸地を眺めまはしてゐます。その膝の上には、一枚の黄色い紙が載つてゐました。

「エバンス！　ちよつと來てこれを見な。」と、彼は云ひました。

二人の男は、ヒソ／＼聲で話し合ひました。二人共唇は強張つて、カラ／＼に乾き切つてゐたので

エバンスと呼び掛けられた男は、泳ぐやうな格好で、揺れる獨木舟を、踏みしめ／＼近寄つて、對手の肩越しに覗き込みました。

見たところその紙は、略圖のやうなものでした。幾度も疊んだり擴げたりしたからなのでせう、折目が出來て、其處から二ツに裂けてゐます。エバンスを呼んだ方の男は、色の褪めたその二枚になつた紙

片を、切れ目のところで繋ぎ合せてました。鉛筆の痕ももう消えかゝつてはゐましたが、その紙には、ボンヤリと、この入江の圖が書いてありました。

「此處があの暗礁で、こゝが割れ目のところだ。」とエバンスが云ひました。彼は、拇指の爪を、略圖の上に走らせました。

「この曲つたり捻れたりしてゐる線があの川だ。サア一杯飲めるぞ！——そして、この星印が例の場所だ。」

「こゝに點々の線があるね。」と地圖を持つた方の男は云ひました。「眞直な線で、暗礁の割れ目から椰子の樹の木立へと續いてゐる。星印は、恰度この點の線が、川に突き當るところについてゐる。俺達

は、湖へ入るまでに、例の場所をすつかり頭のかへ入れちまはなくてはならない。」

即ち假のためだらう。家か何かの積りでつけたものらしいが、それに此方へも向き、彼方へも向いてゐるこの小さな（——）線と來たら、何の心算で書いたものが薩張り見當がつかないね。どんな奴が書いたのだらう。」

「支那人さ。」と、地圖を持つた男は云ひました。

「成程！　彼奴は支那人だつた。」とエバンスが云ひました。

「彼奴等の書き方と來ると判らないからなア。」と、地圖を持つた男がまた云ひました。

二人は、五六分間の間坐つて陸地を見詰めてゐました。獨木舟はユラリ／＼と流れて行きます。エバンスは、櫂の方へ眼を向けました。

「ホッカー！　サアお前の漕ぐ番だ。」と、彼は云ひました。

合棒は、大切さうに地圖を疊んでポケットに入れエバンスの前を氣をつけて通つて、漕ぎはじめまし

た。彼の動作は、氣力のまるで失せてしまった人のやうに、ぐんなりとしてゐました。

エバンスは坐つて、薄眼を開けて、防波堤の方を見詰めてゐます。空は、溶鑪のやうに輝いてゐました。太陽が頂點附近に來てゐたからです。二人は、あの「金塊を埋めてある場所」に、もう直ぐといふところまで近寄つてゐたのですが、エバンスは、想像してゐたやうな得意な氣分にはなれませんでした。この冒險をやる前に、物凄い格闘をやつて、すっかり神經をとがらしてゐましたし、それに何の準備もない獨木舟で、本國から長い間夜航を續けて來たために、身體はへトへトになつてゐて、平素の元氣は、まるで無くなつてゐたのです。



上に馳せ戻りました。彼の唇と咽喉とは、もうとても我慢のしやうもない程にカラ／＼に乾き切つてゐたのです。暗礁を洗ふ調子のいゝ浪の響が、もう判然と聞えて來ました。後の耳には、それは音樂のやうに響いてゐました。浪は、獨木舟の舷側を洗ひ、櫂は、一漕毎に、滴を散らしました。間もなくエバンスは、居眠りをはじめました。

それでも彼は、ボンヤリながらも島のことを考へてゐたのですが、不思議な夢の織絲は、到々彼を夢の世界へと織り込んでしまひました。眼の前に、もう一度、彼と仲間のホツカーとが、例の支那人達の秘密を嗅ぎつけたあの晩のことが浮び上つて來ました。――彼は、月光に輝く樹を見ました。微かな火が燃えてゐて、三人の支那人の黒い姿――半身は、月の光で銀色に輝き、半身は赫々と炎に照らし出されて、――そして彼は、その支那人達が、奇妙な英語で語り合つてゐるのを聞きました。彼等は、方々

の國から來たものなのです。最初にその會話のキングレを聴きつけたのはホツカーでした。そしてホツカーが、彼によく聴けと指圖をしたのです。とぎれ／＼に聞える會話は、聴きとり悪くて、ところ／＼は、何を話してゐるのか、意味が判りませんでした。が、結局それは、かふいふことなのでした。

今から二百年前ヒリツピン島の島から船出したスペインの貿易船が、或る島の附近で暗礁に乗り上げ、修繕の見込も立たず、どうにも助かる方法がつかなくなつてしまひました。そして積み込んであつた金塊は、残らず島に埋められてしまひました。はじめは元氣だつた船員達も、段々と病氣やら食物の不足やらで減つて行き、しまひには、何艘もあるボートから永久に人の聲が聞えなくなつてしまひました。今からやつと一年程前のこと、世界中をウロツキ廻つてゐた支那人のチャンハイが、ジャンク船に乗込んでその島に立ち寄つた折、偶然二百年間に渡つ

て隠されてあつたその「金塊」を発見したのであります。ジャンクから脱走した彼は、何とも云ひやうの無い艱難辛苦の末、たつた一人で、しかも實に安全にその「金塊」を埋め變へました。彼は、金塊は必ず安全であるといふことに、堅い信念を持つてゐました。どうしてチャンハイはさう堅く信じてゐる事が出来たのでせう？ それはチャンハイの秘密でありました。

ところで、彼は、島へ引返して金塊を掘り出して来るには、どうしても他人の手を借りなければならぬことになりました。さうしたことから、例の地圖は擴げられ、支那人達の聲音も急に低くなりました。貧乏な、ホツカーとエバンスといふ二人の浮浪人にとつては、何といふ旨い話だつたでせう！

エバンスの夢は、彼が、チャンハイの辨髪を握つた、その瞬間の状態に變りました。支那人の生命は、此の瞬間に振はれました。最初は、驚ろかされた

て行きました。と、煤燭と輝いてゐた金塊の積み重なりが、俄に溶鑪と變つて、凄まじい唸り聲を擧げました。そして、不思議な程チャンハイによく似てゐる、しかも太い眞黒な尾を持った巨大な惡魔が、その溶鑪の中へ石炭を投げ込みはじめました。石炭は、凄まじい勢ひで燃え上りました。と、また別な惡魔が、彼の名を大聲擧げて呼んでゐました。「エバンス！ エバンス！ おい寢坊助！」——それはホツカーの聲だつたのです。

エバンスは、眼を醒ました。彼等は、湖の入口のところに來てゐました。

「彼處に椰子の樹が三本見える。あれこそ暗礁の割目から一直線の、灌木の木立の中のものに違ひない。」と、合棒のホツカーが云ひました。

「あれをよく覚えて置け。あの木立のところまで行つて、それから、一直線に例の森林を貫いて、川へ出た時には、目的地へ出られた時なのだ。」

蛇のやうに猛り狂つてゐたチャンハイが、次第々々に恐れに満ちた、しかも油斷のならない哀れつばさに變つて行つたその狡猾さうな小さな顔、それが眼の前に浮び上つて來ました。死に際にチャンハイは、ニヤ／＼と笑ひました。何とも得體の知れない、吃驚するやうな、薄氣味の悪いニヤ／＼笑ひでした。突然にすべてのことがらが、よく外の夢の裡でも経験するやうに、非常に不愉快なことになつて來ました。チャンハイは、ベチャ／＼と喋り立て、彼を嚇かしました。エバンスは、山と積まれた金塊と、其處へエバンスをやるまいと必死になつて遮るチャンハイの姿とを見ました。彼は、チャンハイの辨髪を掴みました。——すると、チャンハイの姿がだんだんと大くなつて來ました。それからチャンハイはどんなに淫擧いで、どんなにニヤ／＼笑ひを續けたことでせう！

チャンハイの姿は、尙も、ドン／＼と大きくなつ

擴がつた川口が、二人の眼に入つて來ました。それと見てエバンスは元氣を回復しました。そして、「おい！ 急げ！」と、叫びました。

「グズ／＼してゐると、海の水でも飲まずにやゐられなくなつて來る！」

彼はもどかしさうに手を噛みました。そして岩や、緑の藻の間の、銀色の閃光を凝視しました。

間も無くエバンスは、凄まじい見暮で、ホツカーの方を振り向きました。

「權を貸せ。」と彼が云ひました。

さうかうしてゐる程に、二人は、川の口につきました。少し漕ぎ上つたところで、ホツカーは、掌へ水を掬つて、一寸味はつてみましたが、吐き出しました。まだ鹽辛かつたのです。更にも少し行つてから、彼はもう一度やつてみました。

「これはいゝ。」と彼ははじめて云ひました。二人は夢中で飲みだしました。

「畜生！　まだるつこしいな。」と、唐突にエバンスが叫びました。

そして後は、獨木舟の前部から、危ふく身を乗り出して、口で水を吸ひはじめました。

やがて二人は、飲むのを止めました。小さな入江の中を走つてゐた獨木舟は、水際にまで垂れ下つた、麝香とした茂みの間につかうしてゐました。

「例の森林を探し出して、金塊の埋つてゐる場所へ續く道を見付けるには、此處から這ひ上つて、濱邊へまで行かなければならない。」とエバンスは云ひました。

「舟で廻つた方がいゝ。」とホツカーは云ひました。

で、二人は、また川から海へ漕ぎ出て、海岸に添ふて灌木の木立のところまで漕ぎ戻りました。此處で二人は上陸して、軽い獨木舟を、濱からずつと離れたところへ引き揚げ、荒地の端まで來ました時、暗礁の割目と恰度一直線になつてゐる例の森を見付

した。奇妙な白い花がその幹毎に垂れ下つてゐて、繩のやうな蔓草は、樹から樹へと揺れてゐます。陰影は濃くなつて來ました。地上には、斑點のある菌類や、赤みがかった褐色の苔やが殖えて來ました。

エバンスは身震ひしました。

「暑いところから入つて來た所爲か、馬鹿に寒いや。」

「地圖に書いてある「直線」通りに進んでゐるのだといふが。」と、ホツカーは云ひました。

やがて遙か彼方に、薄闇に包まれて、森の切れ目が見えました。烈しい日光の白い箭が、そこから森を襲つて來てゐます。其處にはまた輝かしい緑の林や、色のある花やが見えました。と、續いて二人は、烈しい水音を耳にしました。

「ツラ、例の川だ。もう直きだぞ。」と、ホツカーは云ひました。

川岸に近づくほど草や木は麝香として來ました。大木の根方に生ひ茂つてゐる名さへも知れぬ大きな

け出すことが出來ました。

一二二

エバンスは、獨木舟から、自分の故郷で使ふ、妙な道具を持つて來ました。それは「工」の字形のもので、横側は、ピカ／＼した石で出來てゐました。ホツカーは、櫂を持つて來ました。

「サア目的地は、この方向に向つて一直線だ。」と彼は云ひました。「川に突き當るまでは、どこまでもこの森を貫いて進んで行かなきゃならない。堀りはじめるのはそれからのことだ。」

二人は、絡み合つた草や、巨木な葉や、若木やの間を進んで行きました。

二、誰れか以前に來た奴がある

最初は歩くのに骨が折れましたが、見る／＼樹々は大きくなり、大地も廣がつて來ました。熱い太陽は、底知れぬ冷たい陰と入れ換りました。樹々は、遂には、頭上遙かに緑の空に聳え立つ巨柱と變じま

植物は、晴れ渡つた大空へと菩薩形の大きな緑の扇を差しひろげてゐます。澤山の花と、澤のある簇葉をつけた蔓草とが、その幹に纏りついてゐました。廣々とした静寂な沼の面に、睡蓮に似た蠟細工のやうな淡紅色が、つた白色の花と、巨大な卵形の葉とが浮いてゐるのが見えました。川は、遙か下手で、急に折れ曲つてゐるので、其處では俄然白浪が騒ぎ立ち、水聲も急に激しく聞えて來ます。

「どうだ？」と、エバンスは云ひました。

「直線から鳥渡外れた。」とホツカーは云ひました。

「然うだらうと思つてゐたんだ。もう少し行つて、この流れに添ふて下れば、何かにぶつかる筈だ。」

「何だつけな——」と、エバンスは云ひました。

「チャンハイは石を積み重ねて目標にして置いたと云つてたがなア。」と、ホツカーが云ひました。

二人は、一寸の間、顔を見合せました。

「兎も角、もう少し下流へ行つてみやうぢやないか。」

一二三



と、エバンスは云ひました。

二人は、チロ／＼と四邊を見廻しながらソロ／＼歩きだしましたが、だしぬけにエバンスは立ち止まりました。

「一體アリア何だ？」と、彼は云ひました。

ホツカーは、エバンスの指さす方を見ました。「何だか青い色のものらしいが。」と、彼は云ひました。ダラ／＼上りに、地面の少し高くなつてゐる處まで來ますと、それが判然と二人の眼に映つて來ました。エバンスは、その正體を見定めやうとしました。

彼は、突然ツカ／＼とその傍へ進み寄りました。手足をガンナリと差し伸ばした何者かの身體が、判然と眼に入つたのであります。エバンスは、携へて來た例のL字形の武器をシツカリと握りしめました。青い色の正體は、支那人の死骸だつたのです。二人は、一齊に、向も間近く近寄りました。そして默然として、その氣味の悪い死骸を凝と見つめて

ゐました。死骸は、樹と樹の間の廣場に横たはつてゐたのです。死骸の直ぐ傍には、支那風の鋤が置いてありました。そして少し離れた處には、例の、石の積み重ねらしいものが散らばつてゐて、その直ぐ隣には、近頃掘つたものらしい穴が見えます。「誰か以前に來た奴があるんだ。」と、呆氣にとられたやうに、ボカンと口を開けながらホツカーが云ひました。

エバンスは、だしぬけに、狂人のやうに大聲擧げて罵りだしたかと思ふと、いかにも口惜しさうに地面を踏みました。

ホツカーは眞蒼になりました。が、一言も口を利きませんでした。彼は、死骸の方へ近寄りました。頸は、紫色にふくれ上り、兩の手と足首の邊も腫れ上つてゐました。

「チョッ！」と彼は舌打ちしました。そして急に向き直つて穴の方へ行きました。彼は驚きの叫び聲を

擧げました。彼は、ノソ／＼と自分のあとを跟いて來るエバンスの方を向いて怒鳴りつけました。

「馬鹿野郎！ 何ともなつちやぬない。内容はチャ／＼としてゐる。」彼は振り返つて支那人の死骸の方を眺めました。直ぐまた穴の方へ向き直りました。

エバンスは、穴の傍へ駆け寄りました。穴の半分方は、死體となつて横たはつてゐる不運な支那人の手で發かれてゐて、二人の足下には、穴の門か何かだつたらしい妙な黄色の棒が、五六本轉がつてゐました。エバンスは、穴の中へ屈み込んで、素手で土を拂ひ落しながら、巨大な金塊の中の一つを大急ぎで引張り上げました。

と、その途端、一本の小さな刺が、エバンスの手にチクリと刺さりました。よく見ると、細い小さな針のやうなものです。エバンスは指でその針を引き抜いて、金塊を持ち上げました。

「こんなに目方のあるものは、黄金か鉛だけだ。」と

雀躍しながら彼は云ひました。

「ホツカーは、まだ支那人の死骸の方をみつめてゐました。彼はしきりと考へ込んでゐました。」

「彼奴は仲間を出し抜いてやつて来たんだ。」と暫くしてからホツカーは云ひました。

「彼奴はタツタ一人で此處へやつて来たんだ。そして毒蛇が何かに殺られたんだ……。それにしても地圖は俺達の手に入つてゐるのに、どうして此處が判つたかな？」

三、怪支那人の死んだ原因

エバンスは、金塊を抱へて立つてゐました。

「二人で、金塊を持てるだけ持つて歸るとしよう。」

そして當分の間は何處かへ埋めて置きやい。どういふ風にして獨木舟へ持つて行かう？」

さう云ひながらエバンスは、ジャケツトを脱いで地面の上へ置きました。そして金塊を二個三個その



中へ放り込みました。と、間もなく彼は、また別な刺が、皮膚に刺さつてゐたのに気がつきました。

「この位のものなら二人で運んでゆくにも手頃だ。」と彼は云ひました。と、その途端にどうした理由か、急に變に腹が立つて来て、

「何をボカンと見てゐやがるんだい？」と、嗚鳴りました。

ホツカーは、エバンスの方へ振り向きました。

「俺は……彼奴をどうもあのまゝにしちや置けねえ。」

彼は、死骸の方を顎でしやくつてみせました。

「どうも何處かで見たことのあるやうな顔だが。」

「馬鹿！ 何を云つてゐるんだい！」と、エバンスは云ひました。「支那人といふ奴は大概同じやうな顔つきをしてゐるもんだ。」

ホツカーは、疑とエバンスの顔を見詰めました。

「兎に角俺は、あの死骸を埋めてやる積りだ。金塊を運ぶ手傳ひは、それからにする。」

「おい、ホツカー！ 馬鹿なことを云つちやア不可ない。」とエバンスは云ひました。「あんな穢らしい死骸なんぞ打捨つて置けよ。」

ホツカーは、一寸躊躇しました。やがて彼は、用心深く四邊の蒼色の大地に眼を注ぎました。

「俺は何だか薄氣味が悪くつてしやうがない。」と彼は云ひました。

「何云つてゐるんだい。」とエバンスは嘲笑ひました。

「俺達は、金塊のことだけ考へてありやアいゝんだ。どうだい、元通りに埋め直さうか。それとも森のあの難所を通つて舟へ運び込もうか？」

ホツカーは考へ込みました。どつちにしたらいいものかと當惑したやうなその眼差は、あの背の高い樹々の幹から幹の間に逍遙つた末、頭上遙かに燦爛と太陽の光りに輝く緑の葉の上に注がれました。その視線が、例の支那人の青い姿の上に止まつた時、ホツカーはまた慄然としました。彼は、樹々の間々



然罵り聲を擧げて金塊の入つてゐる上衣を放り出しました。彼は、突立つたまゝ、一瞬間といふもの、疑乎とホツカーの顔を見詰めてゐましたが、やがて唸り聲をあげて自分の咽喉を掴みました。

「俺の傍へ寄つちや不可ない。」と、云つたかと思ふと、彼は、樹の傍へ行つて寄り掛りました。と、前よりはいくらかしつかりした聲音で、「直きに快くなるだらう。」と、云ひました。

と、その中に、幹を掴んでゐた手が緩んで、エバンスは、する／＼と下方へ滑り落ちて、その根方で、ぐた／＼に身體を折り曲げてしまひました。兩の手は、痙攣したやうに虚空を掴んでゐます。顔は、苦痛のために歪んで來ました。ホツカーは彼の方へ近寄りました。

「俺に觸つちや不可ない！俺に觸つちや不可ない！」とエバンスは、呼吸も絶え／＼に云ひました。

「元通りに金塊を上衣の中へ運び込めよ。」

に見える灰色の奥を隈なく凝乎と見まはしました。「どうしたんだい、ホツカー。」とエバンスは云ひました。「平生のお前にも似合はないぢやないか？」

「兎に角、金塊は此處から運び出すとしよう。」と、ホツカーは云ひました。

ホツカーは、上衣の襟の兩端を持ち、エバンスは、反對の側の兩隅を持つて、二人は金塊を持ち上げました。

「どつちへ行く？」とエバンスは云ひました。「舟の方へか？」

二人がやつと五六歩歩いたばかりの時でした。

「奇怪しいなア。」とエバンスが云ひました。「こんな筈は無いんだが、先刻滑いだのが崇つてゐるのか、兩方の腕が馬鹿に痛い。ちつと休まなくつちやア。」

二人は、上衣を卸しました。エバンスの顔は眞蒼でした。そして小さな汗の雫が額の上に溜つてゐま

「どうも此の森の中は息苦しいな。」エバンスはかう云ひましたが、唐突に、何の理由も無いのに腹立たしくなつて來て、

「日中此處に待つてゐて何が、ことがあるんだい。手傳へよ、ヤイ！手前はあの支那人の死骸を見てからといふものは、唯ぶら／＼してゐて何にもしやしない。」

ホツカーは、凝乎とエバンスの顔を見守つてゐました。彼は、エバンスに手を貸して、金塊の入つてゐる上衣をまた持ち上げました。二人は、無言のまゝ一町ほど歩いて行きました。エバンスは、ハアハア呼吸を切らしはじめました。

「手前は喋れないのか？黙つて歩いてばかりゐやがつて！」とエバンスは云ひました。

「一體お前はどうしたんだい？」と、ホツカーは云ひました。

エバンスは、ヨロ／＼と願ひたかと思ふと、突

「介抱位^{くわいはう}にして呉^くれてもいゝぢやないか？」と、
ホツカーは、情なさうに云ひました。

「元通りに金塊を上衣の中へ入れろつたら！」

金塊に手を掛けた途端、ホツカーは拇指の腹の上に、微な刺痛を感じました。掌を捻^ねべてみると、一本の細長い針が見付かりました。長さ一寸ほどのものです。

其時、エバンスは、奇妙な、わけの解らない叫び聲を擧げて轉がりました。

ホツカーは、ボカンと口を開いたなり、一瞬間といふものは、眼を皿のやうにして凝とその針を見つめてゐました。

やがて彼は、エバンスの方へ眼を向けました。エバンスは、身を折り曲げて大地に横たはつてゐました。痙攣^{けいれん}るやうに、時々背中が、曲がつたり伸びたりしてゐます。ホツカーの視線は、エバンスの死骸の足から轉じて、柱のやうな樹々や、蔓草の莖の細

つ倒れてゐるエバンス、それから……。ホツカーには、今こそ、支那人チャンハイのニヤ／＼笑ひの意味が解けたのであります。

ホツカーは、またエバンスの方へ眼を向けました。途端に彼は飛び上りました。もう一つの謎が解けたのです。死に際に叫んだエバンスの苦しさうな、そして嬉しさうなあの叫び聲。それは、助からない生命と知つたエバンスが、友のホツカーまでも同じ死の手に導くことの出来た悪魔の凱歌の叫び聲でした。エバンスは、自分を残してホツカーだけが、金塊を手にして歸ることを呪つたのです。「元通りに金塊を上衣へ運び込め！」と二度までも繰り返したエバンスの呪ひの叫び聲。

「エバンス！」とホツカーは、大聲で怒鳴りました。が、エバンスは、不氣味に、手足をビク／＼させてゐるばかりで、もう呼吸は絶えてゐました。深い深い沈黙が森中を蓋ひました。

日やを通して、朦朧とした灰色の陰影の裡に、まだ微に見えてゐる支那人の、青い服装の死骸へと注がれました。彼は、奪ひとつた例の略圖の隅に記されてあつたあの小さな點線（——）のことを思ひ浮かべました。と、咄嗟に、それが何の符號だつたかといふことが、判然と會得出来ました。

「しまつた！」と彼は云ひました。エバンスを殺した針、今またホツカーの拇指に刺さつた針。それは、ボルネオ土人が、吹筒に入れて使ふ毒矢と同じものだつたのです。地圖の隅の方に書いてあつた點線（——）は、毒針を意味する印だつたのです。

今こそ彼は、チャンハイが、絶対に金塊の安全なことを信じてゐた理由が判りました。凡そ金塊を持ち出さうとする者の手や身體には、必ずこの毒針が刺さるのです。あの月光の下で、チャンハイから秘密を明かされて、しかもチャンハイを出し抜いて金塊を手に入れようとした死骸の支那人、眼の前に打

ホツカーは、狂氣のやうに拇指の腹の、小さな淡紅色の傷口を吸ひはじめました——可愛い——生命のために——

が、間もなく彼は、兩腕と兩肩とが妙に痛んで來るのを感じました。指は曲げることさへも困難になつて來ました。彼は、吸つたことが、何の甲斐も無かつたことを悟りました。

突然彼は、身を屈め、重なり合つてゐる金塊の傍へ腰を下し、兩腕を兩膝の上に置き、兩手の間に顎を凭せました。そしてまだビク／＼と動いてゐるエバンスの身體の上に、凝乎と双の瞳を据ゑました。微な痛みは、咽喉の方へと擴がつて行つて、それがだん／＼強くなつて來ます。

頭上遙かに微風が縁を動かして、名も知れぬ花の白い花辨が、間を通して靜に散つて來ました。

（をばり）



童謡

野口雨情選

(大人篇)
いのこもち(賞)

大阪 阪野 潤

ボツカリ河原の
いのこもち
ボツカリ芽が出て
春が来た
さむがり雀は

簾の中
寒い寒い
よう出ない
河原の河原の
いのこもち
ボツカリふくれて
春が来た
(註。いのこもちとは、ねこや
なきのこです。)

畦豆と野雀(賞)

和歌山 檀上 芳花

畦豆や 莢から
はじけてた
野雀 それ見て
とんで来た
お日様やんはり
照つてゐた

畦豆や やつぱり
はじけてた

桃の花

大阪 名方 和郎

桃の花綺麗に
咲きました
もう直きお雛様
お祭りよ
蕾もちら／＼
綺麗です
桃の花綺麗に
咲いたから
お雛様お祭りや
もう直きよ

狐の嫁入り

山形 山口 喜市

狐の嫁入り
夜更け時
雨夜も傘
いりませぬ

チラチラ提灯
そりや見えた
すゝき穂 ふり振り

そら續け
狐の嫁入り
雨上り
星さん それ見て
笑ひさう

石たゝき

水月 はさますな子
ちびで おしやまで

石たゝき
叩くよ

たたくよ
石たゝく

たゝいて
たゝいて

石たたき
石がおかねに

なるなれば
叩けよ

たゝけよ
石たゝき

ちびで おしやまで
よくたゝけ

赤い實

島根 三島 定市

野原の細道
みぞれあめ
朝からしよぼ／＼

巡禮さん

札幌 吉岡 一郎

ふつてます
歩いて疲れて
巡禮さん
お手々がまつかだ
つめたかろ
まちは
まだ／＼遠かろに
ひとりでさむかろ
巡禮さん
みぞれ
しよぼ／＼野の道は
晩までさびしく
ふるだろな

仔山羊

東京 内山よし路

山羊 山羊

秋の日
空の高い日

東京 日向 桃

秋の日

水の中に
うつゝてゐる空
深い深い

北山おろし

岩手二關まさみ

おゝさむ

さむい

北山おろし

はた織

ばあさん

ばあつたんこ

今日も

朝から

はた織だ

ばあさん

つめたから

小法師

神奈川 手塚 敬三

お山の

お山の

小法師は

お里の母さん

戀しくて

泣き泣き

釣り鐘

つくたとさ

母さん

近藤 健二

山の上
ビカリ



ビカリコ
光つてゐる
彼の山越えれば

一三四

なつかしい
母さん私を
待つてます

お星さん

母さんに

宜しく言ひな

みの虫

静岡 賤機多味男

顔お出し

コンコン小雨が

あがつたに

箆着て箆着て

箆虫は

窓をしめて

おひるねか



讀者だより

▼御誌一月號の盛装、その内容のすばらしき諸先生の力作に、私は心からの讃仰をさげます。就中寺内先生の表紙、岡本先生の口輪風おげは、すばらしい出来栄、野口先生の童話、それに童話では、愛犬物語に尾なし鼠の續きをおまち申します。春淺い頃とホワイト・ハウス物語は感激なしにはよめませんでした。編輯の諸先生、斯様な力作で毎號飾つて下さいませう、平にお願ひ申します。(東京 鐵磨)

▼木が芽を出し始める。三月の太陽が地上に愛撫の光を與える。春が来たのだ。金の星の昔縁。沖野岩三郎先生は、私の母校である、土佐の中学校で、面白いお話をして下さいました。ニコニコと優しい先生のみ姿に接した時、如何許

り私たちの胸は、潤つたであらう。愛讀者諸君。幸に御覽聞あらん事を(東京市 堀田かつの)

▼一月號を悦しく拜見しました。島田信一君の推薦童話『夜の出来事』に、すつかり敬服しました。題材と言ひ、個み方と言ひ、またその童話風に洗練された描寫と言ひ、ほんとうに尊いものです。私はこの童話に於て、ユーモアの中に潜められた哀しき人生の涙を――作者の純情な――ひしひしと胸に迫るを感ぜずには居られませんが。今迄の傳説の焼直し童話から一歩進んで、斯うした貴い創作藝術童話を推薦して下さつた齋藤氏に、心からお禮申し上げます。いづれそのうち、私の貧しい作品も是非見て頂きたく希ふて居ります。(東京 奈街三郎)

▼いよいよ冬となりました。東京や大阪の方では、雪などはないでせうが、此方では一面の銀世界です。サンタクロースのお爺さん、寒いか、まだ襦袢かき入つて来ません。一月號の副録の長篇はよう御座いました。雙六は毎晩やつて居ます。飛行しそこれたお爺さんは面白く讀みました。(秋田市 小玉讀之助)

▼「お星さん」は、お星さん、アガタワゴザイマス。ガタコウデモラツテ、トシデカヘウチキマシタヨ。ワレシイ。(トウケウナガサセイ)

▼記者先生、お寒むうございませうが、お星さん御座います。私は金の星は他の雑誌と思ひますが、無邪氣な面白い雑誌だと思ひます。私は今年十五になりましたが、金の星を見ると、セツかハツの子供のやうになつた様な感じがします。私は一生「金の星」の愛讀者であります。美しい其表紙、そして立派な内容にすつかりチャームされた私は、十一月より新しい愛讀者となりました。そして金の星を無二の友として病の床に暮して居ります。十一月で初投書致しました所、書に入賞し、非常に喜んで居ります。あまりの喜びに二三日の内には全快する事でせう。今後ともよろしく。終りに金の星の発展を祈ります。(京都 東政二郎)

▼今度新好治と共に貴社の愛讀者となりました。どうか宜しく。それから妹の房も御仲間に入れてや

つて下さい。(和歌山 斎藤邦一)どうかよろしくがいます。(同 斎藤房)

【地方文藝雑誌誌名録】

北の星 東京市外南品川五ノ一八〇川村方 北の星社

新奥童話 東京市本郷區菊坂町六

一 新奥童話聯盟

一 東京市見玉町二ノ一七

宮尾方 臺灣童話協會

村一五七 憧憬社

憧憬 東京府下北多摩郡砂川

津川山来花

▼雪に埋れた北都信州の峡谷は淋しいものです。正月がまた周つて来ました。私の教へてゐる兒童の童話を御目に懸けます。(信州中

津川山来花) 諸先生並びに諸兄弟にはお變りありませんか。僕も(一月號)から、金の星の愛讀者の一人になりました。なにとぞよろしく御交際下さい。(神奈川 権柄要)

一三五



綴 方
齋 藤 佐 次 郎 選

試験の日 (賞)

東京日本女子大学附属女学校一年

中 島 泰 子

「さあ今日は試験だ。皆本にかり附いたまゝ外へさへ出ない。教室の中は大變だ。『私困つたわ。落第だわ。』『神様ーお助け下さーい。』などゝ方々で言つてゐる。

鐘が鳴つた。皆はもうあきらめたやうな顔をしてゐる。先生が試験用紙を持つては入つていらつしやつた。皆んなが一度にキヤーと

言つたので先生が静かに／＼と少しこわいお顔をなさつた。皆んなは急にヒツソリと静まりかへつた。試験用紙が渡される。

（問題の一幅島縣の東北本線にそつてゐる都會四つお書きなさい。）やさしい問題なので、皆がワーと喜んだ。暫らくの間靜かな教室には鉛筆の走る音だけがしてゐる。やがて鐘が鳴つて、答案を出してしまつて本を開けて『あゝ間違へた、口惜しい。』『合つた合つた。』と飛び上る人もゐる。試験がすんで皆安心して、お辨當をゆつくり食べた。

だい／＼おごし (賞)

山口縣熊毛郡榎田小學校高一年

山下ウメ子

『ゴツトン／＼、米つきえらいな』

『おゝよし／＼。』『一、二の三、』

弟は勢をつけて、お父さんの手ににぎられてゐる網の中にちやんとなげた。『このやうによくなげたら、せはないだかの。』お父さんは弟の方を見ながら、弟が落ちなければよいがと言ふ顔をしながら、網を見てはだい／＼の木を見てゐた。

『おとはん、もうはげたらうかな』

私は米をつきながら言つた。

『さよな、まだはげまい。』『もう何んぼついたらはげやうか。』

『千位ついたらはげるかもしれん。』お父さんは私の方を見もしないで、弟の方はばかり一生懸命になつて見つめてゐる。

『やれ／＼、まだはげんのかいの』私はぐちを言ひながら、キツト

ン／＼またも米をつくのであつた。

『おとはん、えーで、とほけんこと。』『おゝよしよ。』『わん、つう、すりつ。』弟は元

氣をつけて網へとめがけてなげた。所が、今度は網へ

私は口の中でこうつぶやいて、足に前より尙一層力をこめてついてゐた。

「トタン」

やがて風呂場の屋根に、何かおちた音がした。『何んだらう。』

私は心の中で思ひながら足を少しゆるめて、風呂場の方を見た。すると弟が風呂場の側のだい／＼の木に登つて、だい／＼を一つもぎそこなつて家根へ落したのであつた。『やゝしまつたな。』弟はしまつたらしく、下の方を見ながら言つた。『とらちやん、こゝへはうかれ、お父はんがうけてやるから。』花庭の方でお父さんが網を手になづつて言つた。

『はん／＼。』弟は輕く言つた。『えゝで、おとはんうけないよ。』

はいつたかと思つたら間違ひ、花庭の池つぼの中に『ドブン』とはいつた。

『しまつた。』弟は木の上で叫んだ、お父さんは『われがひどうなげるからい。』『へでも、しかたがないぢやないで。』『しかたがないぢやうことがあるか。』『はん、今度からはようなげよう。』弟はしぶい顔をしながら、だい／＼の木の枝先の方へ登つた。

大寒小寒 (賞)

東京市東盛小學校五年

後 藤 賢 三

『おゝさむ／＼』おもてを通る人達は、こんなことを言ひながらあるいてゆきます。そのくせ、がいとうにくるまつてゐるのです。僕



『おゝよし／＼。』『一、二の三、』

一 邦



「秋の景」(賞)

秋川 田村 縣村 岩 谷 天 藏

はすいふんさむがりな人だと思つてゐますと、中村さんが來ました。僕のうちは、とこやです。中村さんは頭をかられながら、
「お酉様からめつきり寒くなりましたね。ですけれど、おたくはあたゝかいですね。」といふと、父は「え、しめきつてあるもんですから。だけれど、とくですよ。うちよりあなたの方が、商賣がアイ

く、お金でも出て、ほんぶしんにでもなれでよいのですが、このふけいきではね、アハ、ハ、中村さんがわらふと、父もわらひだします。その中に頭がかれたので、中村さんはお金をはらつて、かへつてゆきます。僕はねむくなつたので、床をしいてねてしまひました。

一三八
麥畑のおもひで

神奈川縣高座郡大野小学校高一年 澁谷能章

それは一昨年前の、秋の事でした。父と私と兄と三人で、牛車にこやしをつんで、あらゝといふ畑へ麥まきに行つた事がありました。ちょうどその日は雨あがりだつたので、道がわるいため、いつものとおり車へのつて行くことができませんでした。

やがてあらゝへついたときには、お天とう様がやつと山の上へ顔を出しかゝつてゐました。三人はいつしうけんめい仕事にかゝりました。父と兄とが、桑をほる役で、私がそれをはこび出す役でした。やがて、おちや時分には掘りをへたので、父が、「やすみし



「生先科仁」

山梨縣 栗原 渡邊 子

つたので、兄も私もだまつてしまひました。すこしやすんで、いよ／＼麥をまきはじめました。私が、父と兄がつんだこやしの上へ、一にぎりづつ、たねを落してゆくうちに、やがて半分以上まきおへました。もうだいぶはらがへつてきたので、ふざけ半分にやつてゐると、父が「今一いさだぞ。」といつたので、又元氣を出してまきはじめました。それでもどうにかこうにかゆうがた時分にはあらましまきをへました。かへりには車に乗つて、兄たちと話をしながらかへりました。もうお天とう様も

ようせ。」といつて、させるを取り出して、たばこをすひはじめました。私は其の間に牛に草をくれてゐました。おひる時分には、すっかりさくちをへて畑がみちがへるほどきれいになりました。兄がべんとうをたべながら「畑の黒いのは、見て氣持がいゝな。」といふと、父が、まじめな顔をして「だから、せいだすもんだよ。」とい

西の山へ落ちて、一點の雲もなく澄みわたつた大空に、まんまるい月が私達をてらしてゐます。私はこうしてみんなで働くくらゐ、たのしい事はないと思ひました。しかし、いつしよに働いた兄は、きよ年、かせを引いたのがもとで、死んでしまひました。麥の芽が伸びる頃になつて、一しほ兄の事が思ひ出されます。

汽車に乗るまで

東京市淺草區墨大町十三 久保田曉藏

『では色々お世話になりました。』と僕は包みを持つて立上つた。すると叔父さんが「停車場までその包みを自轉車にのせてつて上げよう。」と言つた。僕は自轉車にくゝつてもらつて「さようなら。」とお



爺さんに言った。お爺さんは「あさよなら。今度またおいでよ。田舎ちやあ何にも出来んけど、出来るだけの事はすつからな。」と言つた。そして僕は叔父さんと二人で門を出た。

田圃道へ来ると、あせに乾したわらが風でみんな田の中へおちてゐた。叔父さんは「わらが田の中へおちこつちやつたよ。しやうが

お爺さん「ないな。」とこぼされた。砂原に出た時は、夕日が向ふの森にさよならをた。そしてうす黒く富士山がそびえてゐた。僕が、恒宮雨「富士さんが見える。」と、叫ぶ

と答へて、切符を切つてもらつて、ブラットホームへ行つた。するとすぐ汽車が来たので乗込んだ。汽車の窓から、もう叔父さんは歸つたかしらと思ひながら停車場の方を見たが、叔父さんらしい人は見えなかつた。たゞさつきの富士山が向ふの空に、なほ黒くなつて見えてゐるばかりだつた。

日曜の午前

千葉縣長生郡茂原小学校高一
今 關 正 二

昨日の朝、弟とおさらひをすましたら、母が来て「二人で菜の蟲をとりに行つて来てくれ。」と言つたので、弟をつれて裏へ出ました。すると貞ちゃんも来て「どこへ行く。」つてから「菜の蟲を取りに。」といつたら、貞ちゃんが「おれん

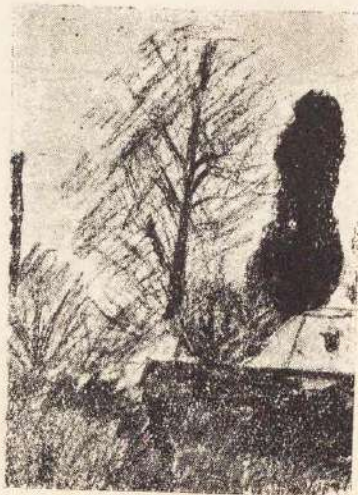
もつれて行つたい。」といつたので三人で出かけた。すると貞ちゃんが「おらたきつけを拾うべ。」と言つて山のきはへ行つて、杉つばのかれたのを拾ひ始めた。私は弟と二人で竹をとがらして蟲をおさへる棒をこしらへて、一株／＼ていねいに見なければ、蟲が一匹も居ませんでした。「貞ちゃん。」とよんだら、貞ちゃんが杉つばをた

くさんかゝへて、山の中からごそごそ出てきました。そして「お、脊中がかい。」といつて體をもちもちやつて居ました。すると弟が、からすうりの紅いのを三つ四つ持つて来てみせびらかすやうにして「まだたくさんあるけんが、杉の木の上からまつて居て取れねえや。」と言つた。貞ちゃんが「どこへある。」と聞いたら、弟は少しは



「景風」なれた杉の木をゆびさして「あの木だよ。」といつた。すると貞ちゃんが「ちやーおれが木へ上つて取つてやる。」といつて、杉の木の方へかけだしたので、私も弟といつしよにかけ

て行きました。見ると杉の木には、まだたくさん紅いからすうりがなつて居ます。けれども其の木は畠のしたのくぼ地のすみにあるのです。ですが貞ちゃんは「へいさだ。」といつて、其の深い所へおりて、やつと木の枝へとびつきました。木のでつべんに上つて、いっしやうけんめいにかからすうりを取つてゐたら、ひどく風が吹いてきて、杉の木を大地震のやうにふり動かしました。貞ちゃんは杉の木にしがみついて居ましたが、風がやんだら羽織のかくしをふくらましておりて來ました。弟は「おれんくつたい。」といつて手を出しました。貞ちゃんは「三つづつにしな。」といつて、三つづつ／＼くれました。弟は喜んで、にこ／＼笑つて居ました。



風 景

来て何のやくに立つ。これではこない方がよい。」とげぼなした。私はせつかくいそいで來て、そんな事をいはれたから腹が立つて、口もきかずにうなづてゐた。忽ち日は山にかく

りがたりと、音を立てながら、家路に急いだ。「もう日がみじかくなつた。三時の汽車がくると、もう間はない。」と父はつぶやいた。家の畑の所まで來て見ると、もう麥が芽を出してゐた。私は「こ、一番先にまいたので、もう芽をだした。」と言つたが、誰も返事をしなかつた。家に歸つた時は、足がしもげてしまひさうだつた。

さつまほり

神奈川縣高座郡大野小學校高一

鈴木 文七

學校からかへると、すぐしたくをして、くわをかついでさつまほりに出かけていつた。かけ足でいつた。日はもう暮れさうだつた。私はつくが早いか、ほり初めた。兄や父は私をばかにして「今ごろ

れやうとして、最後の光りがなんだかくべつまふしいやうに、野をてらした。それもひとしきりで、暗くなつた。足が急に冷たくなつた。私は「あーつめたい。」と言つた。父は「これで今年は、遅れてゐる。いつもの麥まきにはもつとすつと寒い。」といつた。やがて道具を車につけて、やれこのさ、うんとこさとひきだした。車はがた

いねかり

山口縣熊毛郡榑田小學校高一

永見 ミヤ子

此の間學校から歸つて見ると、だれもゐないので、ふしぎに思つてゐたが、お、今日は稻かりじやと氣がついた。念のためにとなりのおばさんにとつと「今日は稻かりじや。あんたも行つてゐない」

けて染つて、からすが鼻へ歸るころ、私と母は夕日をあびてかへつた。夕飯の時に父が私を見て「今日はごくろうさん。」と笑ひながら言はれたので、私ははづかしくなつたので、うつむいた。

からす

神奈川縣逗子新宿 河邊萬次郎方

茅原 久美子

朝早くたき火にあたりながら、「からすの先生かあ、ないない。なき、おしへたカキケコ」とうたつてゐる上を、からすが一羽とほりました。からすは學校へゆくんでせう。そうしてカキケコをならふんでせう。からすの學校を私は見たいな。

夕方さむいので、又たき火をしゐると、からすが二羽なき、

とほりました。きつとカキケコをおさらひしながら、かへるのでせう。

かづひろさん

埼玉縣入間郡第一飯館小學校等三

融 敏 雄

かづひろさんは、もう來年三歳です。もういざつて、どこへでも行きます。「ばあ。」といふと、かづひろさんも「ばあ。」といひます。「いたあ」もいへるし「こん日は」もします。ゆびさしもします。かづひろさんは、今かはいらしいさかりです。かづひろさんは去年の十二月十八日にうまれたのです。もうちきたんじようびが來ます。かづひろさんは朝おきると、いたあと、げんきよくいひます。かづひろさんは、ほんとうにかはいらしい。

といはれたので、家へ飛んで歸つて、さびた鎌をちよう持つて家を出た。行く、稻をかつてゐる人を澤山見た。何にもすることがないので、道べりの草をかまでちよき、ときつては行つた。すると目ざす田が見えて、母の頭の手拭が白く見えた。私はうれしいむねをおさへて、田のあせに行つて、「お母はん私もかるせ。」といふと母はかつてゐた手を休めて「水田ぢやけい、着物を高く上げにやいけん。」と注意した。私は着物を高く紐で上げて、田の中へ入つた。一つしよけんめいにかつてゐると、母が私のかつた稻のたばを見て「まるで佛様へ上げるお花のやうじや。」といつて笑はれた。私は今度こそ笑はれまいと思つて手をやすめすにかつた。西の空が夕や



通信

自由畫選評

山本 鼎

△齋藤邦一君の『山中の景色』（推薦首席）
デッサンに力のある處なとる。毛糸をまいたやうな描きぶりも一特色だ。もつと濃淡の照應を注意して描くやうにすると、繪に奥行きがつくらう。此繪では木々の黒い幹が生命であるが、目立ちすぎはしないが、見れば色も筆も力がつてよい水繪であるが、全體調子に濃くて印象が活きない。トーンの變化を見てないからである。
△渡邊きみ子さんの『仁科先生』 彩はな

幼年詩選評

若山 牧水

▼今月はいつもより数が少なかった。ことに學校組が少なかった。が、出来はいつもどほりであつた。
▼ほんとに子供のすなほな正直な歌を見てゐると心がたのしくなる。たゞ、ともすればいやに惡達者にならうとするのが、こわい。さうかと云つてからつづけたでも困るし、其處が指導者の骨の折れるところである。
▼一篇々々の批評は本欄にしておくから、此處には略く。

綴方選評

齋藤 佐次郎

るものではありせんか。
○山本みゆきさんの『雀の死』は例の通り上手です。しかし此の作者には餘り上手に書かうとしない事を望みます。後半など作り過ぎてゐて却つて面白味がなくなつてゐますから。

童話の選後に

齋藤 佐次郎

▼めづらしく大層い、作を目へきました。土橋里木さんの『蚤と人間』と『井戸が使へなくなつた譯』の二作です。
▼童話も、いつまでも王子や王女の話でもなくなりました。少年少女達の胸を打つには、（幼い人は別として）相當現實性の豊かな作でないともう駄目になりました。しかし、必ずしも現實性の豊かなものがいいといふ譯ではありませんが、現在はいさういふ時代が來てゐるのです。それで、私が選をする場合にも、讀者の要求を度外視する譯には行きませんから、その標準でやります。
○前述の意味からいつて、『蚤と人間』及『井戸が使へなくなつた譯』の二作に興味をひかれました。先づ題からしてありきたりの童話ばなれがしてゐます。表現及内容

か／＼うまくとれて居るが、如何にも鉛筆が淡すぎる。もつと濃く鮮やかに描ける鉛筆をお使いなさい。それがなかつたら墨で描く方がいい。
△雨宮恒之君の『おばあさん』一寸うまいスケッチだ。髪、着物、バツクなどはよくない。
△小川明君の『風景』色の感じの軟が味に美しさがある。
△融敏雄君の『風景』活潑な描きぶりに美しさがある。（十二月）

にいたつては會一層さうです。

○『蚤と人間』は今月號に推薦しましたから、おわかりでせうが、土橋さんのこれまでの表現法とは格段の差があります。新味があるといふ事以外に、此の内容に頗る適しいものです。殊にその組ひどころにいたつては、頗る面白いもので、推薦作として十分價值が認められます。

○伊澤幹雄さんの『井戸が使へなくなつた譯』は狸なかいいたのですが、同じ狸を畫くにしても、その取扱ひ方が型を破つてゐて面白いのです。狸といふと、大抵は人化すやうな話ばかりですが、この狸はお伽断の狸でなくて、本當に生きた狸であるところに興味を感じました。全體をお希さんの話として現しただけに、一寸表現にこたひたしたところのあるのが、缺點といへば缺點です。

○青柳和夫さんの『或る驛長の話』は、短いために折角の材料を十分に活して表せてゐないうらみがありますが、しかし、凄味は相當感ぜられました。これなども、新しい行き方の一つでせう。

▽中島泰子さんの『試験の日』は巧いと思ひました。最初の三行位の間に試験の日の教室の騒ぎや、皆な心配してゐる心持も十分にあらはしてゐました。それから先生が入つて來た時の有様、また問題が案外にやさしかつたので、生徒達がウアアと騒ぐ有様など、短い言葉でよく現してゐます。
▽山口縣の鹽田小學校の作は大體よくそろつてゐます。中で山下ウメ子さんの『だいいい』を挙げました。此の落ちついた、堅實な筆法は十分に賞めたいと思ひます。
▽東條小學校の作も澤山ありました。しかも同じ題で皆な作つたものだけに、各々の力がよくわかります。『大寒小寒』といふ題に對して二人の男の會話で冬の心持を現させた後藤賢三さんの作は、捉へ方が大層面白いと思ひます。又、冬の氣分だけでなく、世の中の有様が、自らその會話の中から示されてゐるなど、尙面白く讀みましました。
○澁谷龍章さんの『夢畑の思ひ出』入賞作に匹敵するだけの力のある作です。
○久保田曉藏さんの『汽車に乗るまで』すなほな作風です。かういふ書き方は好まです。今關正二さんの『日曜の午前』もまた、鈴木文七さんの『さつぷり』も同様です。
○可愛い作を二篇入選にしました。芥原久美子さんの『からす』融敏雄さんの『おひろさん』共に無邪氣な、いい氣分のあ

編輯室より（記者）

紀念品贈呈

童話號推薦童話十二作家へ

○童話號推薦童話十二作家に贈呈すべき紀念品について、爾來慎重に詮議中でありましたが、この程漸く決定を見るに至りました。

○それは、選者野口雨情先生肉筆の短冊を贈呈する事です。先生は、御多忙中にも拘はらず、本社頼ひを御快諾下さいまして十二枚の色とり／＼の短冊に、先生の最も會心の作とせらるゝ童話を御揮毫下さいました。

○その出来榮えに就きましては、此處で喋々とする必要はありません。童話號好個の紀念として、皆様の書齋に、何時までも輝く事と思ひます。

○就きましては、御住所の變つたお方もある事と存じますから、御手数知して現御住所を、至急本社宛御知らせ下さい。

○だん／＼春が近づいて來ました。野に出に、緑の芽を見るのも、もう間のない事です。

自由書掲載外佳作

長岐四子(大阪) 椿原 英次(福岡)
小堀和男(埼玉) 岡村 眞緒(東京)
山村加枝子(熊本) 小林 拾三(埼玉)
土籾 繁雄(東京) 加藤 重三(埼玉)
河西 良子(長野) 森本 康雄(熊本)
筒井 清次(京都) 鈴木 三子(山梨)
齋藤 邦一(和歌山) 石井 佐市(三重)
安藤 愛子(山梨) 渡邊 さみ(山梨)

幼年詩掲載外佳作

杉本十可子(千葉) 森くわ子(千葉)
中坂石次郎(東京) 坂田てるな(東京)
戸島 勲(山口) 遠藤つるる(山形)
北村 政夫(東京) 石木リヤウ(千葉)
木村 勇(山口) 鈴木とし子(千葉)
加藤 厚(熊本) 山本みゆき(滋賀)
大蔵 利雄(東京) 桑田 操(山口)
沖津 清純(東京) 宮本 學(熊本)
茶本富美子(神奈川) 齊藤 邦一(和歌山)
太田吉郎(岐阜) 河野正三郎(朝鮮)
山本 保雄(長野) 久保田曉藏(東京)
金子淺五郎(東京) 伊藤 秀三(福島)

童謡掲載外佳作

石井 秀峰(三重) 江崎 進(東京)
峠田 準一(山口) 沖津 清純(東京)
吉川 行雄(東京) 館岡 行雄(神奈川)
吉岡 一郎(北海道) 松林 智恵(佐賀)
行宮 茂山(山梨) 山中津義夫(栃木)
手塚 敬三(神奈川) 高橋 年路(岐阜)
鈴木 英子(東京) 坂口 生芽(千葉)
伊藤 保幸(長野) 山川 徳(大阪)
田邊 信靖(朝鮮) 若衣ひろし(大阪)
岡村さる(長崎) 腹農多味男(静岡)
三島 定市(島根) 河邊詩美子(神奈川)
荒木 清治(福井) 小玉 謙之助(秋田)
加藤 財一(岐阜) 北村 政夫(東京)
園田 芳郎(和歌山) 宮本 範吉(熊本)
日向 桃子(東京) 松井 潤(大阪)
都築 雅夫(神奈川) 大塚 貞三(京都)
香山 洋(東京) 河野 眞吉(朝鮮)
船越 淳次(栃木) 伊藤 信吉(群馬)
三浦榮之助(東京) 仲見多見治(千葉)
船越 厚(栃木) 三宅 安男(静岡)
矢野 義晴(宮崎) 三浦 肇(東京)

童謡掲載外佳作

山田 稔(東京) 遠山 茂登(長野)
加藤 重三(埼玉) 海達 公子(熊本)
時岡 マス(福井) 伊藤 保幸(長野)
中村 渉(山口) 吉元 正(千葉)
飯尾 男(不明) 島野 半平(神奈川)
山村かえ子(熊本) 中坂石次郎(東京)
山根 榮治(神奈川) 山根 明(山口)

〔大人篇〕

伊澤 幹雄(神奈川) 青柳 和夫(神奈川)
峯 影夫(長野) 田賀かすな(東京)
矢野 功夫(朝鮮) 小町 ゆみ(神奈川)
佐藤 武夫(東京) 木村 淳治(北海道)
青山志津夫(神奈川) 尾本 俊三(兵庫)
島田 信一(東京) 原田小太郎(神奈川)
中山 眞市(長野) 大橋 梅(千葉)
福島星一郎(東京) 萩原ひろし(宮城)

〔子供篇〕

葛木 和夫(高知) 川西 恒雄(広島)
岡部 治郎(秋田) 小泉 順一(島根)
田中 初夫(朝鮮) 増田 實(茨城)
小林 重義(東京) 柳瀬まさし(和歌山)
鯉淵 武司(茨城) 鎌合 隆起(静岡)
伊東 秀三(福島) 川島 秀雄(東京)

〔子供篇〕

水賀 幸夫(和歌山) 百瀬 俊雄(長野)
横川 重三(埼玉) 横川 重三(埼玉)
中西榮之助(三重) 相島 進(広島)
山本みゆき(滋賀) 遠山 敬子(長野)
相島 義子(広島) 森本 康雄(熊本)
藤城 あき(愛知) 岩谷 貞三(秋田)
北島 正三(東京) 増田 實(茨城)
太田 ヨシ(埼玉) 山本 保雄(長野)
齋藤 茂治(山形) 富永 信臣(千葉)
藤本 政義(奈良) 吉川 四郎(埼玉)
齊藤 茂治(山形) 吉川 四郎(埼玉)
若林 喜美(岐阜) 内山 宣男(千葉)
河本正三郎(朝鮮) 中蔵 利夫(京都)

新誌友名簿

齊藤保二郎(秋田) 遠藤 逸平(山梨)
鈴木 英子(東京) 吉野誠三郎(東京)
森 律三郎(北海道) 伊藤 三郎(三重)
竹川伊之助(静岡) (以下次號)

新らしく出た本

世界名篇物語 赤穂義士物語
叢書第一編 (足立朗氏著)

赤穂義士の仇討は、外国にまで鳴り響いて、誰知らぬ者もない話です。しかし、花やかな話だけに、後世に誤り傳へられてある事の多いのは遺憾です。本書は著者が史實に因つて、仇討の起りから、義士の本國を逃げてからの終りまで、煩を省き、要を摘み、委曲を盡くして、簡明に書いてある。これを見て、著者の並ならぬ苦行でも面白くてためになる、好讀み物として推薦する位打ちのある書です。(四六列、一八三頁、定價九拾錢、東京市外上駒込三八、金蘭社發行)

農民童話集 黄金の馬 (森口多里氏著) 東北地方の農村に傳はる純朴なる童話、三十篇を集めたものである。黄金の馬、瓜子姫の話、豆になつて食はれた鬼婆の話、娘がタニシの嫁になつた話等、表裏を讀んだだけでも面白さうではないか。それに太田三郎氏の美しい三色版挿畫が多数挿入されて、一段と光彩を添へてゐる。大人にも子供にも、必ず歡迎される良書として推薦する。(三五列、一四八頁、定價壹圓、東京市外上駒込三八、金蘭社發行)

童話集 ノアの船

ノアの船の外九篇を収めてある。著者獨得の童話は、大人が讀んでも、小供が見ても、興味の豊富な、夢想的、現實的、各篇とどりの面白味があります。それに挿畫と装幀の美は、他の類書に見られない趣があります。家庭の上品な讀み物として、動めたい書であります。(四六列、一七九頁、定價金二圓、芝區八幡町二五、厚生閣)

◆ シーザー

今度金の星社から、世界少年少女偉人傳大系の第二編として、シーザーの傳記が發行されました。シーザーは皆様に御存知の通り、古代ローマの英雄です。本書には、シーザーの生れた時から最後に議事堂に於て刺殺されるまでの、數奇な極めた一生が、繪巻物の如く展開されてゐます。ゴッロ達征や、エジプト征伐の章を讀む時、皆さん血はどんなに湧き出でます。また最後に、アントニイの悲壯なる葬式演説の章を讀む時、皆さんは必ずやシーザーの悲しい運命に同情して、涙なきを得ません。本書は實に、少年少女の爲に書かれた、最もよきシーザーの傳記であります。(四六列、一七九頁、表紙口紅三色版、挿畫八葉、定價九拾錢、東京市外駒込町の星社發行)



金の星社 三月號

出版だより

「金の星」叢書 發刊に就て

前月號に於て本社出版部が一大決心を以てのぞむ出版計画に就てお知らせいたして置きましたが、その叢書の名は、「金の星叢書」といふ名のもとに續々と發行いたします。

計画の内容はほぼ前月號に於て發表いたしました通りであります。この計画こそは、本社出版部が数年前からの計画であつて、また他社でも随分とこれと類似した計画を持つたものもありましたが、その仕事の實行に非常な困難のあるために、遂に今日まで何人も着手することの出来なかつたものであります。

本社に於ける少年少女の讀物に世界的に振興して、いよいよ重要なものにならねばならぬと、

ひから此の出版としては頗る冒險な、大仕事に着手することになつたのであります。

従つて、皆様の御援助にまさればなりません。先づ第一篇をお読みになつて、成る程、こんなに立派な本がこんなに安價に讀めるかといふ事がおわかりになりましたら、どうぞどしどしとお友達の方々にお話し下さつて、此の「金の星叢書」のいゝ本であることをお知らせ下さい。

本月は發行書名をお知らせする筈でありましたが、準備の都合上、次月號を以て發表いたします。

太閤秀吉(近刊)

三島霜川先生著▽定價金九十錢
世界少年少女偉人傳大系の第四篇として近日發行になります。日

少年小説

勞働の少年(近刊)

本の英雄中で最も人氣のある人は恐らく此の「太閤秀吉」でありませう。人間としての偉さは勿論のこと、傳記として讀んで見て、こんなに面白い話はいりません。秀吉の一生は「太閤記」などといふ本になつて傳へられて来ましたが、それ等の本によつて傳へられてゐる傳記は大抵は嘘が多く、作り話が多いのです。

この三島霜川先生の苦心になる「太閤秀吉」は「金の星」で御存知の通り歴史にある三島先生が、秀吉の少年時代から筆を起して、實に變化の多い一生を書かれたものでありますから非常に面白い本です。

いよく發行

母を尋ねて
三千里

「小馬」の復活號いよく發行

「小馬」は、毎月誌友に贈呈する菊二倍判の美しい雑誌です。隅から隅まで、誌友自作の童話、童話、綴方、研究等で埋められてゐます。震災後永らく休刊して、誌友諸君から御催促を受けて居りましたが、今度愈々装ひを新にして、皆さんに見ゆる事になりました。三月下旬には皆さんの御手に入ると思ひます。

誌友諸君、永い間の眠りから覺めて、勢ひよく春の野に飛び出した、「小馬」を可愛がつてやつて下さい。力の籠つた作品を、どしどし御投稿下さい。誌友諸君はどなたでも「小

馬」に投稿する事が出来ます。なほ、小馬に投書する時は、原稿の肩の所に「小馬投稿」の文字を朱書する事を忘れないで下さい。その他、詳細なる規定は、誌友規則にあります。

誌友規則を

お送りいたします

金の星の誌友になりたい方は、本社に御申越し下さい。早速誌友規則を御送り申上ります。誌友には毎月、前述の美しい小雑誌「小馬」を無代進呈致します。その他、誌友には色々な特典と便宜とがありますから、どうぞ奪つて御加入下さい。

日本の兒童と藝術教育

土橋里木

これこそ讀まねばならぬ本です。日本全國を擧げて讀むべき本です。政治家も外交官も、軍人も教育者も、農夫も文學者も、父も母も兄も姉も、ありとあらゆる日本人は、一人も餘す所なく、どんな事をしてでも讀まねばならぬ本です。讀んで貰ひたい本です。私は未だこんなにも人に迫る本を見た事が無い。全く貴社のおつしやる通り、この本を讀まない前と讀んでからとは、誰だつてその思想が變らずにはゐられません。これは單なる、兒童藝術家、教育者の好指針であるばかりでなく、實に、全日本の一大綱領とすべき本だと思ふ。

神野先生は、私共が常々云ひたくてならない心を抱きながら、而もうまく云ひ得ずにあつた事を、この本に於て、實に痛快な程、ビシビシと云つてのけてくれました。只、感謝の外はありません。

懸賞創作募集

父戀し

森の祈り

労働の少年

赤い猫
童話讀本(1)

金の釣瓶

神野先生の重話讀本の第二篇に於て、
この篇には先生の傑作として各地で話さ
れてゐる先生の大將一人は各々金釣し
「一十人の大將一人は各々金釣し」
といふ二つの讀りなど幾度か赤
鉛も忘れられぬ名篇ぞうです。
讀み共には是非御愛顧下さい。

四六判箱入美本
內容一五〇頁
定價金壹圓
送料六錢

振替東京五九五六番
電話小石川三五八七番

[illegible]

四六判箱入美本
內容一五〇頁
定價金壹圓
送料六錢

語れです。作人本黨の主人公は二少年が
銅山の工場の息子としてゐた。父親山に姓
孤兒となつて、その運命を書いた實話だ。
で、うかふ。又とない雄大な長篇物語

味深い。又とない雄大な長篇物語

四六判箱入美本
內容二五〇頁
定價金壹圓貳拾錢
送料 六 錢

會した時、最後の一歩が、祈りの聲、

四六判箱入美本
內容三二〇頁
定價金壹圓八拾錢
送料六錢

[illegible]

四六判箱入美本
內容二二五頁
定價金壹圓
送料六錢

金の星の社 郷町

【意 注】 童 童 【意 注】 綴 幼 自

年 詩 若 山 本 鼎 先生 選

方 編 輯 部 選

課題は何でもかまひません。諸君の日々見たり感じたたり、したこやや
諸君のすきなものを、諸君のすきなやうに畫なり、詩なり、文なりに
してかいてください。一人で何冊出してもかまひませんが、姓名は學
校や學年(または住所と年輪)に、幼年詩や綴方になるべく原稿用紙
用紙は自由畫になるべく兼用紙に、幼年詩や綴方になるべく原稿用紙
(または半紙)に書いてください。よく出来た方には「金の星」特製の
賞品が送られます。次綴り切は二月廿八日(その以後は次綴へ廻る
發表は五月號。宛名は東京市本郷區動坂町三五九番地金の星社。

話 野 口 雨 情 先生 選

齋 藤 佐 次 郎 先生 選

選稿は十五行以内、童話は二十字詰二百行以内、優秀な作品は「推薦
またば」「特選」として發表いたします。推薦の場合は童話はは五回
童話には二回つ、特選の場合は童話はは拾回、童話には五回つ、賞
金として呈します。但し少年少女の創作童話には拾圓、童話には五圓つ、賞
金の星賞を呈します。締切發表、宛名は少年少女の創作と同じです。
原稿には必ず住所姓名を記して下さい。原稿はお返しいたしません。

定價壹冊金四拾錢 送料壹錢五厘
 三ヶ月分三冊 (送料共) 壹圓貳拾錢
 半年分六冊 (送料共) 貳圓貳拾錢
 年分十二冊 (送料共) 四圓八拾錢
 但し新年號は特別號で五十錢ですから、御注文の節はこの分だけ必ず加へてお拂込み下さい。

振替口座東京五九五六番

【送】▽御注文は必ず前金で御拂込み下さい
 ▽送金は振替が一番便利で御座います
 ▽切手代用は(壹圓切手)一割増しです
 ▽第何巻第何號と書いてください
 ▽住所姓名にはつきり書いてください

注意

廣告料は御照會次第お答へ致します

大正十五年二月九日印刷納本(毎月一回)
 大正十五年三月一日發行(一日發行)

東京市本郷區三軒三丁目一五番地
 編輯兼發行人 齋藤 佐次郎
 東京市本郷區神田三丁目一五番地
 印刷人 小端 安之助
 東京市本郷區神田三丁目一五番地
 印刷所 安 堂

東京市本郷區助坂町三五九
 發行所 金の星社

總發行所 東京市五區三軒三丁目一五番地
 電話小石川五三九七八七番

お庭のなかに
 ぼつちりと梅の花がほころびます。
 しろい、しろい 梅の花が咲きます。
 あなたの歯も、
 ライオンねりはみがきで磨きますよ。
 この花のやうにしろく
 美しく光つてきます。

